コズモ第7号　昭和49年8月1日発行(年6回刊)第2巻第7号　　昭和48年12月11日国鉄首都特別扱承認雑誌第1643号

UFOと宇宙

1974
隔月刊　8月号　No.7

コズモ

インドネシアの聖鳥の謎を探る
ガルーダの発見

大ピラミッドはUFO記念碑？

〈天空と大地〉科学シリーズ(5)
●空飛ぶ円盤はGエンジンか？

連載科学記事——
宇宙・引力・空飛ぶ円盤(2)

ウシーダ神を乗せて
天空から降下した
聖鳥ガルーダは
太古の宇宙船か？

●平野威馬雄のマジメシリーズ

円盤に乗った青年のマジメな話

―北海道 宇宙人事件の真相―

▼新刊

北海道に宇宙人出現!!TV・週刊誌等々で話題騒然――目撃者の証言をもとに北海道宇宙人事件の全てを再現 ¥890

ヒューマノイドについてのマジメな話

〈円盤人〉 ¥890

宇宙人についてのマジメな話

¥870

円盤についてのマジメな話

¥780

お化けについてのマジメな話

¥890

送料・各145円

平安書店

東京都中央区日本橋茅場町2―11

電話03(664)0371

振替 東京 92080

世紀の謎 空飛ぶ円盤を究明した最新刊!

空飛ぶ円盤の謎と怪奇

黒沼 健著 定価九八〇円

恐怖の一九九九年―円盤襲撃に対するノストラダムスの大予言、船舶の消失、人間蒸発等目に見えぬ円盤の攻撃と現代科学の範囲ではとらえられぬ怪奇な現象。各地に潜入し対地球戦略を工作する宇宙人の驚くべき実体及び歴史にあらわれた円盤と宇宙人の存在を興味深く紹介する。

空飛ぶ円盤シリーズ

ヒューマノイド 空飛ぶ円盤搭乗者

平野威馬雄編 定価 九八〇円

円盤着陸とその搭乗者に関する顕著な200の事件をとりあげ科学的に究明したJ・バレーの分析と65件の宇宙人の来訪例を分析したG・クレイトンの報告及び注目を引く宇宙人の活動ぶりをまとめる。従来の地球人的観察が、いかに狭い視野と独断に終始していたかを理解せしめる。

空飛ぶ円盤とアダムスキ 久保田八郎編 五五〇円

空飛ぶ円盤のすべて 平野威馬雄編著 八〇〇円

アポロと空飛ぶ円盤 平野威馬雄・荒井欣一著 八〇〇円

空飛ぶ円盤は実在する A・ミッシェル・田辺貞之助訳 八〇〇円

空飛ぶ円盤実見記 G・アダムスキ・D・レスリー 八〇〇円

空飛ぶ円盤同乗記 G・アダムスキ・久保田八郎 八〇〇円

空飛ぶ円盤の秘密 T・ベサラム・久保田八郎 七〇〇円

空飛ぶ円盤の跳梁 高梨純一著 八五〇円

空飛ぶ円盤実在の証拠 高梨純一著 八〇〇円

空飛ぶ円盤の真相 G・アダムスキ・久保田八郎 八〇〇円

これが空飛ぶ円盤だ 平野威馬雄編 八〇〇円

それでも円盤は飛ぶ 平野威馬雄編 八〇〇円

火星からの空飛ぶ円盤 C・アリンガム・岩下巖訳 八〇〇円

空飛ぶ円盤と宇宙人 黒沼 健著 九五〇円

高文社

●東京 文京 本郷5―30 振東141750●

●京都 左京 百万遍 振京23523●

UFOと宇宙
1974
No. 7

コスモ 目次

〈口絵写真〉 メナム川上空の円盤？/茨城県大宮町上空のUFO
福島県喜多方市のUFO（連続3枚組）
星野写真撮中に出現したUFOの4例〈石巻市・名張市・北九州市・仙台市〉
宮崎県のSL上空のUFO？
静岡県伊東市に降下した円盤（連続3枚組）
青森県八戸市のUFO/静岡県富士市に出現した円盤

インドネシアの伝説の謎を探る
ガルーダの発見 黒沼 健 8

大ピラミッド建設の謎とUFOとの関係を推理する
大ピラミッドはUFO記念碑? 志田真人 16

不思議な人影群と火焔を噴く円盤
アルゼンチンの奇怪なUFO着陸事件 26

円盤から手を振る2人の"人間"
アルゼンチンUFO研究会々長 オスカー・A・ガリンデス
海上に着水した円盤! ブラジルUFO研究会々長 ウォルター・ビューラー 31

〈写真〉本物のライティング・ライツ!? 35

●〈天空と大地〉科学シリーズ——5 ■2人の学生の反論に対する回答
空飛ぶ円盤はGエンジンか? 工学博士 橋本 健 36

写真のゴーストはなぜ現われるのか 東京写大助教授 加藤春生 44

UFO＝目撃体験・所感・etc. —応募記事— 48
UFOのライティング・ライツ? 秋山隆/私は気象台からUFOを見た 岩崎秀夫
交流電源による点滅光線 藤田孝夫/超光速は可能か 横川秀博
聖書の神は宇宙人だ 天野邦彦/横浜国大にてUFO講演会開催 野中康弘

科学トピックス 54

連載科学記事
宇宙・引力・空飛ぶ円盤(2) レナード・クランプ 59

国内UFO目撃報告 74

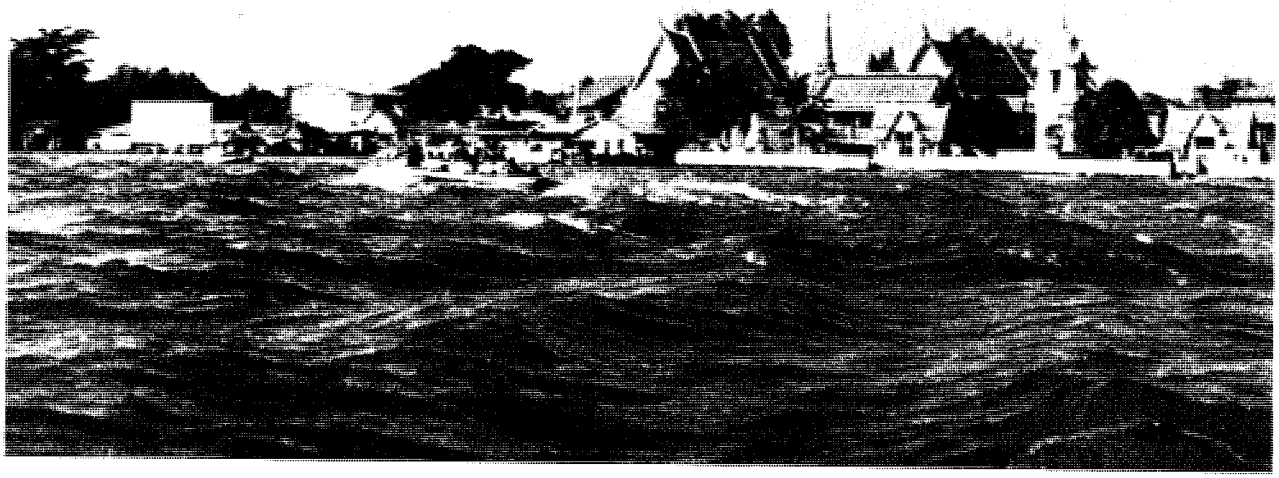
-読者の声-
OPINIONS 80

イラスト 市川淑一
池田雅行

表紙写真
箱根、フジヤホテルにあるガルーダの木彫像。撮影は同ホテルの副支配人・秋山剛康氏。（アサヒペンタックス使用）

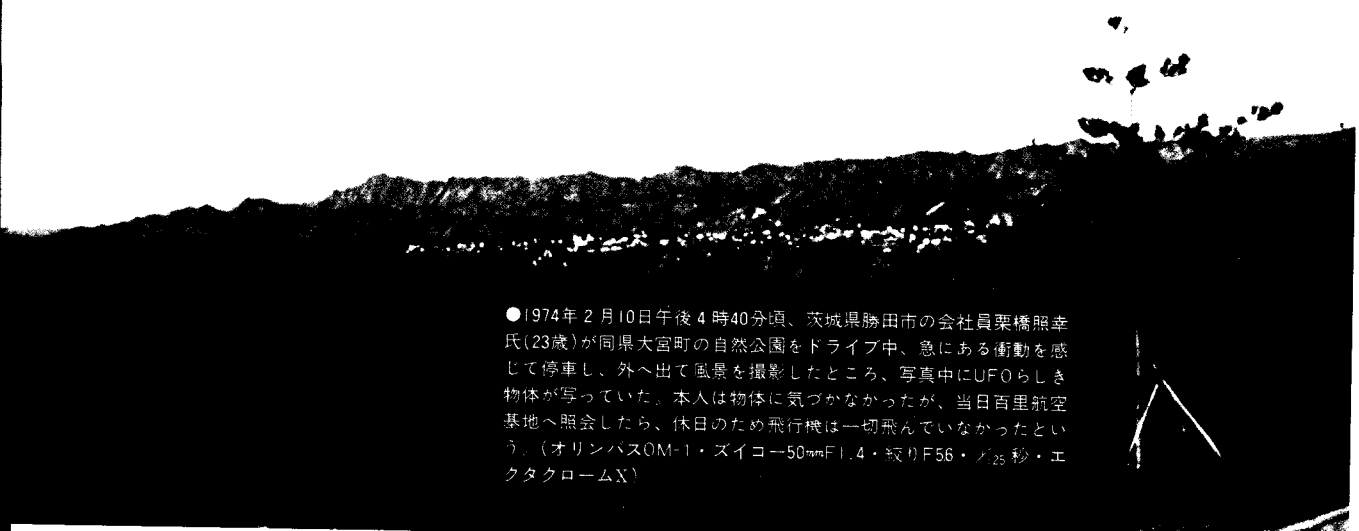
メナム川上空に円盤が出現!?

●大阪府富田林市の高尾明照氏(25歳・会社員)が、1973年3月7日午前10時半頃、バンコク市内を流れるメナム川の遊覧船から風景を撮影したら、円盤状物体が写っていた(左上)。(オリンパスペンF・ズイコー38㎜F1.8・絞りF5.6・1/120秒・コダカラー)　近代宇宙旅行協会提供

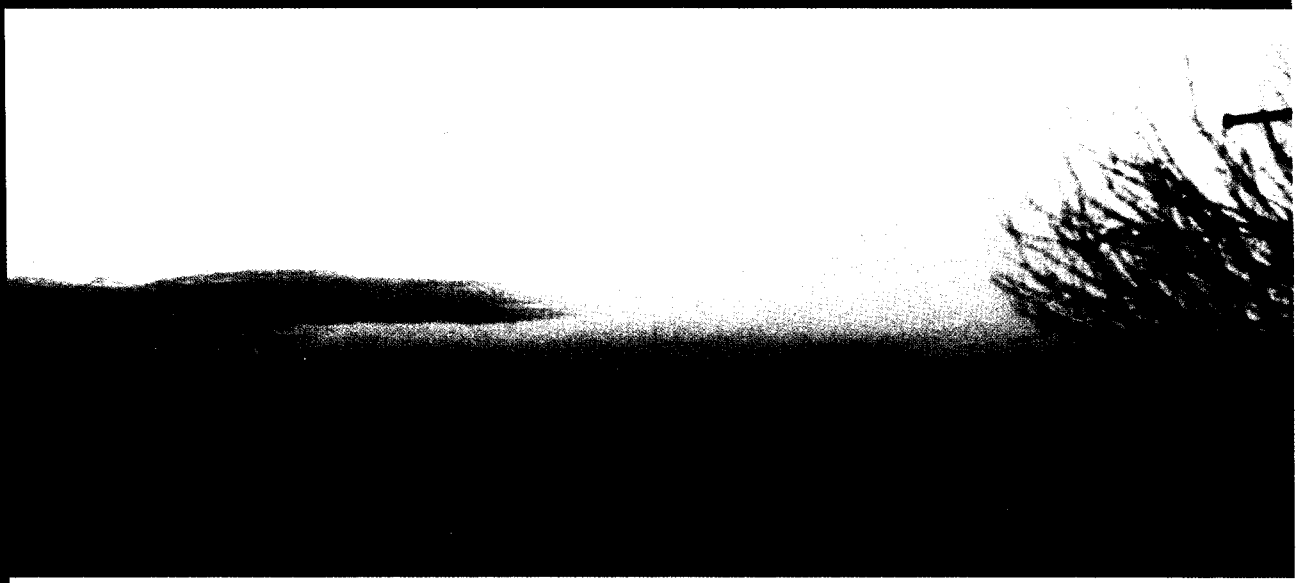


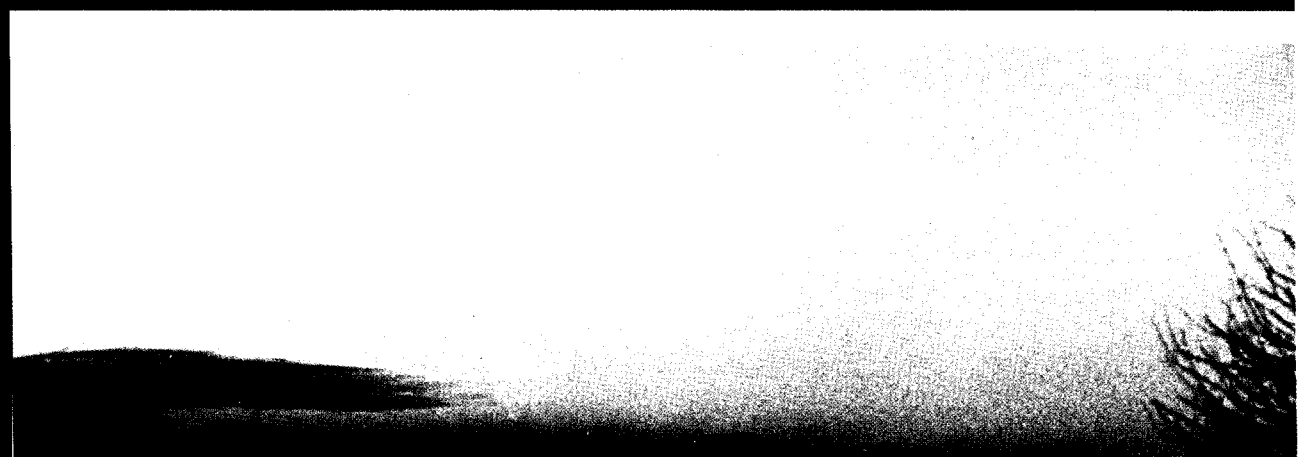
当日飛行機は飛ばなかった——

<茨城県大宮町上空のUFO>(左上の青い光跡を放つ物体)

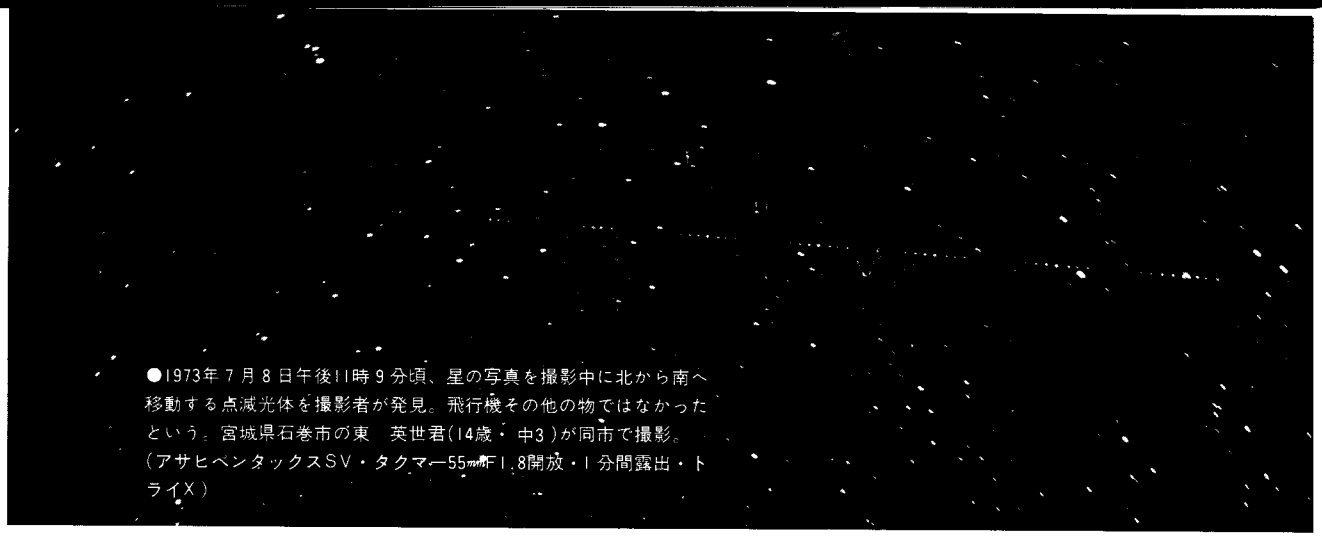


●1974年2月10日午後4時40分頃、茨城県勝田市の会社員栗橋照幸氏(23歳)が同県大宮町の自然公園をドライブ中、急にある衝動を感じて停車し、外へ出て風景を撮影したところ、写真中にUFOらしき物体が写っていた。本人は物体に気づかなかったが、当日百里航空基地へ照会したら、休日のため飛行機は一切飛んでいなかったという。(オリンパスOM-1・ズイコー50㎜F1.4・絞りF56・1/25秒・エクタクロームX)



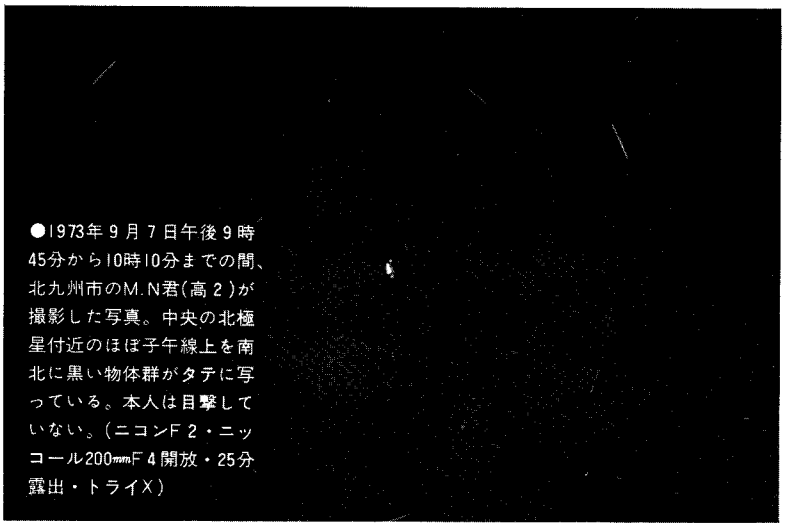


●1974年2月17日午後5時頃、福島県喜多方市の横山健二君(17歳・高3)が母親の永子さん(39歳)と共に無音で飛ぶオレンジ色のUFOを約5分間目撃、その間にこの3枚のすばらしい連続写真を撮影した。上段の写真からUFOがオレンジ色の尾を引きながら右方へ順次移動しているのが見える。速度は100m/sぐらい。推定高度約1000m。(ヤシカエレクトロ35・ヤシノンDX45mmF1.7・絞りとシャッタースピードは自動・フジカラーN-100)

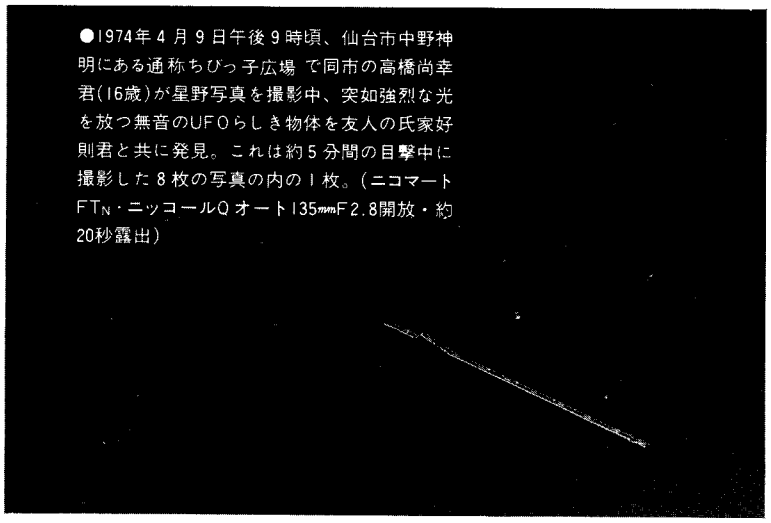


●1973年7月8日午後11時9分頃、星の写真を撮影中に北から南へ移動する点滅光体を撮影者が発見。飛行機その他の物ではなかったという。宮城県石巻市の東　英世君(14歳・中3)が同市で撮影。(アサヒペンタックスSV・タクマー55㎜F1.8開放・1分間露出・トライX)

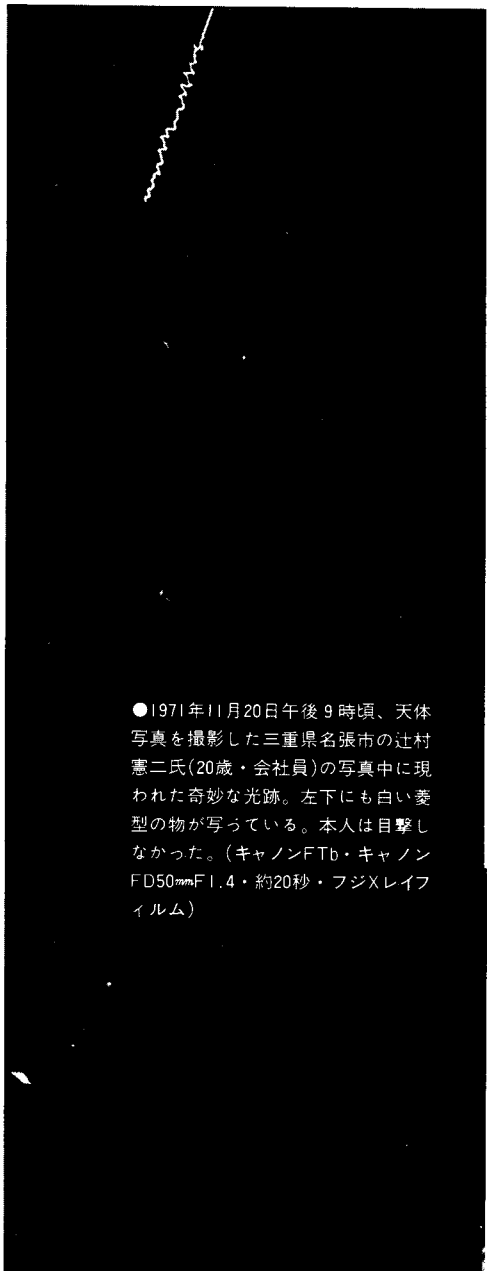
●星野写真撮影中に出現したUFOの4例



●1973年9月7日午後9時45分から10時10分までの間、北九州市のM.N君(高2)が撮影した写真。中央の北極星付近のほぼ子午線上を南北に黒い物体群がタテに写っている。本人は目撃していない。(ニコンF2・ニッコール200㎜F4開放・25分露出・トライX)



●1974年4月9日午後9時頃、仙台市中野神明にある通称ちびっ子広場で同市の高橋尚幸君(16歳)が星野写真を撮影中、突如強烈な光を放つ無音のUFOらしき物体を友人の氏家好則君と共に発見。これは約5分間の目撃中に撮影した8枚の写真の内の1枚。(ニコマートFT$_N$・ニッコールQオート135㎜F2.8開放・約20秒露出)



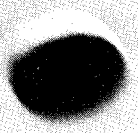
●1971年11月20日午後9時頃、天体写真を撮影した三重県名張市の辻村憲二氏(20歳・会社員)の写真中に現われた奇妙な光跡。左下にも白い菱型の物が写っている。本人は目撃しなかった。(キャノンFTb・キャノンFD50㎜F1.4・約20秒・フジXレイフィルム)

またもSLの上空にUFO…？

●1974年2月22日午前9時20分頃、宮崎県の日豊本線「佐土原―日向住吉」間でSLを撮影していた静岡市の有馬義春氏(24歳・会社員)の写真に写っていた奇妙な物体(矢印)。本人は撮影時に気づかなかった。ネガを検査した結果では飛行機や鳥などとは考えられない。
(アサヒペンタックスSP・SMCタクマー55㎜F1.8・絞りF16・1/250秒・トライX)

円盤伊東市に降下！

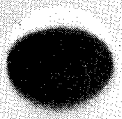
●絶好のチャンスをつかんだ中学生



●地上10数mまで降下

1973年12月16日午前11時頃—

●静岡県伊東市の白橋悟君(13歳・中1)が西方上空から自宅付近に降下して空中に停止した直径70cmぐらいの円盤を友人の鈴木孝司君と共に目撃。白橋君がカメラを向けると丸い不思議な物体は東方へ飛び去った。その動作を連続3枚にキャッチしたこの写真はすばらしいものである。(ホンコン製カメラ"リャン"使用・絞りとシャッタースピードは自動・フジフィルム)



●地上約6mの位置で停止

●自宅隣りの倉庫を越えて飛び去る一瞬

青森県八戸市に出たUFO

多数の人が目撃して大騒ぎ!

●1974年3月27日午後9時頃、中心が白、周囲が赤オレンジ色の奇妙な物体が同市小中野町北横町上空に出現したのを多数の人が目撃したが、これは古川清人君(14歳・中2)がそのとき撮影したもの。この物体は約2時間見えたが、その間物体の周囲に白い小さな物が何個も出現したという。(ミノルタSR-T101・MCロッコールPF55㎜F1.7・ネオパンSS)

今度は富士市に出現!

上空から撮影者を観察?

●静岡県西伊豆町の波多慎一氏(29歳・会社員)が所用で富士市へ出向いた1974年4月26日午後3時半頃、市内で突如低く舞い降りた円盤を見てたまげた同氏が大あわてで撮影したもの。望遠レンズを携行していたがレンズ交換どころかシャッタースピードのことまで考える余裕はなかった。低速シャッターのため写真がブレているが、帽子型の物体が民家の上空を約1分間フラつき運動をし、あたかも撮影者を観察しているような気配だったという。(アサヒペンタックスSP・スーパータクマー50㎜F1.4・絞りF8・1/60秒・ケンコーY2フィルター・コニパンSS)

ガルーダの発見

●インドネシアの伝説の謎を探る——

ウシーダ神を乗せて天空から降りた
聖鳥ガルーダは太古の宇宙船の象徴か？

黒沼　健

箱根、宮の下のフジヤ・ホテルの広いロビイの壁には、数点の油絵が懸けられてある。大きさは大小さまざまで、横幅二メートルを越すような大きなものもある。

画風もいろいろで、私の好きなのはわずかである。

あるとき、私は、それらの作者の名を聞いて驚いた。

モーリス・ドニ（一八七〇～一九四三）、ジャン・ガブリエル・ドメルグ（一八八九～一九六三）、カモワン（一八七九～一九六五）、ヴァン・ドンゲン（一八七七～一九六八）……といった錚々たるものである。

「時価億を越すものでございます」

とマネージャーは説明してくれた。

ここのロビイの昼は、静かなので、私は読書の折にはよくここへ来る。

夜の食事後、泊まり客の大部分は、それぞれ連れ同士ここに集まって寝るまでの時を過ごしているが、それらの人たちは、ほとんどが壁の名画に無関心である。お互いお喋りをしているか、野球や拳闘でもあろうものなら、テレビを食い入るように見ている。

私はそれを見て、彼らの教養のなさを憐れみたくなることもある。

もっとも最近、日本へ来て紙幣ビラを切る外国の旅行者には、ブラジルやオーストラリアあたりの農場成金さんが多い。日本の農協さんが外国へ行っての行状と同じである。

翼を持つ奇妙な木彫像

その夜は珍しく騒々しい外人の団体客がなく、食後のロビイはひっそりしていた。

私は夕刊新聞を読みおえて、さて部屋へもどろうかと椅子から立ちあがったとき、妙なものを見た。

壁の上部、天井に近いところに棚のような凹所がある。そこに埃まみれの木彫の像を見たのである。それが普通の像と違っているのは、頭部である。頭髪と思われるものが、「怒髪天を衝く」といった形容そのままに、すべて突き立っている。それから口が、大形の鳥の嘴そのものである。一見、烏天狗の像と言いたいが、それにしては怒髪の部分が違う。

フロントには、夜間勤務のナイト・クラークが居残っているだけで、役付きのものはみんな帰宅している。

そこで、この木彫の像の詮索は翌日のことにして私は部屋へもどった。

翌日、朝食後、私はロビイで会ったマネージャーに、棚のような凹所に無造作に置いてある木彫の像を指さして、

「あれは、どういうものなのです」

と訊ねた。するとマネージャーは、

「あの品は、前の社長が東南アジアを旅行した折に、ジャワで手に入れたものでございます」

と言いながら、

「そのときいっしょに買って参りましたものは、あちらの部屋のケースに飾ってございます」

と私をケースの前に案内した。

そのなかのものは私も一度見たことがある。ガムラン音楽の楽士たちの彩色を施した土人形と、ガムランの踊手がかむる大きな面である。赤と緑と黄で度強く彩色したもので、私も、南方土産にもらったものを五個ほど持っている。

その面は人の顔というよりは、悪魔の顔といったほうが応わしいもので、口は烏天狗のそれのように尖っている。

ケースのなかの品は、どれも私が一度は見たものばかりである。

私は気になっている棚の木彫の像をおろしてもらった。埃を払ってからテーブルの上へ持ってきて見ると、私は意外なことを発見した。

その二、三日前、私はドイツの友人から二冊の本を贈られた。「神々は宇宙人か」と「過去の解けぬ謎」というのである。著者はエーリッヒ・フォン・デニケンという若い研究家である。そのなかには、原始人の岩絵（岩石に彫り

つけた絵）の写真が諸所に挿入してあるが、説明によると、そのどれもが、宇宙人または宇宙船の搭乗者であるというのである。

デニケンによると、その宇宙人たちは、いずれも特殊な宇宙服を身につけているという。しかも、その宇宙服には、小型で精巧ないろいろな機械が取りつけてある。そして頭部には通信用のアンテナをつけている。素朴な未開人の岩絵には、頭に短い棒のようなものが、十本ばかり放射状に描いてある。

●ガムランの踊りに用いる面

私の目の前にあるジャワの木彫の像の頭部には、先に怒髪天を衝くと形容した頭髪のようなものが、十数本ついている。最初は頭髪と思ったが、私には、それがしだいに頭髪以外のものに考えられてきた。

では、何か？　右のデニケンのいうアンテナである。それから普通仏像の光背に相当するものが、数個の羽根であることがわかった。つまり翼である。これは空中を飛行するときの道具である。（**表紙と八頁の写真参照**）

空を飛びながら、他のものと通信することができるといったら、もはや立派な宇宙人というほかはない。

そこで私はマネージャーに、

「これは宇宙人の像ですよ。あんな棚の上に置かないで、もっと大切に保管しなければいけませんね」

と言った後、私はその宇宙人の像を、いろいろな方向からカメラにおさめた。

これが今年の一月のことである。

私は帰宅後、木彫の像の写真を二枚ほど引き伸ばしてホテルへ送っておいた。

私は五月一日生まれなので、誕生日には箱根へ行って、家内と二人でささやかな誕生祝いを毎年することにしている。

五月、例年の通り新緑の箱根を訪れた。部屋へ案内される途中、廊下の売店の前を通りかかると、その傍の壁に、私が先に送った二枚の引伸写真が貼ってあり、それに次のような説明が、和英両語で書いてある。

「この写真は〝空飛ぶ円盤と宇宙人〟（有信堂高文社刊）の著者の黒沼健氏が、当ホテルのロビイで再発見したものであります。黒沼氏によると、この奇妙な像は、大古の宇宙人を表わしているということです。この宇宙人は、現在ロビイの棚の上から皆様を見下ろしています」

なかなか凝った紹介である。

午後には、客はたいてい外出してしまうの

で、ロビイには人気はほとんどない。

私は、私のいうところの宇宙人の木彫の像の置いてあるロビイの棚の、真下のソファに陣取って、果たして木彫の像は、私の推定するように宇宙人を象ったものであるかどうかについて、私の知る限りのデータを脳裡に浮かべていた。

そのときロビイの外の廊下を通りかかった副支配人の秋山君が、私の姿を見てなかへはいって来た。そして、

「この宇宙人は、すっかりお気に召したようですね」

と言った。

「私は気に入ったというより、この像のことをもっとはっきり知りたいのです」

と言ってから、

「ホテルの案内所には、方々の国の宣伝のパンフレットや、航空会社の広告がよくあるものだけれど、ここには、そんなものはないのかしら――」

と訊き返した。

「そういえば、インドネシアの航空会社のパンフレットが来ていましたから、探してみましょう。ひょっとすると、あの像に関係のあることでも載っているかも知れませんから」

秋山君はロビイを出て行った。が、私のがっかりしたことに、彼は急用でもできたらしく、そのままもどって来なかった。

私はグリルへはいってお茶を飲んで部屋へ帰ろうとすると廊下でばったり秋山君に会った。

「ガルーダ航空の印刷物はありませんでしたが、そのかわり東京の会社の事務所に電話して、少しばかり新事実を聞くことができました」

私は秋山君の言葉に戸惑った。

「ちょっと待ってくれ給え。そのガルーダ航空というのは、いったいどういう会社なんです」

私があわてて彼の言葉を遮ると、

「これはインドネシアの航空会社なのです。私の友人が、この会社に勤めていたものですから、パンフレットを送るように頼みましたところ、乗客が少なくて商売にならないものですから、東京の事務所は閉鎖のかたちで、いまでは別の会社のインドネシア人が、臨時に一人で仕事の管理をしているというのです」

これには、私もがっかりした。

「それは残念だな」

「ところが結果は反対なのです。そのインドネシア人がいろいろのことを教えてくれたのです」

聖鳥ガルーダは太古の宇宙船または宇宙人？

秋山君が、インドネシア人から聞いたことは次のようなものだった。

ガルーダというのは、インドネシアの伝説の鳥のことで、この鳥はウシーダというインドネシアの天上の神をその背に乗せて、天上と大地の間を往復している。もっともこれは昔のことで、今では、ウシーダ神も聖鳥ガルーダも、人びとの目前に現実の姿はあらわさない。

すべては雲上の伝承となっている。

私はガルーダの頭上のアンテナ風の棒状の物体から、デニケンの考え方にならって、宇宙人ではないかと考えたのである。デニケンは、鳥天狗のような尖った口も、恐らく宇宙を飛行するときの特殊なマスクと解釈するに違いない。

だが、インドネシア人の説明によると、ガルーダは、それ自身単独で飛ぶのではなく、ウシーダ神を背にのせて宇宙の彼方から飛んで来るらしいのである。

そうなるとガルーダは、ウシーダ神の乗物で、一種の宇宙船とも考えられる。最近、私は同好の友人から、想像上の生物と考えられている龍は、中国の古代の宇宙船ではないかと言われた。

そういえば、インドの古代の大叙事詩ラーマー・ヤーナには、空飛ぶ船が出てくる。これは二階のある船で、空中を飛ぶときには美しい音楽を流して行くという。かと思うと、空飛ぶ船のなかには、軍事上の目的に使うものもあっ

●ウシーダ神を乗せた聖鳥ガルーダ

て、これは空中から爆弾を投下する。現在の爆撃機である。

私は最近、インドネシアへ旅行した知人から、インドネシア語で書いた数冊の絵物語を土産にもらった。

いずれも、昔々……の物語である。その一冊、KESATRIA（騎士物語）というのに、〝空飛ぶ人間〟の挿画がある。その説明に、

「……彼は空を自由に飛べる神通力を持っていた。そしてマデウカラ国がどこにあるかを探しはじめた……」

と書いてある。

他の一冊にも、人間が空を飛んでいるところの挿画がある。

どうやら、昔々……のインドネシア人には、空を飛ぶことのできるものがいたらしい。

これはガルーダ伝説の影響か、それともガルーダまたはウシーダ神から空中飛行術を教えられたのか、それは私の想像外の事実である。

インドの空飛ぶ船といい、またインドネシアの空飛ぶ人間といい、古代の東洋には、空中飛行は日常の茶飯事であったのである。

それが何時、何の契機によったものかはわからない。あるいは何かの異常現象のため、それらの超能力が忽然とこの地方から消えてしまった。それ以来、人間には空中飛行という能力はなくなった。

これについて私は能力といったが、あるいは単なる技術であったかもわからない。

空中飛行または空中浮揚について、第一に考えるのは重力の否定と消滅の問題である。

空中浮揚力のことは、前にも書いたが、アイルランドには、これについての民謡がある。それによると、

昔、昔、大昔
空を飛ぶのは楽だった
それは　何でも　かんでもが
目方が恐ろしく軽かったからさ

だが、この民謡の意味は、世の中のすべてのものの目方が軽かったという意味ではなく、たとえ重いものでも、これを軽くする手段があったという意味と解したい。

伝承によると、その軽くする手段にも、いろいろの方法があった。

音楽によるもの。これは美しい音楽によったとあるが、実は音の振動を利用したのではないかと思われる。

この理論を、もっと端的にすると、石のような重いものを棒で叩くだけで目的は達せられる

●騎士物語の一部分

●ガムラン音楽に合わせて踊る優雅な中部ジャワ宮廷舞踊「スリンピ」

という。棒が石に当たったときの衝撃による震動波を浮揚の原動力にするのである。

これは物理学者にいわせると、エネルギー不滅の法則の演繹的発展で、陳腐な理論であると軽蔑している。だが、いくら陳腐だからといって、棒で重い石を叩いたぐらいでは、現在石の日方を軽くすることはできない。

棒で叩く以外に、何か足りない要素があるのだ。これを追求しているのが、私たちの〝失われた古代科学の謎〟である。

アンドルー・トマスの〝われわれが最初のものではない〟（サブタイトルに〝古代科学の謎〟と書いてある）は、古代には、現在われわれが誇っている文化や科学以上のものが存在していたに違いないことを力説している。

それが現在われわれとは無縁のものとなっているのは、種々の原因がある。

天災的な事故――地震、火山の噴火、大洪水などによる破壊。同時に人災による文化の滅失もある。世界的な大図書館の火災、秦の始皇帝の焚書坑儒（学者の政治批判を禁ずるため儒教の本を集めてこれを焼き、あわせて儒教の学者を生き埋めにした）、中世キリスト教徒が異教の本を集めて焼いたこと、後にはスペインの征服者（コンキスタドール）がメキシコを征服したとき、従軍していたランダという牧師は、メキシコの象形文字（大部分が人の横顔からできている）の本を集めて、これをみんな灰にしてしまった。このため現在残っているメキシコの石造建築物の装飾的な彫刻――これが実は文字である――の意味を読みとることが不可能になった。

これらの事実が、われわれの現在の文化を、古代のそれから遥かに遅（おく）れたものにしてしまった。

ウシーダ神は人間の創造主

ところで、ウシーダ神は、聖鳥ガルーダに乗って、何のために、遠い宇宙のかなたからはるばる地球へ飛来したのであろうか。

ウシーダ神は、人間との交流のためではないかと思うのである。

ウシーダは人間にとって最も親しいものであったのではなかろうか。言い替えれば人間の創造者であったのだ。

聖書によると人類の発生は、アダムと、その肋骨からつくったイヴということになっている。だが、各地に伝わる人間の発生は、神々がこれを造ったということになっている。

ここに殊更（ことさら）〝神々〟と複数形を使ったのは、デニケンの説によったのである。彼は〝神〟と

いう言葉に Götter と Gott の複数形を使用している。彼らにとって神の存在は、ただの単一のものではなかったのだろう。

私は、ガルーダを、神の宇宙飛行の際の特別乗用機と考え、ウシーダに住える運転士にすぎないときめていたが、この聖鳥は神の一人かも知れないのだ。宏大な宇宙を走りまわる力があるというのが、その証拠ではなかろうか。

その意味での神は、ガルーダのほかにもまだいたのだろう。そして、〝神々〟という複数形が生まれたと考えられる。

ダライ・ラマの信任厚かったドイツ人のディク・ホフ博士は、〝アガルタ〟という名著を書いたが、その冒頭に、人間を造ったのは、宇宙人であると述べている。

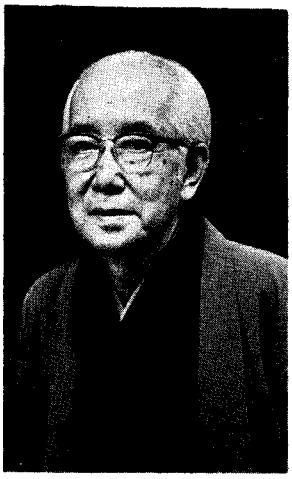
しかも、その宇宙人は単一のものではなく、一つは火星人で、もう一つは金星人である。

この両宇宙人は、彼らの創造した二つの宇宙人に、地球で戦わせて、雌雄を決しようとした。それというのが、火星人と金星人は元来仲が悪かったとディク・ホフは説いている。そして火星人は、その性質、邪悪であったと付け加えている。

話は急転回するが、〝ノストラダムスの大予言〟の〝一九九九年に地球を襲う恐ろしい王〟というのは、スチュアート・ノップが一九六一年に書いた解説書（ノストラダムスの予言詩の解説書としては、これが最も新しいものである）によると、火星人で、これがだらしなく地球人に撃退されるのである。一九九九年に地球人は滅亡しない。その後も長く繁栄し、紀元七〇〇〇年に至って、はじめてその運命が決められるのである。

ところで話を、地球上における火星人対金星人の戦闘にもどそう。

邪悪な火星人は、月を前進基地に選んで、そこから金星人を攻撃する。戦闘はいうまでもなく水爆戦である。核爆発は熾烈をきわめ、両軍は共斃れという奇妙な結果に終わった。そして悪運の強い少数の邪悪な火星人は、アガルタの地下道へ逃げこんだ。



●筆者近影（6月20日撮影）

ディク・ホフによると、この少数のものは、つい最近まで、地下王国アガルタの地下道のなかで延々と生き続けていた。ダライ・ラマがインドへ亡命する直前のこと、ラサに近い地下道で火星人の生き残りは警護のラマ僧と衝突し、彼らはそこで全滅の悲運をたどった。

ガルーダが宇宙船の役割をつとめているとすると、アメリカのシャスタ山（カリフォルニア）の〝空飛ぶボート〟のように、いまでも地球上を飛行しているのではないかと思われる。

場合によっては、たまたまこれの目撃者がいても、空飛ぶ円盤の一種ぐらいと考えるかもしれないのである。

現在、UFOのコンタクト・ケースは、一カ月の間にも、どのくらいに報告されているかわからない。しかも、報告されるものは、そのほとんどすべてが、同一であるものはなく、どこかしら異なっている。

人によっては、これは先方の技術の進歩が、その形状や、飛び方を変えているのだと主張するかもしれない。

だが、この宏大な宇宙には、われわれの知識を超越した高文化の知性や、別の太陽系が、億をもって数えるくらい存在しているのだ。地球へ飛来するUFOの形状、発光色、速度が、その都度違っていたからといって、別に不思議はない。

私のガルーダの説明にすっかり傾倒した秋山君は、ガルーダ航空の本社へ、宣伝用のパンフレットを送るように頼むと同時に、インドネシア大使館にも、ガルーダに関する冊子を送るように手配してくれた。

だが、右の返事が届かないうちに締切りの日がきてしまったので、この稿には、それについての報告を書くことができなかったのを残念に思っている。（49・6・15）

ピラミッドに秘められた数々の不思議な
事実と宇宙人との関係を推理する――

大ピラミッドはUFO記念碑?

●志田真人

ピラミッドにまつわる謎については過去数千年にわたって多くの人々によって調査研究されてきたがいまだに正確には理解されていない。その建設方法、建設の目的、建築構造などについてこれほど広く研究されていながら正確な解答を出すまでには至っていない。

粗末な道具しかなく、高度な数学の知識もなく、また利用可能な天然資源も発見されていなかった時代に、人々はいったいどのような方法で巨大なピラミッドを建設したのだろうか? また、いったい何の目的のためにそのような途方もなく巨大な記念碑を築いたのだろうか? 一般に信じられているように大量の人員と長い年月をかけて築き上げられたのだろうか? それともすでに〝失われてしまった〟古代の高度な技術や科学を駆使して建設したのだろうか? ひょっとしたら古代に地球を訪問した宇宙人たちが「不可思議な」方法で建設したのではないだろうか。

●コンピューターによるテスト結果の謎

カイロの南約数マイルのギザには世界で最も注目すべきピラミッド群があり、その中でも大きさという点でケオプス王(クフ王。ケオプスはギリシャ

名）のピラミッドは特に注目にあたいする（右頁の写真の右端）。ケオプス王のピラミッドについては考古学者、科学者はもとより一般人に至るまで実に多くの人々によって約千年以上にわたって調査研究が行なわれてきたが、その建築方法、建築目的、建築構造などは正確にわかっていない。ピラミッドに関する調査が行なわれるたびに出てくる新しい発見やデータが、それまでの調査、研究の結果ほぼ間違いないと考えられていた理論やデータをくつがえし続けてきたため、何が本当なのかわからなくなってしまったのだ。

数千年もの間、人類の〝科学〟に挑戦してきたこの巨大な石の建造物は今なおその挑戦の手をゆるめようとはしていない。

最近のコンピューターの発達にともない、科学者たちは最新のコンピューターを導入してケオプス王のピラミッドを調査しようと試みたが、結局はいったいだれがどうやって、また何の目的のためにそんな巨大なピラミッドを建設したのか解明できなかった。

一九六八年にノーベル物理学賞を受賞したルイス・アルヴァレツ博士は、ピラミッド内部を流れている宇宙線の測定方法を考案し、カイロのアイン・シャム大学、米国核エネルギー協会及びスミソニアン研究所の協力のもとに実験を行ない、コンピューターのテスト用としてケオプス王のピラミッドより比較的小さいケフレン王のピラミッドが選ばれた。

このテストについてはジャーナリストのジョン・ツンストール氏が一九六九年七月一日付のロンドン・タイムズ誌上で次のように発表している。

「まず科学者たちはケフレン王のピラミッドをX線で調べようとしたが、最新の電子機器の記録を全くの混乱におとしいれるような不可思議な現象に直面するはめになった。

約六〇〇万トンのこのケフレン王のピラミッドの中に隠されていると考えられていた〝秘密の室〟を発見するため、彼らは一日二四時間、一年以上にわたってピラミッド内部に向かって流れる宇宙線のパターンを磁気テープに記録した。

実験方法は次のとおりである。X線はあらゆる方向から一様にピラミッドにあたるので、もしピラミッドが一定していれば、ピラミッドの底に設置されている検知器は一様のX線を記録するはずであるが、もし空洞があれば、もっと多くのX線が記録されるはずであるから多くのX線が記録されれば、空洞あるいは隠された室の存在がわかるということになる。

だがコンピューターによる実験結果は科学界を混乱させたにすぎない。

宇宙線の微粒子のパターンを記録したあるテープをコンピューターにかけて分析し、同じことを次の日も行ない、記録したテープをコンピューターに入れて調べてみると、まったくちがったパターンが記録されていたのである。

アイン・シャム大学のアムール・ゴヘッド博士は、「このようなことは科学的に起こりうることではない。本当だとすれば、このピラミッドのおかげでわれわれは現在の科学やエレクトロニクスの諸法則を書き変える必要があるかもしれない」と述べている。

コンピューターを使った調査の結果わかったことは、ピラミッドはまたしても現代の科学やエレクトロニクスの挑戦をしりぞけたということだけである。そしてピラミッド内部にひそむ不可思議な力や現象は解明されず、神秘のベールの中に閉じられたままである。

コンピューターをも寄せつけないピラミッドをとりまく不気味で神秘的な力とはいったい何だろう？　オカルト現象かそれともファラオたちののろいの力なのか？

●ルイス・アルヴァレツ博士

●世界中の機関車を集めても引っ張れない

一方、ピラミッドは古代の高度な科学の存在を解明する手がかりになるかもしれないという考え方もある。

ピラミッドの大きさ、精密な建築構造から考えて、ピラミッドの建設にあたった人々は、宇宙や自然の法則や高度な数学、あるいは世界地理といったものを理解していたと思われるフシがある。そしてこの驚嘆すべき科学は紀元前何千年ものあいだ世界を支配していたとも考えられるのだ。

ケオプス王のピラミッドはもとの高さが約一四八メートルで、基底部分の面積は実に五二〇アールもあり、約二六〇万個の切石からなっている。個々の切石の重量はまちまちであるが、だいたい三トンから九トンあり、中には六〇〇トン級の切石も使われている。

エジプトに遠征したナポレオンは、ケオプスのピラミッドに使われている切石だけで、フランス全土に高さ三・五メートル、厚さ三五センチの壁を充分めぐらすことができると計算した。またこれらの切石を三五センチ角に切って並べたら、赤道ぞいに地球を一周するだけの石の列ができるはずである。さらにこのピラミッドの内部には、ローマやミラノやフローレンスにある全部の教会を収納できるばかりか、ニューヨークのエンパイヤ・ステート・ビル、ウエストミンスター寺院、セント・ポール聖堂、イギリスの国会議事堂をも収納できるスペースがあるのだ。

現在世界のいかなる建設会社といえどもこれだけの建造物を建てるのは至難のわざと言わねばなるまい。

重量的には約六五〇万トンもあるため世界中の機関車を寄せ集めても引っ張ることは不可能である。

●驚異的なケオプスの大ピラミッド

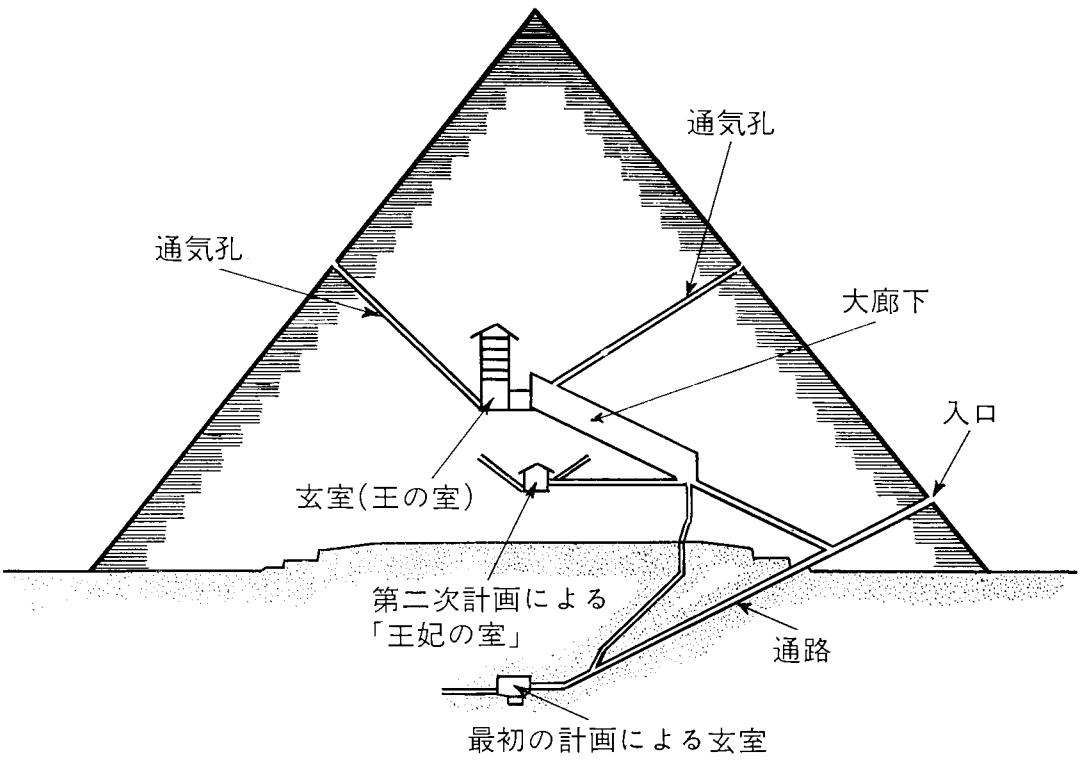
ピラミッドは通路、埋葬室（玄室）さらには未発見の隠された室などを除いては堅い切石でつくられている。使われている石はみごとに磨き上げられており、石と石の積み重ねは実に緊密であるために名刺さえ差し込むすき間もないほどである。さらに一〇〇トンまでの切石は驚くほど精密に重ねてあるので、石と石とのつなぎ目を探すのも困難だ。こんな精密な建築構造をもつピラミッドを人々はいかなる方法でいかなる道具を使って建設したというのだろうか？

ケオプス王のピラミッドは一〇万人の奴隷が二〇年かかって築き上げたという説もあり、いや実際の作業にはせいぜい二五〇〇人から四〇〇〇人程度が動員され、採石場と運搬作業にはもっと多数が動員されたにちがいないが、それにしても一〇万人ということは考えられないという説もあり、定説がない。

歴史的にはケオプス王統治時代のエジプトには約二〇万人の人々が住んでいたと推定される。

ピラミッド建設にあたって労働者たちは採石場から石を切り出し、平底荷船に積んでナイル川をくだり、建設現場の近く

ケオプスのピラミッドの断面図



で石を降ろして砂漠の中をコロを使って引っ張って行ったと信じられているが、こんな原始的なやり方で巨大なピラミッドをあれだけ正確かつ精密に築けるだろうか？

アメリカ人学者ドーズ・ダンハム氏の説によると、ピラミッドの四隅から荒石と泥土で作った傾斜道が四本作られ、初めは上げる以前の外装材の外面に接して建造され、その上端はピラミッドの石積みが一層ずつ高くなるにつれて伸びてゆくという方法を採ったとしている。このような光景は映画の中のピラミッド建設風景を思い出させる。多くの奴隷たちが朝早くから夜遅くまで充分な食糧も与えられず、ムチで打たれ鎖につながれながら大きな石をカタツムリの歩みのようにのろのろと引っ張っている場面などがそうである。

実際映画の場面のような方法で建設したのなら多くの疑問が生じてくる。

❶仮に二六〇万個の石を採石場から切り出すに足る奴隷あるいは作業員がいたとしても、ダイナマイトや火薬類がなかった時代に彼らはどんな道具を使って石を切り出したのだろう？　また、どこで切り出すための道具を手に入れたのだろうか？　いったいどんな道具を使ったのか？

❷石を切り出した後、今度はどうやって石の外装を行なったのだろう？　これらの石の外装作業には最低二トンの圧力が必要だったはずだが、彼らはどこでそのような道具を手に入れたのだろうか？

❸いかなる方法で切り出された石を建設現場まで運んだのだろう？

たとえばピラミッドの中でも注目すべき〝王の玄室〟に使用されている七〇トンの赤い花崗岩は、ギザから約六〇〇マイルも離れた採石場にしかないものである。彼らはこれだけの遠距離をどうやって運んだのだろう？　歴史学者たちによると、七〇トンあるいはそれ以下の小さな切石は木製のローラーに乗せられて運ばれたということだが、ローラーとなるべき丸太を作るための木はどこから持ってきたというのだろう？　実際エジプトにはわずかなヤシの木の他に森林など存在しない。そうなれば木を切り倒して丸太を作り、その上に切石を乗せて運んだなどとはとうてい考えられないことになる。仮に丸太を作れたとしても、砂の上を大きな石を乗せて押したり引っ張ったりしながら運べば、丸太は砂粒との摩耗によりすぐに使いものにならなくなる。とすれば石を全部運ぶためには何本の丸太が必要になるだろう？　仮に切石ひとつに対して一〇本の丸太が必要だったとすれば、大ピラミッド建設には何と二千六百万本もの丸太が使われたことになる。切石ひとつに対し一本の丸太として計算しても二百六十万本もの丸太が必要なのだ。これだけの丸太をだれがどこで作って採石場まで運んだのだろう？

さらに彼らは切石を引っ張るためのロープをどこで手に入れたのか？　ロープを用いたとすれば二六〇万個の切石を引っ張るために何本のロープが必要となるだろう？　仮に一つの切石に対し二本のロープが使われたとして計算するとざっと五〇〇万本強の、それも頑丈なロープが必要だったと思われるが、彼らはどこでそんなロープを手に入れ、だれがそれを作ったか？

❹エジプトのような小国が奴隷あるいは作業員全部をどうやって養うことができたのだろう？　おそらく大部分の人々がピラミッド建設のために動員されていたと思われるが、その間だれが畑を耕し、だれが種をまき、だれが収穫したのだろう？　どこから食物を手に入れ、だれが料理したのだろう？　また彼らはどこで寝たのだろう？　まさか砂漠の砂の上にゴロ寝していたわけではあるまい。砂漠というのは昼間と夜間の温度差がかなりあるといわれているし、砂嵐などが起こればみんな砂に埋もれてしまうことも考えられる。

❺あれだけの精密な建築構造をもつピラミッドを設計したのはだれだったのか？　また、建設にあたってその指揮をとったのはだれだったのか？　一つ一つの石を積み上げた後、その正確さをチェックした監督はだれか？

このような疑問点を詳細にあたっていくと、古代エジプト人達が粗末な手道具を使ってあの巨大なピラミッドを建設したなどとはとても考えられない。今日建築家たちが建物を建てるときに、二五センチの一〇分の一の正確さが得られただけでも大喜びするが、ピラミッドはそれよりもっと精密に建設されているのだ。

石が採石場から切り出され、外装され、磨き上げられ、ギザの建設現場まで運ばれ、組み上げられ、さらには注意深く重ね合わされねばならなかったプロセスを考えると、完成までの所用日数はどのくらいになるだろう？　一日一〇トンの割合でピラミッドが建設されたと仮定すると完成までは何と二六万日、すなわち約七〇〇年かかったことになる。たとえ一日一〇〇トンの割合で建設されたとしても完成までは二六〇〇日、つまり約七〇年かかった計算になる。

●反重力空中浮揚法を応用？

以上のような単純な疑問に対して解

答が得られないとなると、もっと異なる観点からピラミッド建設方法を説明しようとする動きが当然でてくる。

その一つは「振動」によって起こる〝エネルギー〟を利用して石を運び、ピラミッドを建設したとする意見である。アラビア地方に伝わる民話や伝説によると、音楽や音がピラミッド建設に利用されたといわれている。この振動から起こるエネルギーというのは古代の科学の一部であったが、今日では失われてしまったものだというのだ。

古代の人々はこのようなオカルト的な力を信じていたらしく、たとえばある牧師が〝魔法の言葉〟をとなえるとたちまち嵐が起こり、何千もの人が力を合わせても持ち上がらないような石が寺院まで空中を移動したという話もある。

ウィリアム・キングスランド氏は自分の著書「大ピラミッドにまつわる虚実」の中でピラミッドがどのようにして建設されたかに関して、エジプトに伝わる民話を基に次のように述べている。

「ピラミッドが建設されたときはもちろん石は遠く離れた採石場から運ばれたのだが、その場合切石はある特別なシンボルが書かれたバビルスの上に置かれ、その石をムチで打つと石は一定距離にわたって空中を移動したのである。このやり方で切石は採石場から建設現場まで運ばれた」

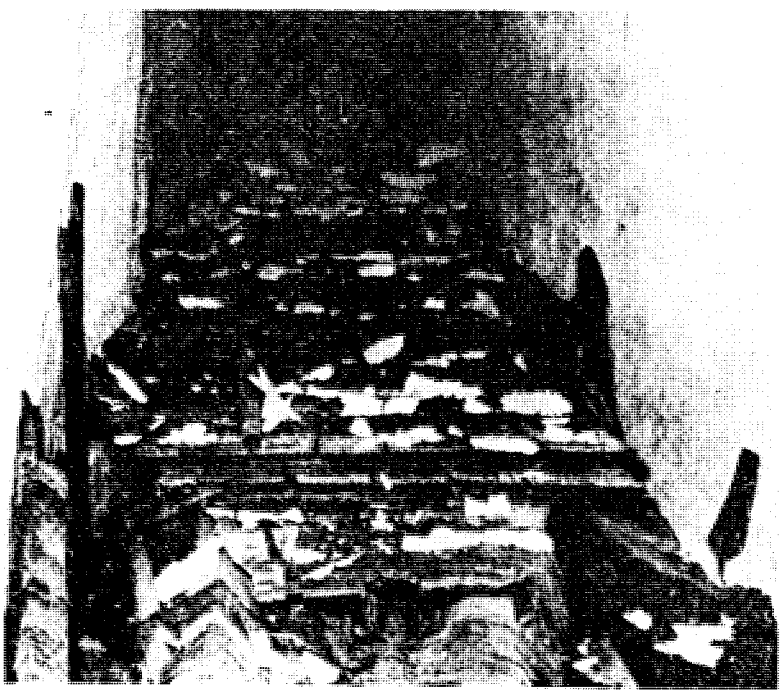
振動から起こるあるエネルギーがピラミッド建設の際に利用されたという理論の他には反重力を利用した空中浮場法を用いたという説もある。

オカルト研究家A・P・シネット氏は著書「ピラミッドとストーンヘンジ」の中で、古代には科学の秘密を知っていた大家たちの社会があったという意見を述べている。

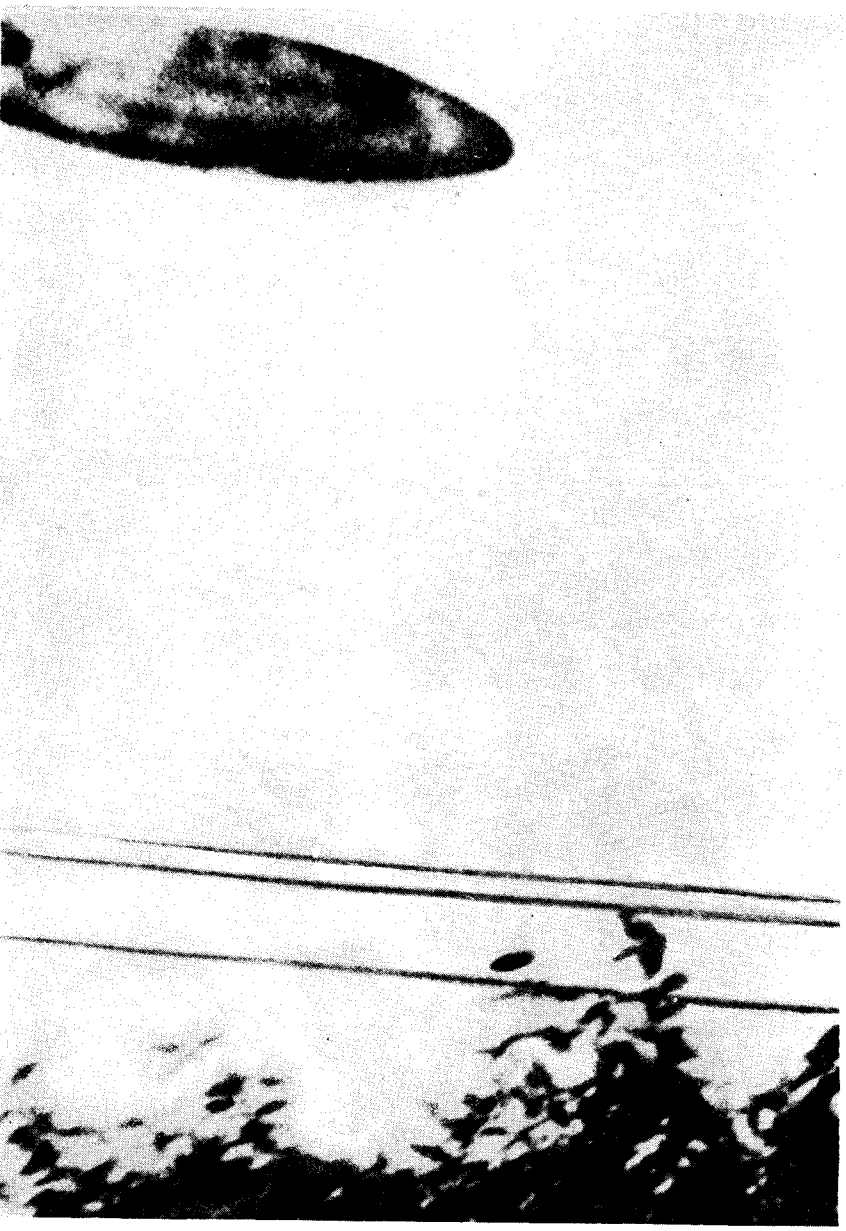
「大ピラミッド建設に使われた巨大な石がどのように扱われたかを説明しようとするなら、今は失われてしまった自然に関するある種の知識を利用したとしか言いようがない。自然の神秘的な力について知っていた者は、おそらく彼の意のままに物体の重量をコントロールできる特別な方法、すなわち一種の空中浮揚法を知っていたにちがいない。建設の指揮をとっていたこれらの大家たちは、空中浮揚法を使って石を運び、作業の容易化と促進とを計ったのである」

いままで述べたような魔法の杖、魔術的シンボル、古代の賢者、秘密の言葉による建設方法の説明は一見的はずれ的理論だと一笑に付されるかもしれないが、反重力というものを前提として考えればおかしな理論でもない。事実現在でも世界の国々が、いろいろな手段を講じて重力の秘密を解明しようとやっきになっているではないか。

●科学者団が、ケオプスのピラミッド中の巨大な石を持ち上げて発見したケオプス王の〝太陽の軍船〟。4700年前のもの。



同じ反重力を前提とした理論でも、前述のように古代の賢者たちが反重力の法則に基づく空中浮揚術を知っていてそれを建設の際利用したというものと、他に古代期に地球を訪れていた地球以外の惑星から来た人々、すなわち宇宙人たちが彼らの発達した科学に基づく反重力の法則を利用し石を運んでピラミッドを建設したというものとがある。後者の方は、運搬用として特別に作られた小型の宇宙船が空中浮揚により石を運びピラミッドを建設したというのである。この理論によるならピラミッドは高度に発達した宇宙人たちの援助のもとにピラミッドは建設されたことになる。



●米カリフォルニア州サンベルナルディノの医師の息子マイケル・サベージ少年（15歳）が撮影した円盤。約30秒間目撃したという。

●他の惑星の宇宙船が援助したか

科学者であり有名な天文学者でもあるモーリス・K・ジェサップ博士はこうした理論について次のように断言している。

「ピラミッドを建設するための力は、他の惑星から地球上に移民を運んできた宇宙船から与えられたのである。この宇宙船がピラミッドや他の巨大なストーンヘンジを建設するときに必要な反重力の力を提供したのだ」

アラブの神話の中でも「巨大な白い鳥」が空から降りてきたと伝えられており、おそらくそれらの「天空の戦車」が王たちを空へと連れて行ったのだという。このような神話によれば、太陽神ラーや太陽の軍船の話にもとづく古代エジプトの宗教についても説明がつくものと思われる。

ジェサップ博士はUFOと古代期に地球以外の場所から地球を訪れた訪問者たちの話についての可能性に関するはっきりした理論をもっており、ピラミッドに好奇心を抱き、巨大な数々の石の建造物に魅了されて各地を回り、いたるところでピラミッドを発見したのである。そしてピラミッドは疑いもなく空中浮揚の方法を利用して建設されたと確信するにいたったのである。

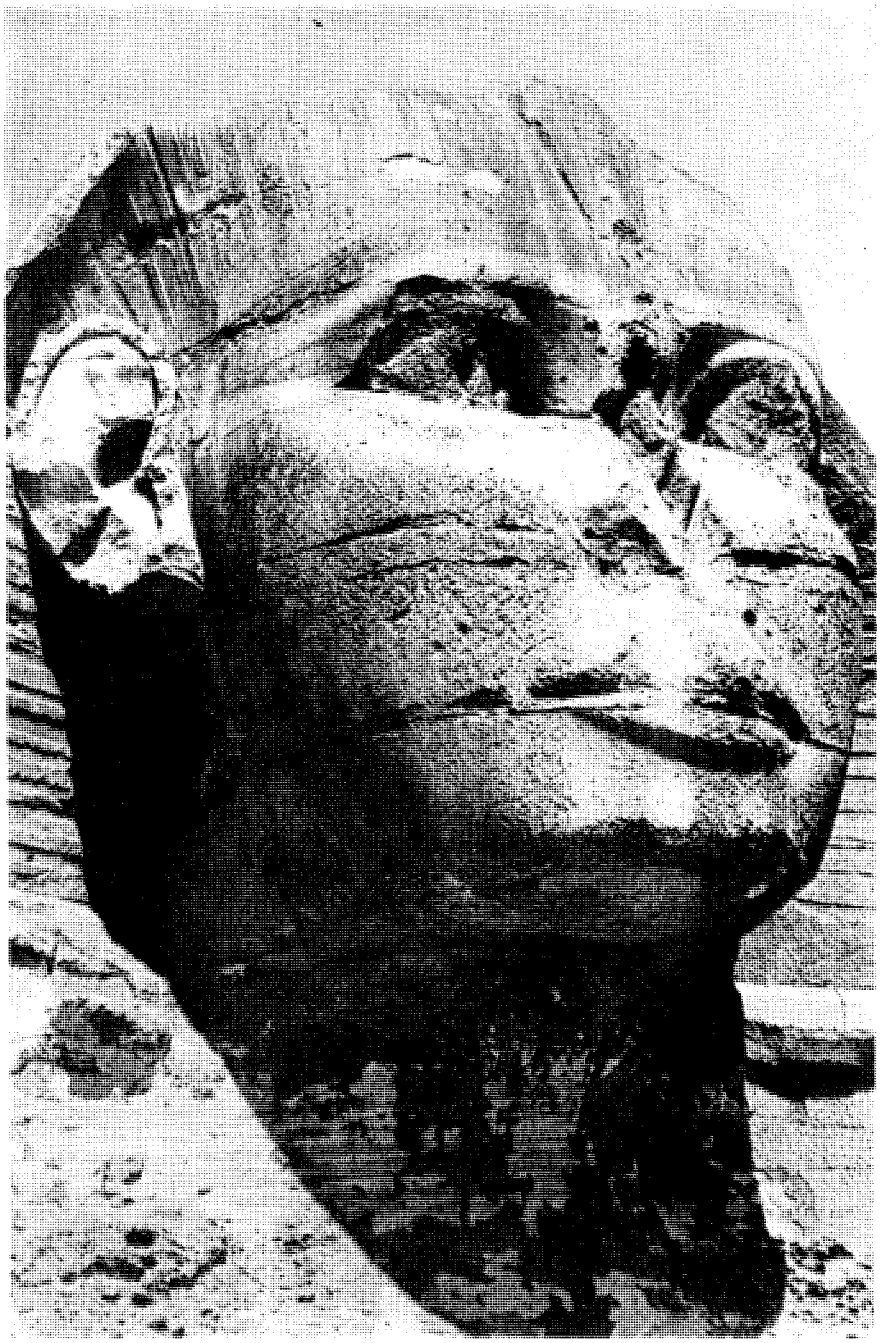
彼は自分の著書『UFO現象の実例』の中で、こうした反重力の法則による空中浮揚術は空飛ぶ円盤によってもたらされ、それと同じかあるいは同様の力がピラミッド建設に使われたことを次のように述べている。

「私は『空中浮揚』という言葉を力という言葉に代わるものとして用いてきた。私は空飛ぶ円盤が重力の反作用の手段を応用したと論じてきた。この方法で彼らは（宇宙人たちは）物体の内部と外部とに同時に加速力や浮揚力を与えることができたのであって、圧力などのように物体の表面だけにかかる外部の力で物体の浮揚を行なったのではない。そしてそれと同じか同様の力を利用して石を移動させたと信じている。また、この浮揚の力は突然失われてしまったとも信じている」

●大ピラミッド建設の目的は何か

これまでギザのケオプス王のピラミッドや他のピラミッドがどのようにして建設されたのかについていろいろさぐってみたが、次に大ピラミッドが何のために建設されたかを慎重に調べてみたい。

建設目的についても建設方法の場合



●地下の通路が大ピラミッドへつながっているといわれる大スフィンクス。

と同様多くの人々が真相をさぐってきたが、残念ながら正確には知られていない。一般的な説を述べれば、ケオプス王の大ピラミッドを含めてピラミッドというのは墓として建てられたということになっている。しかしいかにエジプト人たちにとって死体の保存が重要な宗教的慣習の一つだったとはいえ、一人の王のために莫大な時間と労力をかけて気が遠くなりそうな巨大な墓を建てる必要があったのだろうか？

単に死体をミイラ化して保存しておくための墓ならば何も小山ほどもある大きな四角錐形の墓を建てる必要はないだろう。もちろんピラミッドの中にはミイラ化した遺骸ばかりでなく莫大な財宝も一緒に収納されていることからピラミッドは一種の宝物殿でもあるという人もあるかもしれないが、あれだけ大きな宝倉をつくれば、そこに財宝がうなるほどあると泥棒に教えてやっているようなものである。たしかに内部の通路の要所要所は巨大な石で封印してあり、入念に擬装されてはいるにしても、そこに宝の山があるとわかっていれば盗む方も必死になるにきまっている。事実、この大ピラミッドは何度も略奪にあっているのだ。

ピラミッド建設の本来の目的が墓のためでもなく、宝庫のためでもないとしたら、いったい何のために建設されたのだろう？

●ピラミッドは宇宙船のエネルギー補充場所？

ここに一つ、信じがたいが、かといって建設の真相が正確にわかっていないだけに一笑に付することができない説がある。それは、ピラミッドは他の惑星から地球を訪れた宇宙船の動力源となるエネルギーを補充する場所であり、ピラミッド自体巨大な〝エネルギー製造所〟であったというものである。この説によれば、ピラミッドの構造上（たとえばピラミッド四面は正確に東西南北の方向に向けて建設されているとか水平面に対する側面の傾斜角度が五一度五一分であるとか）ピラミッド内部には頂点に向かってラセン状にある種のエネルギーが発生するようになっており、宇宙船は燃料がなくなるとピラミッドの頂点上空に停泊し、そのエネルギーを採り入れて動力源としたというのだ。よくピラミッド内部にはいったため気が狂ったり死んだ人がいるなどという話があるが、それは、今なおピラミッド内部で発生している—ただし現在はピラミッド自体多少変形もしているし、位置もわずかながらズレているためエネルギーそのものはかなり弱まっている—エネルギー

が人体に影響を及ぼしたためだと説明されている。また、このエネルギーはうまく使用すれば病気などを治す力もあったといわれ、王が病気などにかかるとピラミッドにはいりそれを治したとも伝えられている。

何しろピラミッドに関する多くの謎が正確にわかっていないため種々の推論が乱れ飛ぶハメになっているが、オカルト研究家たちが何世紀にもわたってこの大ピラミッドに神秘的な意味あいを持たせようとしてきたことは事実である。

大ピラミッド内の〝王の玄室〟というのは宇宙人のためのレセプション・ルームであったと主張する数人のオカルト研究家たちもいるし、また、UFOとコンタクトしたという人々のなかには、大ピラミッドの中には空飛ぶ円盤がかくされていると主張している者もある。

汎神論的輪廻説の創始者であるH・D・ブラバスキー夫人は一八七五年に神秘宗教的輪廻説を創始したが、その信者たちは再生、カルマ、多次元的宇宙というものの存在を信じており、また大スフィンクスからピラミッドへ通ずる通路があると主張している。

彼女の説によると、ピラミッド内部の部屋は宇宙人に教えを受けた人々が儀式を行なうために作られたものであり、ピラミッド自体は幾何学、数学、天文学あるいは古星術の趣旨を石によって表現したものであるという。

こうした神秘主義的な理論は他にもあり、たとえば、失われた大陸説、特にアトランティス大陸沈没説の熱心な支持者たちは、アトランティス人が大陸が沈没する以前に自分達の文明の記録を保存しておくためピラミッドを建設したと信じている。その他ピラミッドの石には人類の未来に関する予言が記録されているとか、ピラミッド内部の秘密の部屋には古代の科学、天文学、数学、貴重品や可鍛性ガラス等に関するデータが納められているという説もある。なぜそのような貴重なデータを納めたのかについては、なぜピラミッドを建設したかに通じるが、逆にいえば古代人たちは天空の様子から大洪水が起こることを事前に知り、価値ある知識やデータを破壊から守るためにピラミッドを建設したのだという。

●ピラミッドの模型による実験と不思議な結果

繰り返し述べるように大ピラミッドの建設方法や目的などについては何一つ正確に知られていないが、一方ピラミッド自体はわれわれに種々の不可思議な現象や出来事を提供している。

フランス人のM・ボヴィス氏はこの大ピラミッドを訪れたとき、通路に容器が置いてあることに気がついた。その容器はたまたま猫などの小さな動物がピラミッドに迷い込んで死ぬとガイドがその死骸をその箱の中にほうり込むためのものであった。彼はそのとき動物の死骸には死臭もなく、また腐った形跡もないことに気がついた。しかもピラミッド内部には適度な温度があるにもかかわらず、死骸は一様に脱水されミイラ化していることを知り、これはピラミッドの型そのものがミイラ化現象と何らかの関係があるのではないかと考えた。そこでボヴィスは早速自分で木製のピラミッド模型を作り、それを真北に向けてセットし、中へ死んだネコを入れたところ、何とネコの死骸は数日でミイラ化してしまったのである。彼は引き続き小牛の頭や他の有機物を入れてみたが、やはりいずれも急速にミイラ化してしまったのである。

ところがこうしたボヴィスの実験に対する科学界の反応は冷たく、ピラミッド内部で起こったミイラ化現象や脱水現象に関する興味深いプロセスを究明しようとはせずに無視してしまった。

ところがチェコスロバキアの放送技師カレル・ドルバル氏はボヴィスの行なった実験に興味を持ち、みずから同じような実験を試みた。

根本ではあるが正確なピラミッドを作り、ボヴィスの実験を調べてみたところ、ボヴィスが正しかったことを発見したのである。ドルバルは実験結果を次のように報告している。

「ピラミッド内部の空間とピラミッドの型とは何らかの関連性があり、ピラミッド内部では物理的、化学的あるいは生物学的変化の過程が進行している。したがってわれわれは適当な型や形を用いることによってこれらの変化が行なわれる過程を早めたり、遅らせたりコントロールすることは可能である」

実験を続けてゆくうちに、ドルバルは模型のピラミッド内部に置かれた物体の成分が激しく変化してゆくことを発見し、彼は何か未知の力強いエネルギーがピラミッド内部で働いていることを理論づけたのである。

「ピラミッドはたぶん全く未知のエネルギーを引き寄せ、それを保持しているのかもしれない」とドルバルは述べている。

その後ドルバルは使えなくなったカミソリの刃を模型のピラミッドの中に入れておくと元通り切れるようになることを発見した。ピラミッド内部の状態がカミソリの刃を元通りシャープにすると考えたドルバルは、自分の発見を商業ベースにのせるべくチェコ政府に対し特許申請を行ない、ついに特許番号九二二〇四を与えられたのであ

る。その他変わったところでは、フランスの酪農業者がヨーグルト用のピラミッド型をした容器について特許を得、イタリアの酪農業者は牛乳用容器としてピラミッド型の容器を使用している。

ヨーロッパ神秘現象研究会でも模型のピラミッドを使って種々実験を行なったところ、ピラミッドの〝型〟が重要な要素をもっていることを発見した。彼らはプラスチック、木、ガラス、金属、紙などでピラミッドの模型を作り実験を行なったのだが、前述の〝型〟の他に〝方位〟もまた重要な要素であることに気づいている。つまりピラミッドは正確に南北の方向にセットされねばならず、もし真北から五度ずれると内部の力もまた五パーセント減少することがわかったのである。

このようにピラミッドについては建設方法やその目的といったおもな問題点の解明ができていないばかりか、ピラミッド自体に付随して起こってくる種々の不可解な現象、エネルギー、あるいは出来事に対する究明もまた困難をきわめている。全部の謎が解明されるのはいったいいつになるのだろう？

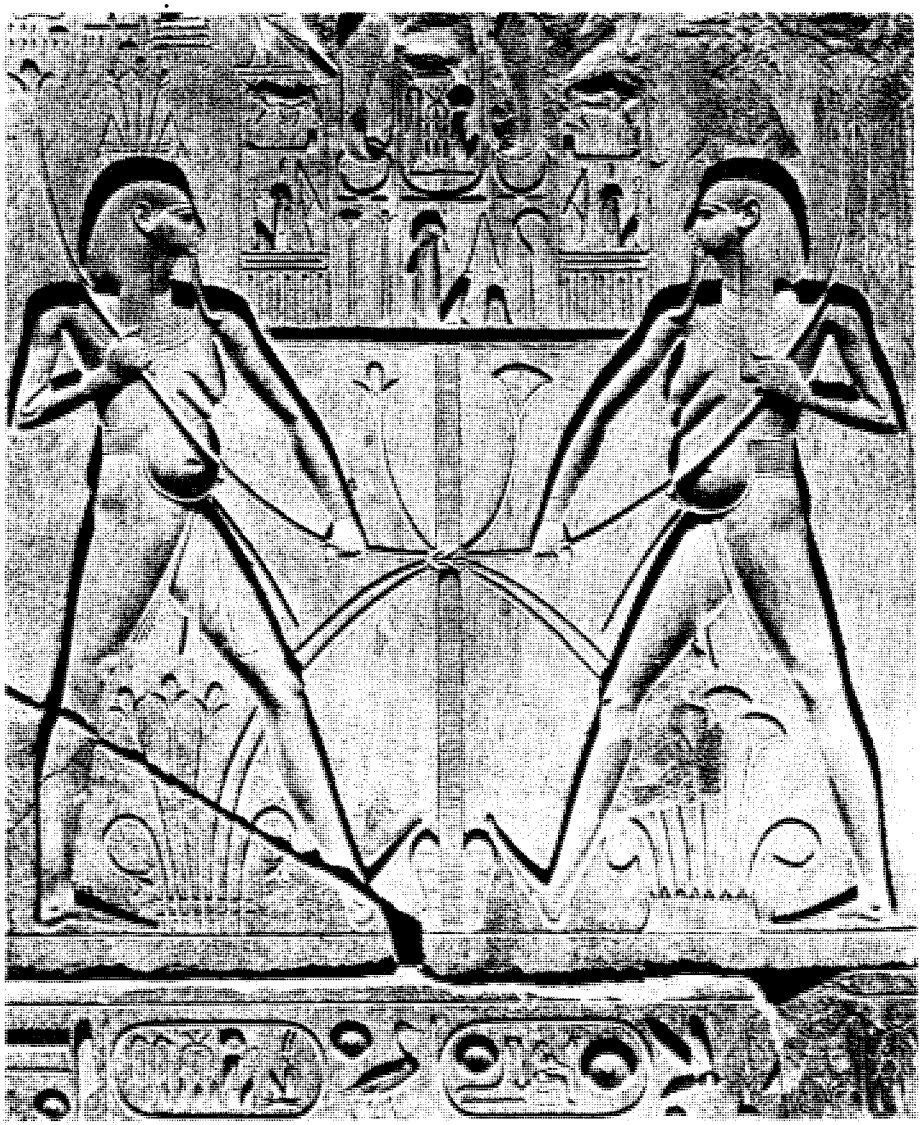
それとも永久に謎として残ってしまうかもしれない。謎が解明できたあかつきには、あるいはわれわれもピラミッド型の家を建てるようになるかもしれない。

●ピラミッドと数値の驚くべき関係

ケオプス王の大ピラミッドを数値的な観点から調べてみるのも興味あることと思われる。

この大ピラミッドの高さは今では正確にはわからないとされているが、推測値は一四六～一四八メートルであったと考えられている。水平面に対する側面の傾斜角度は前にも述べたように五一度五一分とされているが、多くの幾何学者が測定した数値は完全に一致してはいない。しかしその誤差は五一

●ルクソール神殿のラー・メス２世像の台座浮き彫り「統一象徴図」（第１９王朝）



度五一分三秒とか五一度五一分一四秒とかほんのわずかなものである。ピラミッドを測定した結果驚くべき事実が次々と発見されているが、その中でもπの値が発見されたことは注目に値する。歴史学者たちによればこのπはピラミッドが建設された後約千年たって初めてエジプトにもたらされたはずのものだったからである。

πというのは周知の如く円の直径に対する円周の長さの比率をあらわす数字で、三・一四一五九で表わされる。ところがピラミッドの土台の周囲の長さを高さの二倍の数で割ったところ、三・一四一五九の数値が得られたのである。つまりこれはピラミッドの高さと等しい半径を持った円を描けば、その長さはピラミッドの四角形の土台の周囲と等しいことをあらわしている。

さらにケオプス王のピラミッドの高さは地球と太陽との間の平均距離約一億四九五〇万キロの数字を一〇〇万分の一に圧縮した数字であることも発見された。

その他測定結果から得られた事実は、大ピラミッドの入口のある面は真北に向いており、たった四分の誤差しかなかったこと、このピラミッドはスコットランドの宮廷天文学者ピアッツィ・スミスの測定によれば、二九度五八分五一秒の緯度のところに建てられていること、北側の入口から奥に通ずる通路が水平面に対し二六度一八分傾斜していること、王の石棺の質量が、地球の質量の一〇の一五乗分の一であることなど数多くある。

こうした数値の分析をすればするほど、われわれは古代エジプト人たちの科学、数学、天文学、地理学に対する知識の豊富さ正確さに驚嘆するばかりである。こうした知識は彼ら独自で身につけたのではなく、仮に進化した宇宙人によって教えられたのだとしても、紀元前数千年の時代に彼らが知っていたことをいったいどう説明すればよいのだろうか？

永遠に屹立するピラミッドの謎はほとんど解明されていないが、単なる巨大な遺産にすぎないのかもしれないし、あるいは一部の人々が主張するように、その中に人類の未来に関するメッセージがかくされているのかもしれない。それはノストラダムスやエドガー・ケーシーの予言にあるような人類の危機に関する警告のメッセージなのだろうか。それとも未来のすばらしい時代に関する予告なのか？　もっと飛躍して考えれば、ピラミッドの中には宇宙の法則の秘密が秘められているのかもしれないのだ……。

アメリカで1300万部の売行き！
共産圏の驚くべき超心理学研究の現状

ソ連圏の
四次元科学

S・オストランダー
L・スクロウダー　共著
照洲みのる訳
橋本 健 監修

上（ソ連前）　下（ソ連後 チェッコ ブルガリア）
各1150円

超能力エネルギーのカラー写真カバー

72億円の国家予算で研究しているテレパシーや念力の宇宙開発やスパイ活動への応用■空飛ぶ円盤目撃記録の集積■超能力エネルギーによる医療診断■だれにもできるピラミッドパワーの実験■直感記憶術による教育革命他

宇宙哲学

G・アダムスキー著
久保田八郎訳

480円

地球外の進化した惑星人が伝えた宇宙の真実

超能力の秘密
——魂の力を発見する——
ジナ・サーミナラ　十菱麟訳
950円

あなたの中のあなたを発見する本
■異性間、異人種間の転生　■瞑想と宝石による超能力開発法　■内分泌腺と超能力　■黙示録の意味　■20世紀地球大変動、他

転生の秘密
——あなたにも前生の記憶がある——
ジナ・サーミナラ　多賀瑛訳
950円

二五〇〇件の転生例を心理学者が分析
■不倫・離婚と前生　■職業能力の前生的基礎　■結婚と女性の運命　■親と子の前生的因縁　■人間はなぜ生きるのか、他

たま出版　162 東京都新宿区納戸町33
TEL(260)4367 振替東京94804

不思議な人影の群れと火焔を噴く円盤型物体……

アルゼンチンの奇怪なUFO着陸事件

アルゼンチンUFO研究会々長　オスカー・A・ガリンデス

トランカス事件はUFO問題の全歴史中でおそらく最も異常な出来事の一つである。目撃者の数と質ばかりでなく、事件自体の特徴や同様のタイプの他の事件との酷似性などからそのように言えるのである。

これが発生した当時、アルゼンチンの新聞は事件についてきわめて短い、しかも否定的な記事を掲げた。各新聞社もこれに「右へならえ」をしたために、その結果、記事内容が同じような否定的なものになってしまった。

目撃者たちのよく知られている正直さを全然疑うことなく、むしろこのケースはもっと徹底的な調査を行なう価値があると考えたわれわれは、事件発生以来七年を経た現在、その再調査を試みる必要があると感じたのである。われわれの私的な調査の結果は確信のもてる肯定的なものとなってきた。というのは、親切にも本稿に目を通してチェックしてくれた関係者の一人の口から直接に聞きとった、完全かつ真実なパノラミックな全貌を提供できる喜ばしい立場にわれわれはあるからである。

仕事（飛行機の墜落調査）のためにアルゼンチン各地への旅行の途中、われわれのUFO研究グループのリーダーの一人であるアルベルト・マヒセ・アストルガ氏は、一九七〇年のさなかにトックマン市にいた。UFO現象に関心ある人間のこととて、彼はこの驚くべき目撃事件に関して陸軍軍人達のあいだで調査を行なう機会を得た。そして結局モレノ家と縁続きの一陸軍将校と会見した。この将校が親切にもトランカスの目撃者の一人で、現在はコルドバに住んでいるヨリエ・デル・バリェ・モレノ夫人宛の紹介状を書いてくれたのである。この状況はトランカス事件の再調査をしようというわれわれにとってこよなく有利になった。というのは私の父も私もコルドバに住んでいるからである。

その紹介状のおかげでわれわれは目撃者と個人的なインタビューを準備することができたうえ、そのインタビューは一九七〇年一〇月二日に行なわれた。出席者はその婦人とアルベルト・アストルガ氏、私の父のベンハミン・ガリンデス、それに私である。

セニョーラ・ヨリエ・モレノはアルゼンチン軍隊のある有名な軍人にとついでいるが、彼女の夫の要望により、軍にいる手前、トラブルの発生を避けるために、彼女の娘時代の名前を使用することにした。

停電後に出現した奇妙な人影

ヨリエ・モレノ夫人は現在二八歳で、二人の子供がある。彼女は高等教育を受けた教養の高い人で、家族の他の人たちも同様である。そしてこの事が陳述の重要性を高めるのである。彼女の説明によれば、トランカスで発生した事件の経過は次のとおりである。

一九六三年一〇月二一日の午後七時、同家の所有地であるサンタテレサ地所の私有発電所で故障があった。この発電所は同家の電気の供給源としてきわめて重要であった。というのは同家の敷地はアルゼンチン、トックマン州のトランカスという田舎町から三キロあまりの、半径二・四キロの無人地

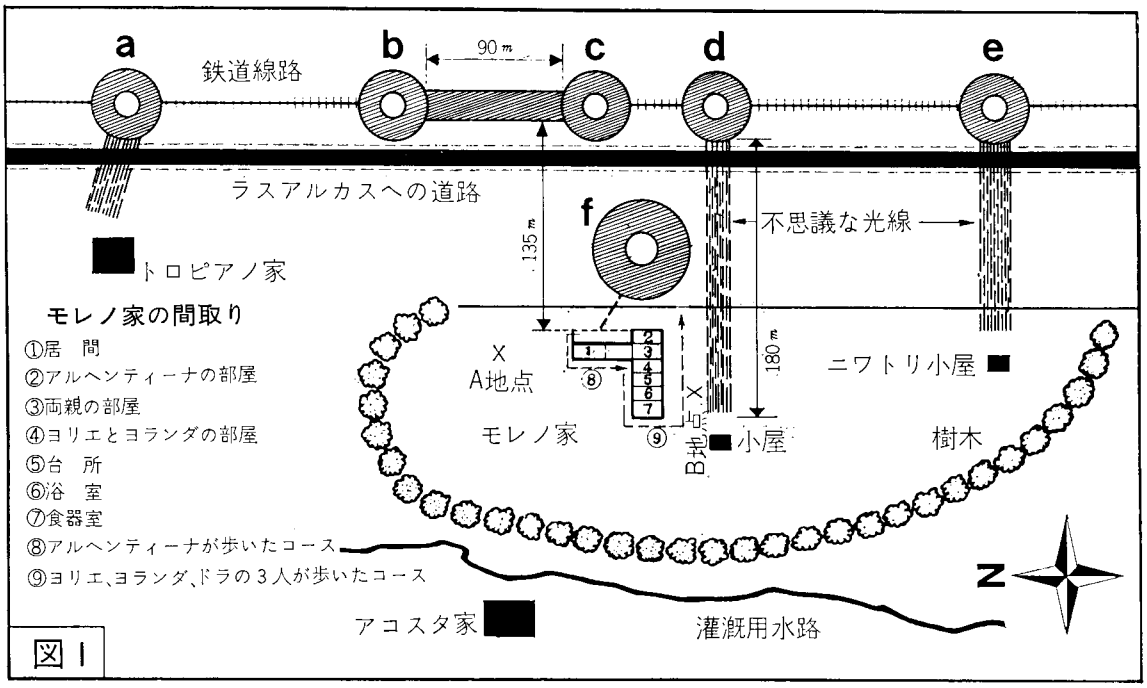


図１

帯に位置するからである。そこでモレノ家は懐中電灯とローソクを使用しなくてはならなくなった。目撃者のヨリエは、この停電による障害があとで起こる現象と関係があるかどうかはよくわからないと言う。

夕食をとった後、停電のために家族は八時頃には寝なければならなかった。しかしその頃すでに結婚していたヨリエは起きている必要があった。九時半に長男の赤ん坊に食物を与えてやらねばならないからだ。彼女は赤ん坊と姉のヨランダ（三〇歳で未婚）と共に４号室にいた。（図１を参照）

その時である。女中のドラ・マルティーナ・グスマン（一五歳）が室のドアーをノックして「恐ろしい」と言った。しかしヨリエは相手の恐怖の原因がわからないために、さほど重要なこととは思わず、同家が位置する場所のさびしさのせいだろうくらいに考えたが、田舎娘としてこの女中は当然このような体験には慣れているはずだとみて、「まったく変じゃないの」と言った。

その後まもなくドラ・マルティーナがまたやって来て、裏庭に原因不明の光る物が見えるとしきりに言う。家の外へ出るたびにあたり一帯が突然数秒間照らされるというのだ。雷雨発生の形跡はなく、ただ二、三片の雲が空中に浮かんでいるだけである。

ヨリエとヨランダは起き上がって裏庭へ出た。何も見えない。数分間そこにいたが、やがて４号室へ引き返した。しかし帰ったとたんドラ・マルティーナが呼びかけて、また光（複数）が現われたと言う。そこでふたたび姉妹は外へ出たが、別に奇妙な物は見えない。しかしドラはすっかり恐れおののいていた。ドラは二人にしばらく外にいてくれと言う。光（複数）が一定の間隔をおいてくり返し現われるようだというのだ。おびえきった彼女は、すまさねばならぬ雑用一切を翌日にまわすと言いだした。

そこで三人は中庭の左端（図１のA地点）まで歩いて行った。すると一同は家から一三五メートル離れたベルグラーノ鉄道の線路の方向に、約九〇メートルの長さの管状の輝く細長い物体で連結された二個の光体が存在するのを見た（図１の物体bとc）。何人かの人影（約四〇名）が見えて、光る背景の中に輪郭が浮かび上がっている。人間たちは行ったり来たりしているので、目撃者たちはたぶん脱線事故かサボタージュの労働者のたぐいかと思った。それらは明らかに人間であって、普通の身長ほどの人影群は両端の方向へ行き来しているように見えたが、ヨリエは管状物の内部で動いていたと考えている（図２を参照）。

周囲の樹木に妨げられてよく見えな

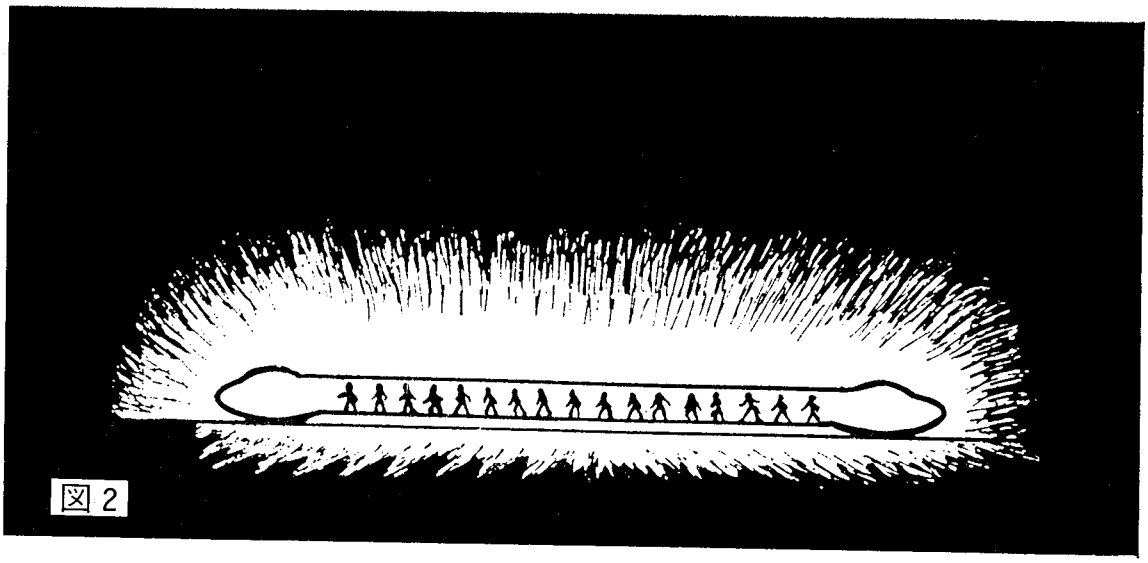


図2

いので、木の枝の下から見ようとしてひざまずいた。

よく調べるためにもっと線路へ近寄ろうということになった。二人のモレノ姉妹は充分に着込むためにひとまず部屋へ引き返した。大変寒い夜だったのだ。ヨランダは懐中電灯を探しに行き、ドラは拳銃のコルト38を取りに行った。これは彼女が家に一人でいる時のために護身用として所持しているものである。ヨリエは3号室をそっと通りすぎた。ここには両親（アントニオ・モレノ・エバイチ、七二歳と、テレサ・カイルス・デ・モレノ六三歳）が眠っている。そして2号室へ行った。この室には別な姉のアルヘンティーナ・モレノ・デ・チャベス（二八歳で、陸軍軍人と結婚している）とその二人の子供が眠っている。ここへ来た目的は、ヨリエが外へ出たあいだに自分の子供を見てくれるようにアルヘンティーナに頼むことにあった。ヨリエの頼みを聞いたアルヘンティーナは、妹が屋外へ出るのを思いとどまらせようとした。外に見えたあの人影の群れは、もし妹を見つけたら発砲しかねないゲリラかサボタージュの労働者かもしれないというのだ。しかしヨリエは何も起こりはしないだろうと言い張った。

このときアルヘンティーナも好奇心にかられて隣接の廊下へ出て行った。そして二人の妹と女中が見たという光体を見ようとして廊下の端の方へ歩いて行った。突然、窓の近くに沢山の不思議なものがいる！」と驚いて金切声をあげた。恐怖したアルヘンティーナは気が転倒し、家の裏側の方へ向かって狂気のように走りまわった（図1の点線）。狂乱状態のまま彼女は庭に積んであったレンガの山に走り込んで地面に倒れたが、すぐに立ち上がって4号室に走り込んだ。彼女の様子が変化したために——ふだんはおとなしい内気な性格の人である——他の姉妹は驚いた。そんなに狼狽した姿を見たことがないからだ。彼女は泣いていた。そしてあえぎながら、実際に見えたのは飛行体だったとみんなに話した。

この騒ぎのためにモレノ家の両親が目を覚ましたが、子供たちは寝ていた。ヨリエ、ヨランダ、女中の三人は急いで4号室を通過して出て行って、家の行手方向へ向かった（図1の点線を参照）。

ドラ・マルティーナが先頭に立って三人は線路の方へ断固たる態度で歩いて行った。まず最初に注意を引いたのは同家の正門付近のかすかな緑色の光である。一同は、これは同家の使用人であるウアンカ氏の運転する小型トラックのライトにちがいないと思った。そこでドラは前方へ走って門を開いてトラックを中へ入れようとした。ところが、まさに走り出そうとしたとき、ヨリエが懐中電灯で緑色の光体を照らしたのである。突然六個の小窓が明るくなって、わずか四メートルむこうの空中に浮かんでいる不思議な円盤型物体がはっきりと見えてきた！（図1の物体f）。

それは直径二八ないし三〇フィートの固型物体で、表面はアルミニウムに似た金属らしい。多くの接合部分があって、リベットのように見える突起部（複数）もある。頂上には金属らしいドームがあるが、黒くて、リベットはない（図3）。

白いモヤと悪臭を放つ円盤

物体の表面にはマーク類はなかった。小窓は約九〇センチ×六〇センチの長方形で、強力な白色光を放っている。機体表面の他の部分は見えなかったが、これは白っぽいモヤが下部から出ていたためである。ドームから窓の下部までの距離は約二・五メートルないし三メートルで、窓の下部から地面までは一・五メートルにすぎない。機体は静かに前後にゆらめいていたが、中心を軸として回転しているのではなかった。地面に着いていないことがはっきりわかった。

ただちに一種の色晋が機体内部で明

るくなって回転を始めた。これは窓を通して内部が見えたからである。各窓は今やゆっくりと順次に色を変化させていて、そのためにまるで窓々が周囲を左回りで回転しているように見える。最初このような運動の印象は一つの窓から他の窓へ通過する赤色光によって与えられた。しかしだいにこの運動はスピードを上げて、ついに周囲全体がオレンジ調を呈してきた。まらかいブーンという音が光の運動に付随する。すると白っぽいモヤが濃厚になり始めて、硫黄のニオイに似た鼻を突き刺すような悪臭を放った。

三人の目撃者はこうした詳細を三〇秒以内で見とどけた。突然、物体から赤い炎が放射されて――どの部分から出てくるのかは不明だが――一同は我に返った。炎がみんなを激しく地面にたたきつけて、からだに襲いかかり、みんなを二メートルも転がしたからである。三名は起き上がって恐れおののきながら廊下の方へ走った。女中のドラ・マルティーナは先頭にいたために炎の影響を最も強く受けた。姉妹の二人は強烈な熱のショックを感じただけである。（翌日ドラは顔、腕、足の大ヤケドのためにトランカス病院で治療を受けた。ヨリエは病院にこの記録が残っていると考えている）

これと同時に、線路上で三個のもっと明るい光体が輝いて（図1の物体a、d、e）、この不思議な物体群は合計六個となった。最も離れている二個の物体（aとe）間の距離は約三六〇メートルである。家の後部からドラ・マルティーナによって目撃された例の正体不明の光（複数）は、一斉についたり消えたりするこれらの光だったと思われる。庭の中心から線路の築堤を肉眼で見ることは事実上不可能であるが、物体群の光が庭全体を照らすことはもちろん可能である。

伸びて途中で停止する光線

飛行体内部の光帯が次第に速く回転するにつれて、物体fは次第にその下部から放射されるモヤの中に包まれ始めた。そして物体の構造上の特徴はついに見えなくなって、そのあとは一片のオレンジ色の雲が残っただけであった。

東の方に面している2号室の窓から、モレノ家の両親は物体fの上部から幅三メートルの〝光の管〟が出るのを見ることができた。それは非常な正確さをもって同家の各所を探索していた。まるで精密な調査をしているかのようだ。

線路上に着陸したり上に浮かんだりしている他の物体群は、物体fと同じ金属的な外観を呈していたが、fがか

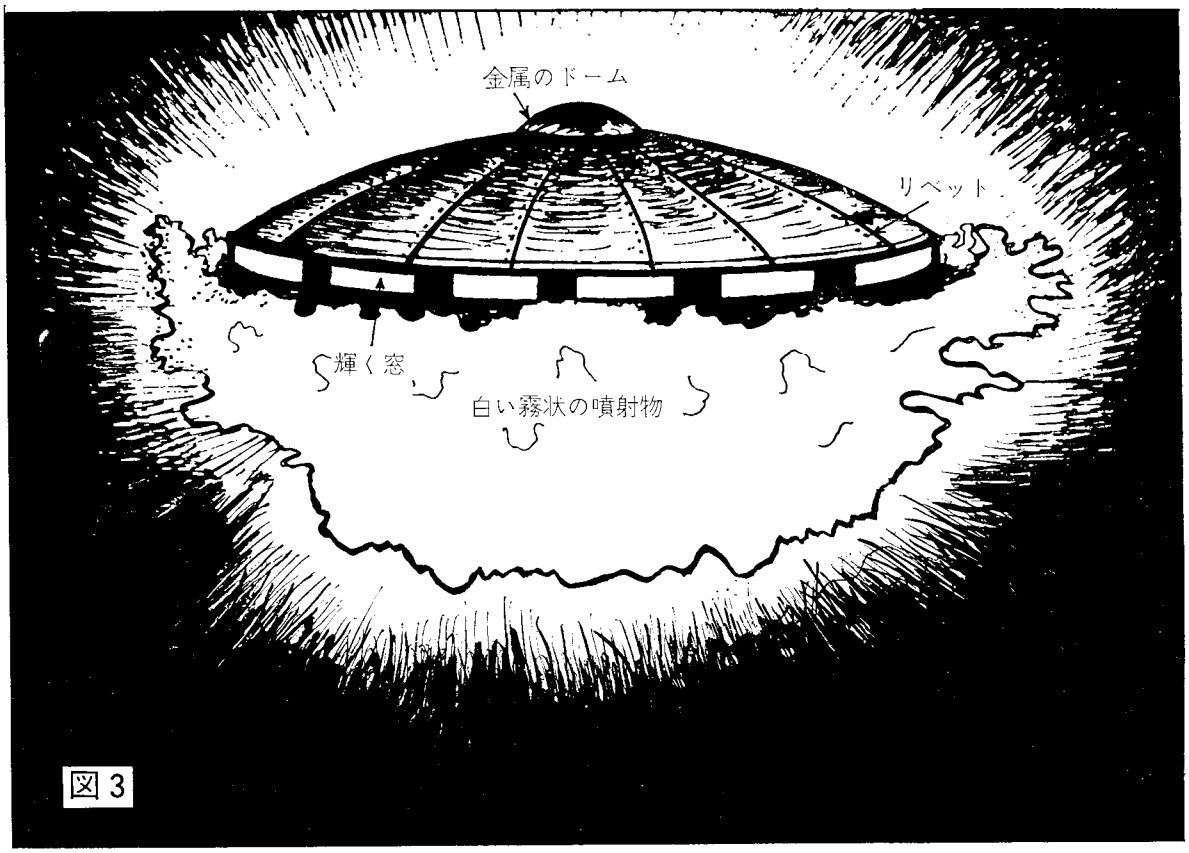


図3

なり大きいように見えた（ヨリエ・モレノはそれを「ラ・ナーヴェ・マドレ（母船）」と呼んでいる。サイズの点ばかりでなく、他の五個の物体の行動を指揮しているようにも見えたからだ）。あたり一帯は非常に強く照らされたので、細部を観察するのは比較的簡単だった。

二本の凝集光線が物体から出始めるのをヨリエが見たとき、彼女は4号室の入口を通ってふたたび外へ出て、家の最右端の方へ歩いて行った（**図1**のB地点）。その光線は家から二五メートル離れた小屋にまっすぐに向けられた。この中には一台のトラクターが入れてある（**図1**）。線路と小屋との間の一八〇メートルの距離を光線がずっと伸びて行くには数分を要した。そして光線はついに小屋の手前約二メートルの所で停止したのである。幅三メートルの光線が空間を伸びて行くのは恐ろしい光景だった。光線全体にわたって全然地面に触れた個所はなく、地上約一メートルの空間にあった。この光線は完全な円筒形で、どこにも影はない。（しかし物体自体の直径から見て、その管状光線の光源のポイントは最先端よりも小であったと思われる）。

光線は蒸気や音を発しなかった（当時の新聞は「発した」と誤報している）。光線はトラクター小屋の手前で約四〇分間とどまっていた（翌日モレノ家は、トラクターの各部分についていた油の跡が、まるでていねいに洗われたかのように消えているのを発見した）。

本能的にヨリエは右の前腕の半分を、物体から放射されている管状光線の一つに横から突っ込んでみた。彼女が最初に思ったのは、この光線は何か未知の装置によって放射される集中的な水の噴流ではないかということだった。光線の水晶のような透明さがそう思わせたのである。しかし前腕は濡れなかった。ただ強烈な熱を感じただけだが、皮膚に影響はなかった。何か非物質的な物だった。彼女がそのような事をしても管状光線に変化は起こらなかった（光線が小屋までとどいたとしても、それが垣を貫いたとしても、やはり害を与えないことは明白である）。

未知の物を目前にした恐怖でヨリエは屋内へ逃げ込んだ。父親の老モレノ氏は自ら出かけて光線の原因を調べようとしたが、娘が押しとめた。妻のテレサは祈っていた。2、3、4号室からも一同は他の物体群からも輝く光線がゆっくりと同家の方へ伸びて来るのを見た。光線は白色で、形状は完全な円筒形である。光は散ることはなく、三メートル幅のパイプに似て、各物体から二本ずつ平行して伸びていたが、物体**f**だけは光線が一本しかなかった。光線の先端はとぎれている。（物体**b**と**c**を連結した例の管状物はすでに消滅していて、人影群もなかった。そして両物体は凝集した光線を家の方に向けていた）

物体**e**からも凝集光線が放射されるのを一同は見た。その光線はトラクター小屋の南側にあるニソトリ四〇羽収容の鶏舎の方へ動いていた（**図1**）。そしてその先端は鶏舎からすぐ手前の位置でぴたりと止まっていて、長くそのままであった。

一方、家の内部は温度が四〇度C以上に上昇し、その温度を上下していた。これらの異常現象が発生する前は屋内の温度は一六度Cを保っているにすぎなかったのである。まだ眠っていた子供たちのベッド着は汗で濡れていた。

屋内はまるで白昼のように明るく照らされていた。どこから光がはいって来たのか、ヨリエには説明できない。光線が壁を貫通したのかどうかは目撃者のだれにもわからなかったが、ヨリエによればこの光線が内部が明るくなった原因であることに間違いはないという。もっとも彼女は断言するのを控えた。（しかしこの光線がヨリエの前腕や垣を難なく貫いた事実は、これが正しい説明かもしれないという有力な証拠になる）

フランス人ジャン・グピルの集束磁場に関する仮説によれば、これらの〝パイプ状光線〟は磁場のトロイド（円錐曲線回転面）状の放射ではないかという。木または石は磁場にとって障害にならない。グピルの説によれば、トロイド状に放射されるあの輝く光線は、壁の反対側で再構成されて、固型物を貫通する光となって驚くべき状態を呈するのだという。そこで、少なからぬ量のエネルギーの放射を考慮に入れれば、屋内の温度は当然上昇するだろう。

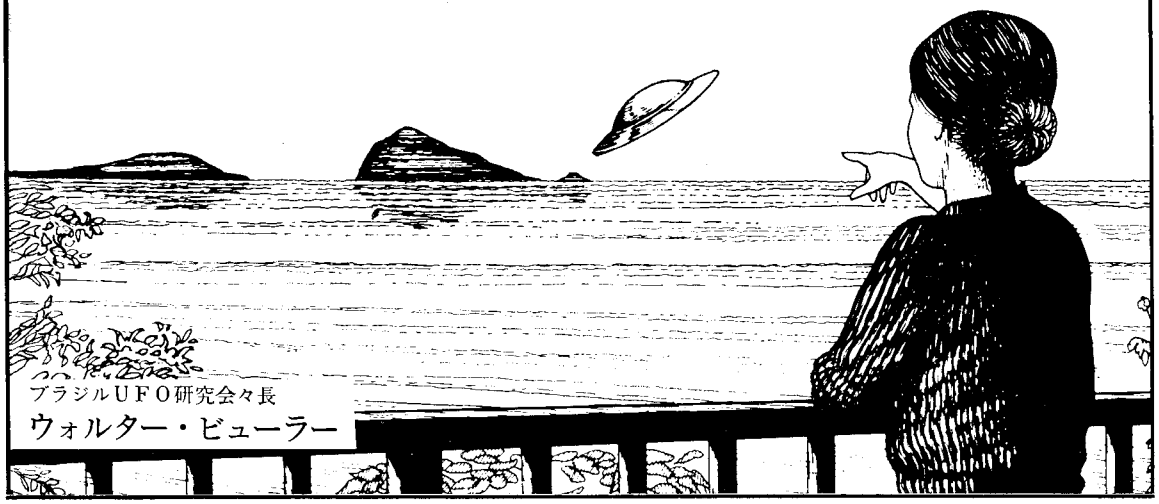
その後まもなく物体**f**はその光線を南方のトランカスの町の方向へ向けた。それはゆっくりと伸びて、一〇ないし一五分後には町の郊外に達した。それから上方に伸びて一八〇度のターンを行なってから北側へ向いた。次にゆっくりと縮んで、ついに物体**f**の中へ引込んでしまった。するとその物体は線路の方へ移動し始めた。その場所で他の物体群と一緒になり、全部が東方へ低く飛び立った。メディーナ山脈の方向である。最初に目撃された時から四〇ないし四五分間が経過していた。その後二〇分以上もの間、地平線はオレンジ色に染められていた。

（訳注＝このUFO群は硫黄に似た臭気や炎や煙等の、きわめて原始的な〝公害物〟を放つけれども、必ずしもホスタイル（敵対的）ではなかった。ドラ・マルティーナが大ヤケドしたのは物体に接近しすぎたためである）

久保田八郎訳

海上に着水した円盤！

不思議な“人物”が手を振った。驚いたマチャド家は……



ブラジルＵＦＯ研究会々長
ウォルター・ビューラー

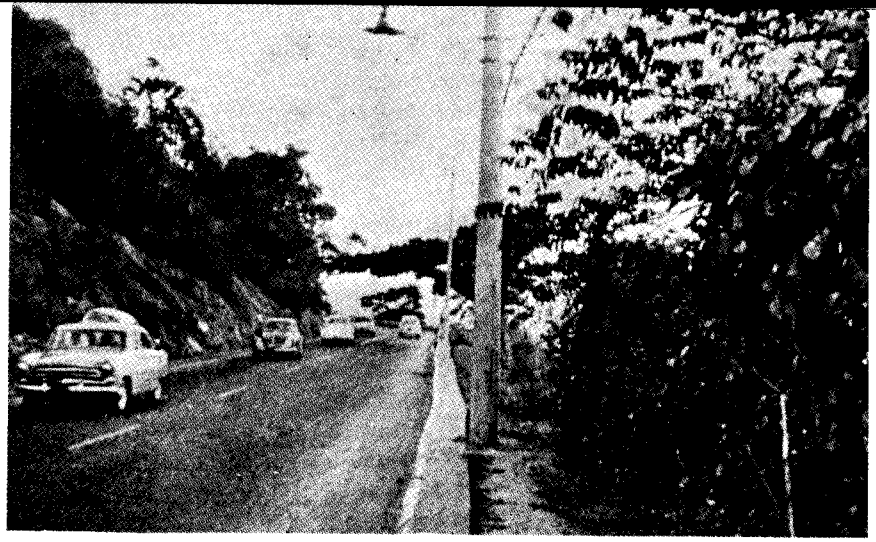
一九七〇年六月二七日の白昼一一時四〇分に発生したこの事件は注目に価する。というわけは少なくとも八人の目撃者によって確実に観察されたことと、ＵＦＯが人口の密集した都会地へかつてないほどに接近しつつあることを明確に物語っているからである。一機の大きな金属的な円盤が南大西洋の海面に着水した。場所は海岸の絶壁をけずり取った有名な海岸道路であるニエミール・ハイウェーから五〇〇メートルばかりの沖合である。このハイウェーはレブロンのリオデジャネーロ寄り郊外から南西の方向に伸びているもので、この道路から美しい海面の風景をながめることができる。

この円盤は三〇分水面に着水しておりその内部には二人の乗員がいた。二人は宇宙飛行士の宇宙服に似たヘルメットと白っぽく輝くアルミニウム色の衣服を着ていた。円盤が離水したとき、そのあとの海面に一種の浮き輪のような物を残したが、どうやら円盤着水時にフロートの役目を果たす物らしい。

ニエミール・ハイウェーは問題の位置の海面から三〇ないし四〇メートルの高さの所にある。そして証人たちが目撃した問題の家はこの道路の少し上あたりに位置している。その日は日曜日で、晴天下を一時間約一八〇〇台の自動車が――とわれわれは見積もったが――通過していた。事件のあった日の早朝、私は（ビューラーは）自分でその地区へ行っていた。午前七時だが空はまだ曇っていた。（南半球では六月は一年の内で日光の少ない月であることを考えられたい）

私がインタビューしたおとなの目撃者三人はアリステウ・マチャド氏とその奥さんのマリア・ナザレ・マチャドで（ハイウェーの三二八号に住む）、それに隣家のジョアン・アギアール氏である。アギアール氏はブラジル連邦警察の警官で、同じハイウェーの二〇号に住んでいる。四人目のおとなの目撃者はマチャド家の長女で二三歳のクレウザである。あとの四人の目撃者はマチャド家の次女以下の娘たちで、一四歳のコンスエロ、一〇歳のローゼマリー、八歳のマルガリーダ、五歳のカティーアである。（私は五人の娘たちには会わないで、その両親とジョアン・アギアール氏に会見しただけである）。この事件について即刻私に通報してくれたのはリオの新聞ディアリオ・デ・ノティシアス紙のカルロス・ネット博士であり、その結果私は彼と同行して現場へ行き、同日午後四時にこれらの目撃者と話すことができたのである。

不思議な円盤と人間の出現



●ニエミール・ハイウェー。この道路の左上にマチャド家がある

マチャド家の説明は次のとおりである。

マリア・ナザレ・マチャドは台所にいて昼食を準備していた。時々彼女はベランダへ出て行った。そこでは家族一同がアギアール氏といっしょにパーティー・ゲームを楽しんでいたのである。一度彼女は時刻を尋ねた。一一時三八分であった。それから約二分後にアギアール氏がふと海上を見て急に一同に呼びかけた。水しぶきを上げるそうのモーターボートだと彼が思った物が見えたからである。この物体が着水した時に周囲へ水煙を上げたのだ。

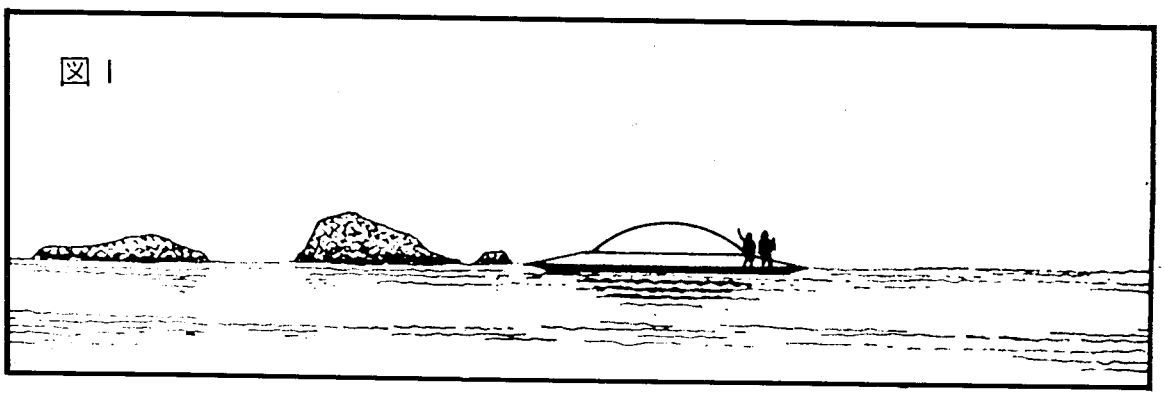
ただちに一同はゲームをやめて、どうしたらよいか、モーターボートが援助を求めているのかどうかなどについて熱心な議論を始めた。というのは物体の内部に〝水浴者〟が二人いて、腕を振って合図をしているように見えたからである。アギアール氏は物体内に二人の人間がいて輝く衣服と頭部に何かを着用していたと確信している。やや厚目の上下続き服で、まったくの小人のように見えたという。

二人の人間は物体のデッキ上で働いているようであった。物体は白っぽい金属性の色をしており、長さは、四メートルから六メートルの間であるらしい。上部には透明なドームがついている。(図1) アギアール氏が救助関係機関へ電話をかけるために付近のマール・ホテルへ走ることになり、一方あとの人々は物体を子細に観察し続けた。それは海の水が黒く見える部分と明るく見える部分との境目あたりの、海水が常にどす黒く見える所に来ていた。

ディアリオ・デ・ノティシアス紙の記事(一九七〇年六月二八日付)によれば、円盤が着水していた個所は海岸から約五〇〇メートルの位置というがその後の調査では七〇〇または一〇〇〇メートルあったことも考えられている。いずれにしても海岸に驚くほど近い!

私のその後の調査によって、円盤は一時海岸から一〇〇メートルばかりの位置まで接近したことがわかった。音を全然発することなく、船のように揺れ動くこともしない。

図1

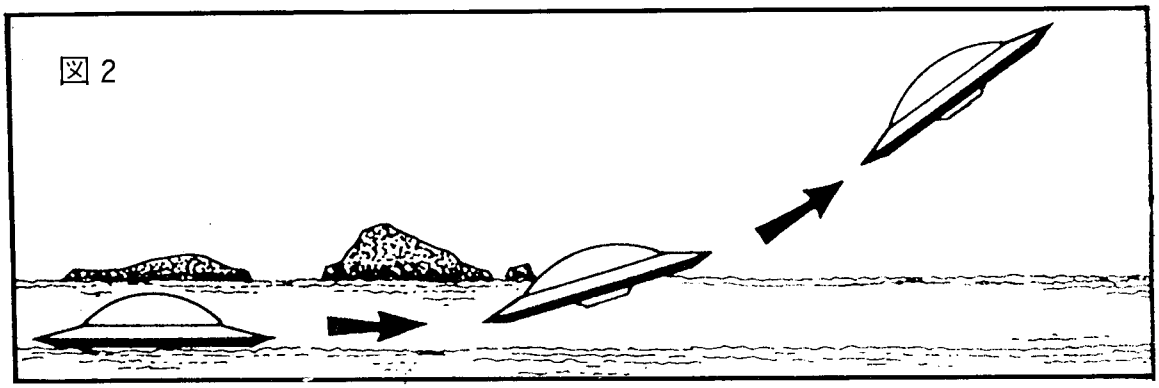


滑水して飛び上がる

アギアール氏がマール(海洋)ホテルへ往復するに要した時間は二五ないし三五分位である。このホテルはレブロンの方向一キロメートルの所にある。彼がマチャド家へ帰った時、円盤はまだ海上にいた。それで彼も円盤離水時の目撃者の一人となったのである。だから円盤が海上に着水していた時間は約四〇分だったと言える。

アギアール氏の説明によると、円盤が離水した時、それは垂直に上昇したのではなく、水面上約三〇〇メートルをモーターボートのようにしぶきを上げて滑走したのだという。したがって物体が空中へ浮かび上がって低い弧をえがいて南東の方向へ飛んで行ったときに目撃者たちはそれが普通の船ではなくて空飛ぶ円盤だったということに気づいたのである。(図2)

マリア・ナザレはすぐれた観察者で



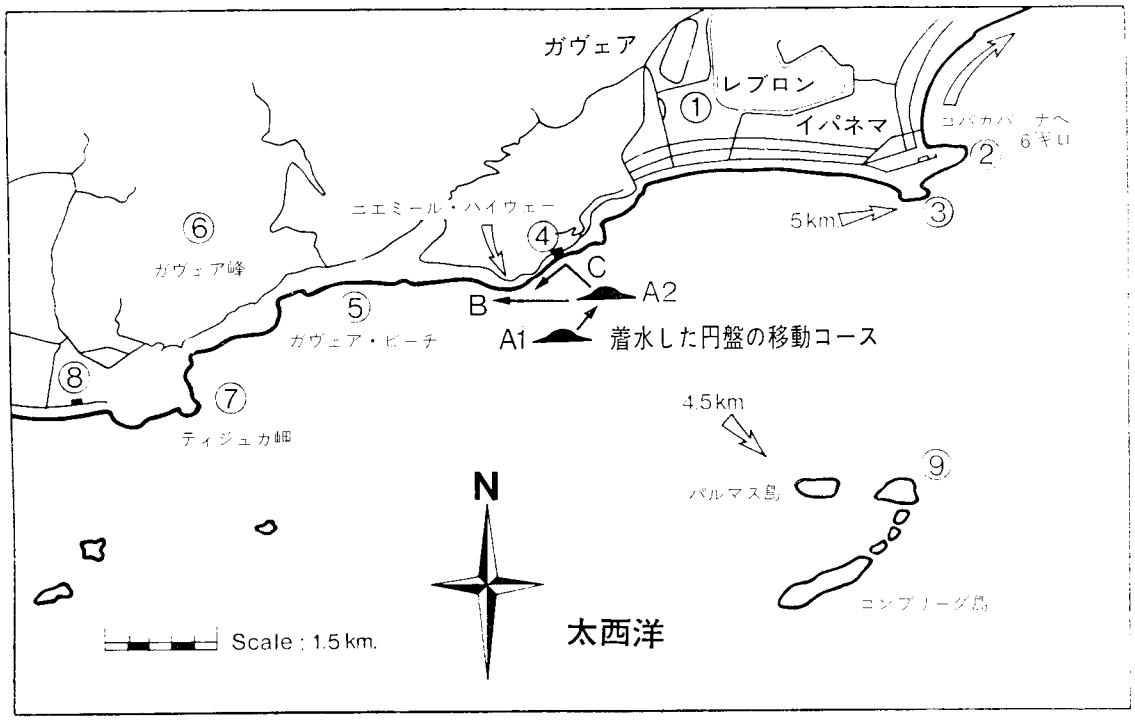
あることを示した。というのは円盤が離水したとき彼女はその下部にカランボラという名で知られているブラジルの果実のように見える六角形の物体があるのに気づいたからだ（図3）。この小付属物は、機体の中に引込んだように思われた。しかもこのカランボラ状物体の表面には多くの色光があって、緑、薄黄、赤等の光が順次にきらめいていた。（他の人の報告によると、一個の回転する光体がこのような色光を放ったのではないかという）

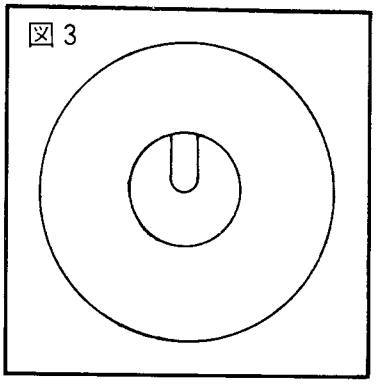
ふたたび乗員が見えた

すでに述べたように円盤が海上に着水している時はアルミニウム製のように見えたが、ひとたび空中に飛び上がると透明になった。このときマリア・ナザレは機体内部に二人の乗員がすわっているのをはっきり見ることができた。

その頃ハイウェーには車の交通が少なくて、騒音はひどくなかったが、それにもかかわらず先に述べたように目撃者のだれも円盤から発せられると思われる音響を聞いていない。飛び上がった物体は急速に視界から消えて行った。

奇妙な輪が残った





円盤が着水していた個所の海面にトランクまたはヒツくらいの大きさの輪の形をした白い物があったが、しばらくしてこの輪は沈んでしまった。するとまた現われて、その物体から黄色のタマゴ型物体が分離して出て来た。その径は最も長い部分で約四〇センチメートルで、水面から約二〇センチほど突き出て浮かんでいた。

約三分間このタマゴ型の黄色の物体は静止した後、海岸の方へゆっくり移動し始めた。長軸を目撃者の家の方へ向けている。この物体の他の端には緑色の縁があって、あとで黄色の本体から分離して、約八〇センチの距離を保ちながらうしろからついて来た。

マリア・ナザレの推測によると約一五分間経過後に、この黄色の物体は海岸から約一二〇メートルの距離の所まで来た。それから左方へ直角ターンをしてガベアの海岸の方へ頭を向けたがなおも岸辺と大体に同じ間隔を保っていた。この西方移動は当時の海流の方向とは逆である！

そこでマリア・ナザレは家の前の路上に出て黄色い物体の動きをなおも観察しようとした。そのときたまたま数名の少年が路上をやって来たので、物体の方を指して呼びかけた。少年たちは石を投げたけれども、あたらなかった。

この物体はその後約一〇分ばかり見えていたが、みんなが立っていた場所から五〇〇メートルばかりの所の岩の岬にかくれて視界から消えてしまった。

一方、白い輪は数度見えなくなったあとふたたび浮かんでいて、黄色の物体と再会しようとするかのように、ゆっくりとガベア海岸の方へ接近しつつあった。みんなは計二〇分間この白い輪が見えかくれするのを注視していたが、これもやがて視界から去っていった。

円盤の出現によってパーティー・ゲームを中断するハメになったマチャド家が、何も見えなくなったのでベランダへもどったのは午後三時、そして、一同が昼食をとったのは午後五時である。

アギアール氏がかけた電話はリオデジャネーロ中心部のカラボーン空港の近くに本署のある水上警察に対するものだったので、署のパトロールボートが現場へ来るのは少なくとも一時間後と考えられた。アギアール氏が電話をかけると、警察は災難にあったと思われる沖合の〝人々〟を救助すると約束した。したがってわずか二〇分後、パルマスとコンプリーダ島に向かってやって来る猛烈なスピードのランチを見たとき、アギアール氏は非常に驚いたのである。

●円盤が出現した方向を示すマチャド夫妻

このランチは疑いもなくコパカバーナに停泊していたものであった。われわれはその舵手が円盤の離水を見たかどうかは知らないが、おそらく彼らは見たであろうと思われる。なぜなら彼らは円盤が離水して白い輪が浮かんだ場所に到着するずっと以前から見えたはずなのだ。

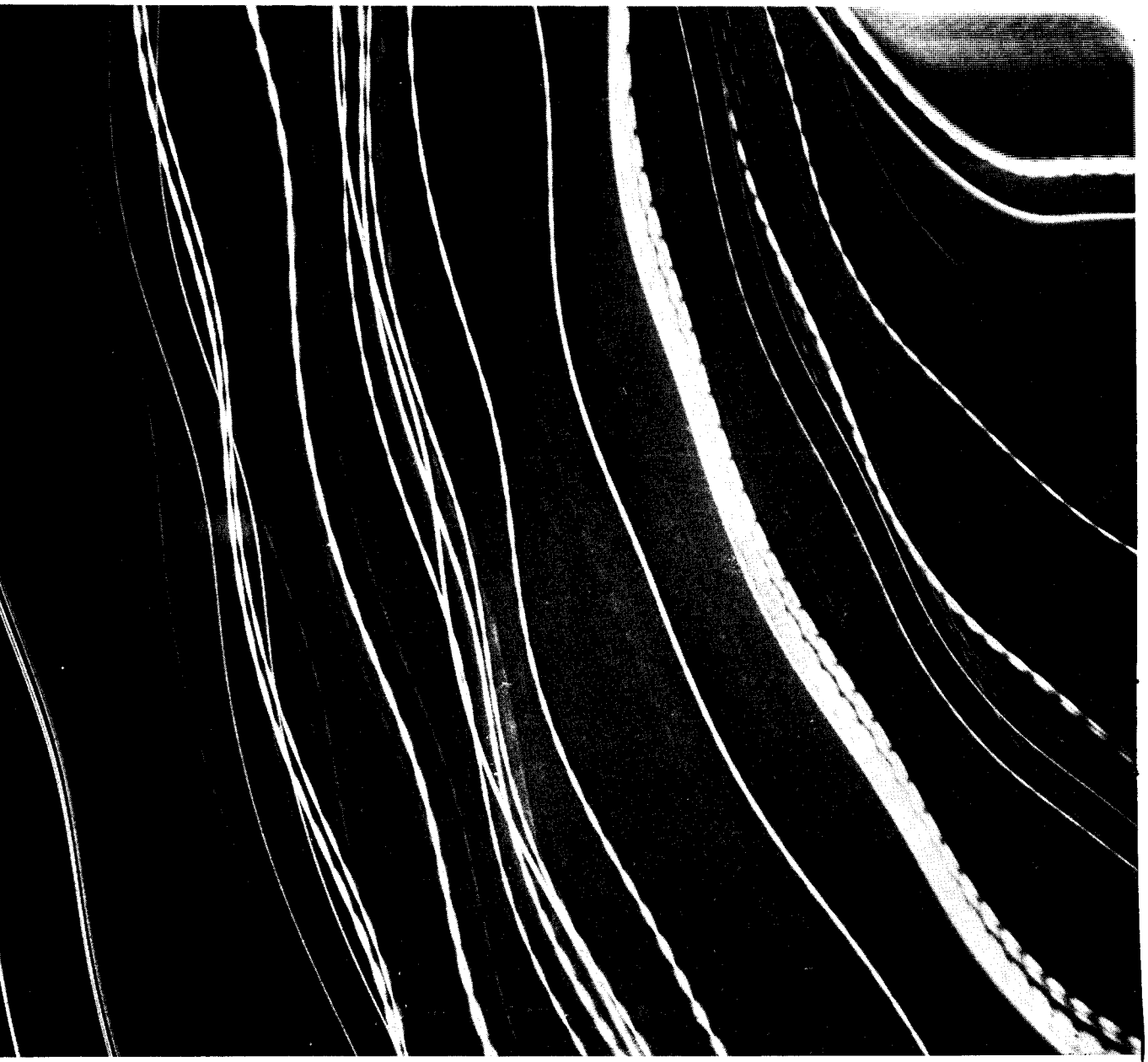
目撃者たちがそこに到着したとき、ランチは海岸から一キロメートルほど離れた場所に停止した。目撃者たちはそのときランチの舵手が船内で非常に重そうに、一つの円筒形の赤い物体を高く上げるのを見た。その後ランチは猛烈なスピードで元の方向へ引き返した。

久保田八郎訳

●好評発売中！
なぜ空飛ぶ円盤は来るのか
フレッド・ステックリング／久保田八郎訳
¥550　〒80
●テレパシー●生命の科学
ジョージ・アダムスキー／久保田八郎訳
¥400　〒80　　¥480　〒80
文久書林
東京都文京区白山1－29－12
振替・東京2521　Tel.(813)2495
◎円盤飛来の真相と人間の真の生き方を示す名著3点。

本物のライティング・ライツ!?

★名古屋市の昭和高校3年（撮影時2年）酒井忠久君が、1973年11月2日夜10時頃、昭和高校本館屋上で数名の天文部員と共に土星の観測撮影を行なった際、ネガの2コマに奇妙な線状のものが写っていた。撮影時も現像時も数名の部員がそばにいたのでトリックでないことを証明できるという。写真中央より左寄りのボケた白い像は土星。天体写真としては失敗作。これは2コマのうちの1つ。（コーワSE・コーワ50mmF1.9・アストロ望遠鏡10.8cm・F1600mm使用・シャッタースピードは不明・トライX・カメラ手持ち撮影・ネガ提供は同校3年船橋立泰君）

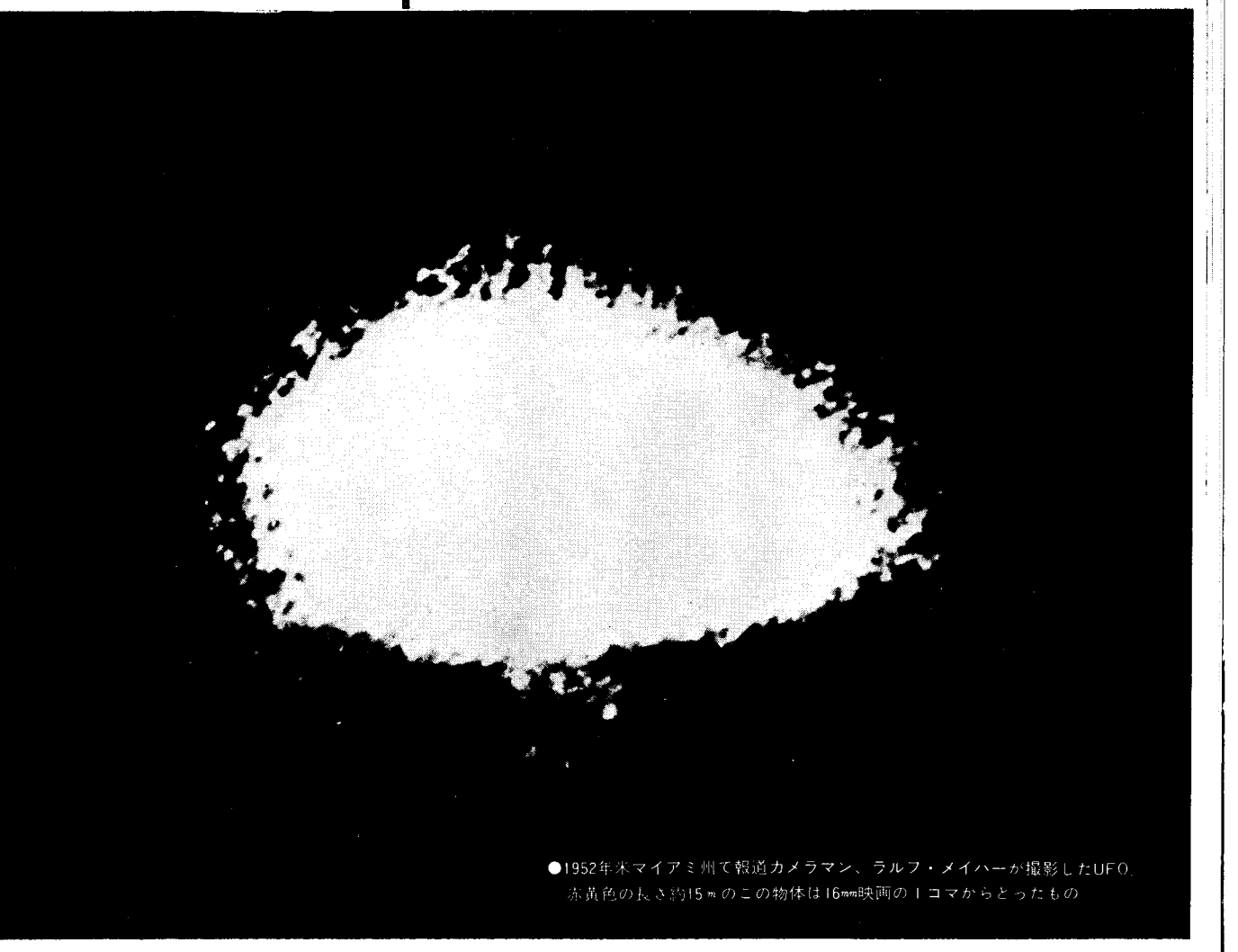


●〈天空と大地〉科学シリーズ(5)

工学博士　橋本　健
橋本電子研究所々長

空飛ぶ円盤はGエンジンか？

二人の学生の反論に対する回答



●1952年米マイアミ州で報道カメラマン、ラルフ・メイハーが撮影したUFO。赤黄色の長さ約15mのこの物体は16mm映画の1コマからとったもの

謎の空飛ぶ円盤の推進法については重力場推進方式が有力である。本誌第4号に掲載した橋本博士の「空飛ぶ円盤は存在する」に対して大きな反響が起こったが、ここにふたたび同博士が独特な理論を展開する。

Gエンジンとは重力場機関のことで、私は拙著「超物理学入門」（池田書店）や、これを批判した原田三夫氏との討論（コズモ4号）の中で、空飛ぶ円盤は重力場機関によって飛ぶのではないかと書き、イギリスの技術者レナード・クランプの重力場推進仮説をご紹介しておきました。

これについて読者の方々からいろいろなご意見のお手紙を戴きました。この中で代表的なものを掲載し、次に私の意見を述べてみたいと思います。まず金井氏の論文からみましょう。

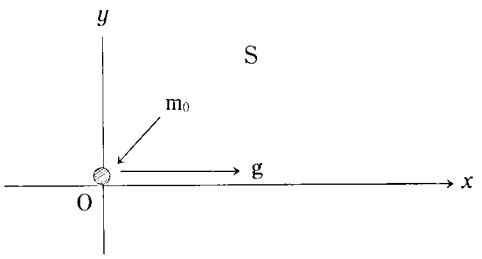
超光速は不可能?

神奈川県立秦野高校1年　金井武美

コズモ第4号の「空飛ぶ円盤は存在する」の中で博本博士は「重力による加速なら光速を超えられる」と述べておられますが、これを特殊相対論的運動方程式を使っていろいろ演算しますと「光速を超えることは不可なり」という結果が得られます。以下それを証明します。

証明

座標系Sを考え、原点に質量（静止質量）m_0の物体が静止しており、しばらくしてgなる重力場に於ての加速度を受けたとする。



時刻t後の物体の速度をV、そのときの質量を

$$m=\frac{m_0}{\sqrt{1-V^2/C^2}}$$、　光速をCとする。

そしてt＝0のとき、V＝0とする。

問題は、光もgと同じ方向に走り、物体の速度Vがt→∞のとき、Sに静止している人から見て超光速になるか否かを調べればよい。

まず、特殊相対論的運動方程式の形に書くと、

$$\frac{d}{dt}\left(\frac{m_0}{\sqrt{1-V^2/C^2}}\right)=\frac{m_0}{\sqrt{1-V^2/C^2}}g$$ となる。

左辺の微分を計算し整理すると

$$\frac{dV}{dt}=g\left(1-\frac{V^2}{C^2}\right)$$

$$\therefore\left(1-\frac{V^2}{C^2}\right)^{-1}dV=gdt$$

両辺を積分すると

$$-\frac{C}{2}\log_e\left|\frac{V-C}{V+C}\right|=gt+k$$　（kは任意の定数）（eは自然対数）

$$\therefore\left|\frac{V-C}{V+C}\right|=e^{-\frac{2}{C}(gt+k)}$$

しかしt＝0のときV＝0だからk＝0

したがって $\left|\frac{V-C}{V+C}\right|=e^{-\frac{2}{C}gt}$

また、$\vec{C}\parallel\vec{C}$より $\frac{g}{C}>0$

$$\therefore-\frac{2}{C}gt<0$$

∴t→∞のとき、e→0

それゆえV→Cとなり、超光速は不可能となる。

あくまでことわっておくが、これは僕自身の意見で、絶対正しいとは限りません。UFO研究上の参考資料として下さい。また僕は、タキオンは先天的に超光速で走り続けているものなので、タキオンが普通の物質になったり、その逆は不可能のような気がします。境界である光速度にならねばならないからです。それにしてもＵＦＯ問題は現代に於て第一級の価値があるものと信じて疑いません。

補説

以上の論文の補説を致します。

物体の速度(V)が光速度(C)より速くなるかどうかは$\vec{V}-\vec{C}$の符号により決定できるから、$\vec{V}$すなわち$\vec{g}$と$\vec{C}$は同じ方向でなくてはいけない。

(方向が異なると、例えば$\vec{V}-(-\vec{C})$となり、V+Cなどとなる。これは|V|<|C|のとき、V−C>0となるからおかしい。Cは今はVector と考えている。)

$\vec{V}>0$で$\vec{C}>0$のときは、

$|V-C|=e^{-\frac{2}{C}gt}(V+C)$となり、t→∞となると、

右辺→0

∴V→C

$\vec{V}<0$で$\vec{C}<0$のときは、

$|C-V|=e^{-\frac{2}{C}gt}(-V-C)$となり、t→∞となる

右辺→0

∴C−V→0だから、V→C

(いずれも$\frac{g}{C}>0$、eは自然対数の底)

〔金井君から、その後別な論文が寄せられましたが省略します。 ・編者・〕

金井氏の論文に対する反論

金井氏は私の出した式とは全然別な式を持ってこられて、その式を変化させた結果、超光速はあり得ないと結論されたわけですが、反論である以上、私の式を元にしてこの計算経過が間違いであると指摘するか、私の式が間違いならば、その式の間違いを指摘すべきで、全然別の式をもってこられたのでは直接的な反論にはならないのです。しかし間接的な反論にはなります。

相対論の結論は「超光速は絶対にあり得ない」という事なのですから、相対論の式をいろいろもってくると「超光速はあり得ない」という結果が出てくるのは当然なのです。

物理的に考えましても、もし重力の伝達速度が光速であったとすれば、光速で引かれる物体の速度が超光速になるはずはありません。

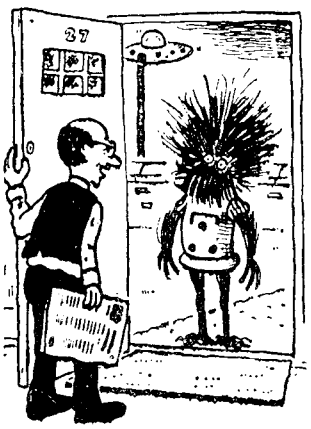
たとえば、風速一〇mの風の中で、ヨットをその風の力によって毎秒一〇m以上の速さにしようとしても無理なのと同様です。

相対論によって超光速が得られない理由は「光速に近づくと質量が無限に大きくなり、無限に大きくなった物体を加速するためには力が無限に必要であるからだ」ということだけのために、超光速が得られないのであるならば、私の前の議論が成立するのですが、実は超光速が得られないというのは、それだけの理由からだけでなく、「光速」こそあらゆる物理現象における最高速度であり、かつ「一定」であるとアインシュタインは「仮定」し、これを元にしていろいろな現象を説明する式を作ったものですから、それらの式を元にして計算すると、あなたの言われるように、光速以上のものはできないという結果が出てくるのが当然なのです。

しかしアインシュタインの「仮定」は間違いであるとして、別の考え方によっても、現象を説明できる式はできるので、そのような考えを進めている大学教授もあります。

いずれにしろ、私はアインシュタインの相対論は絶対であるとは思っていないので、更によりすぐれた理論が続々と生み出されるべきだと思っています。

次に雲英恒夫氏の論文を載せます。



あなたは別な惑星から来られたのですか？　わたしゃ、うちの娘のボーイフレンドかと思いましたよ。

重力場推進に関する一考察

慶応大学工学部2年　雲英恒夫（きら）

僕はコズモ第4号57頁の図の理論では円盤が飛行できないと考えるものです。

なぜなら、あの図ではたしかに円盤だけは動きそうな気はしますが、はたして現実にはどうでしょうか。つまり、あの図における重力場の中心は、いったいいかなる重力で移動しているのでしょうか。円盤が動くから重力場の中心も動くというのは矛盾しています。重力場の中心が移動してこそ、初めて、円盤が動きまわれるのです。円盤が自由に飛行するためには、重力場の中心が、独自の方法で推進されていなければならないのです。これは、ニュートン第3法則(作用・反作用)から明らかと思われます。

また、もし円盤の重力場が地球重力場に対して作用し、運動するという事になると、円盤の地球起因説が有力になります。なぜなら、それで宇宙空間を飛行する事は難しいと思われます。宇宙空間にある重力場は巨大なものですが、質量の小さい物に対してはわずかしか影響をあたえないからです。

さらにこの事から、重力というものについて考えると、重力とは普通質量の小さいものの間では無視されます。例として、素粒子間の反応では重力は無視されますし、我々も地球上の物体において、地球との引力は問題にしても、物体間に存在する万有引力については、精密実験以外では無視しています。さらに小さな惑星、小惑星の中のあるものでは、人間がジャンプしただけで、その速度がその小惑星の第1宇宙速度に達してしまうと聞きます。これらはすべて重力の力Fを表わす式　$F=G\frac{M_1M_2}{r^2}$……Ⓐ（M_1M_2は2物体のそれぞれの質量、rは2物体間の重心間の距離、Gは重力定数で約6.67×10^{-8}ダイン・$cm^2\cdot g^{-2}$）において、Gの値が非常に小さいため、M_1M_2が非常に大きい時しかその力Fは問題にならぬほど小さいのです。つまり、重力は小さい視野、ミクロシステム内では、その影響は小さく、考える必要はないといってよいのです。そして大きな視野、マクロシステムで見た時問題になるのです。たとえば地球と物体、地球と月、太陽と惑星、恒星間銀河系間の問題の時、少なくともシステム内に、1つは、巨大な質量が入ってくる時です。もし距離が離れすぎている時は、すべて巨大でなければならないのです。

さて、ここで円盤を考えてみますと、その加速度は非常に大きなものらしい。すると、非常に巨大な力がそこに働いているはずである。しかし重力を使ってあの加速度を作り出すには、57頁の図の重力場の中心に、惑星規模の質量を置いたのと同じ状態にしなければならない。もし地球表面に、小惑星規模でも、そんな質量が出現したらたいへんな事になります。また53頁の時間計算においては、結果はさておき、仮に$\alpha=g$つまり、重力場の中心に地球規模の質量を置く事になっていますが、ちょっと考えにくい事です。(惑星間には重力のため潮汐力が働き構造上、ロッシェの限界というものの内に入ると惑星自身がくだけちるような事になる。宇宙的視野で見た時、地球などは岩のようにじょうぶなものではなく、まるで水滴のように弱いものです)

以上のような事から、僕は、重力場機関はありえないのではないかと思います。

さらに、同ページ近くに書かれている光速度に達し、質量が無限大になるという考えですが、この事は起こりえないと思います。なぜなら、もし質量が無限大になると、Ⓐ式より距離rがどうだろうと、重力Fが無限大になる。つまり、この世界すべての物質(空間も？)がそこに引きよせられる事になります。言い換えれば、星が円盤を引きつけるのではなく、円盤が全部の星を引きつける事になるのです。こんな事は実際に起こるとは考えにくいでしょう。さらに、重力が波のようなもので、光速で伝わるとすれば、円盤はどうやっても重力の伝わる速さ、光速以上で行動できないでしょう。

さて、以上から考えられる事をいくつか記します。

① 円盤は重力場機関を使用していない。
（さもなければ②）

①′ たとえば、他の力場、無慣性飛行、また最近のデータから空間ジャンプとも考えられる。
その他……。

② ニュートン第3法則(作用・反作用)の通用しない領域があるのかもしれない。

③ 円盤は光速を出す事はできない。もし、それより速く移動できるとすれば①′の方法か④である。

④ アインシュタインの相対性理論は、光速度付近において、その昔、古典力学が、光速度の何％という領域において通用しなくなったと同様通用しない。そして、他の新しい理論（真実に対する近似論）がそこに存在する。

④′ アインシュタインも、完全に万能というか、すべてに手を出せたわけではなかった。彼は古典力学から我々を脱皮せしめた大天才であり、尊敬するが、それは真理追求のほんの一歩にすぎないと思われる。これ以上の真理追求には、さらに新しい考え方、新理論が必要と思われます。現に素粒子論等で、アインシュタインの理論と同等、またはそれよりもよい理論が出ています。(例. 統計学、比熱に関するデバイ理論)もちろん、他はどうでも、相対性理論が究極でまちがっているかどうかなどはわかりません。

僕は天文関係から円盤に興味を持ちました。円盤の存在は信じていますが、その正体、そして、もし、それが物体であった時、その動力、目的等については的確な答がわからず、多くの方の御意見を聞き考えている状態ですので、よろしくおねがいします。

補説

上記の内容に重大なまちがいをしていたので、訂正させていただきます。その誤りとは、文中で「あの加速度を作り出すためには、57頁の図の重力場の中心に、惑星規模の質量を置いたのと同じ状態にしなくてはならない」と書きました。

これは、重力場の中心が円盤から 6,400km（地球の半径）の所にあった時の場合でした。実際には円盤のもっと近くに(数10m内でしょう。）重力場の中心を設定しているでしょう。そうすれば、当然、充分な加速度を得るための換算質量も、もっとずっと小さくなります。

（以下計算は省略）

雲英氏に対してお答えします。コズモ第4号五七ページの図はクランプの仮説にすぎませんが、雲英氏は五七ページの図の上部の重力場の中心だけに着目して、その下の反力場の中心の方を見落としているようです。重力場だけならば、雲英氏の言うように、そこに小惑星程度の質量を置かなくては円盤は飛ばないでしょう。そんな事をすれば、地球もそれに引かれてしまう。大変な事になるでしょうが、ちょうどそれを打ち消すだけの反力場が、円盤の下の方にできるので、円盤から十分離れたところの地球からみると、まったく引力も斥力も感じないのです。

このように引力と斥力とペアに生じるのですから、地球重力のない宇宙空間においても、円盤は飛ぶことができ、地球起因説にこだわる必要はありませんし、私は地球起因説はとりません。

次に光速度になった物体は質量が無限大になると重力が無限大になるから、この世界のすべての物質が引きよせられて大変な事になるということですが、たしかにそうで、私も光速度になった物体は質量が無限大になるとは思いません。相対論の或る式によれば、そのようになることになるが、その時Fも無限大になるから、光速に達し得ると言っただけで、私は相対論が正しいとは思っていないのです。

相対論が重力の伝達速度も光速で伝わると言っているとすれば、光速で物体が運動する時、もはや重力は生じ得ないことになります。

次にあなたの最初の疑問、重力場の中心はいったいいかなる動力で移動しているのかという問題になります。

これはもちろん円盤から何かで支えているのではないでしょう。そうだとしたら、その支えているものに力が加わるだけで、円盤は移動しないからです。円盤が光線のようなものを円盤の上方および下方に投射する、そうするとそこに空間の歪み、エーテルの歪み、電界のようなものが生じて、空間（エーテル？）にできる重力場に対して、円盤は引かれてゆく……ということでしょう。しかし、そんなものができるか、また反力場などができるか……となるとなかなか困難な問題です。

しかし、どんなに困難な問題であっても、われわれは新しい事実に対して眼を覆ってはならず、どんどんと新しい事実をも説明できる仮説をたててゆかなければならないと思います。レナード・クランプらの重力場機関説も一つの仮説でありますが、これが万能かというとそうではない。これでは説明しにくい所もたくさんあるのです。これに対し、私が前から持っている四次元説について説明してみたいと思います。

四次元説

最近ユリ・ゲラーという超能力者があらわれて、スプーンを指先で曲げることをTVでやっ

てみせたら、日本の数百の家庭のスプーンが同時に曲がったり、こわれた時計が動き出したりして話題になっています。

指先でスプーンをなぜていると曲がるのはユリ・ゲラーに限らず、日本の関口淳君をはじめ数百人おり、私のところには八歳の少年と更にその弟で四歳の人も曲げられるという手紙が来ています。……という事は、この超能力はユリ・ゲラーだけではなく、潜在してはいるが実はだれにでもある能力だということができるのです。

ユリ・ゲラーがスプーンをなぜていると、スプーンはプラスチックのようにやわらかくなって、振るとプラプラと曲がるようになり、自然に折れてしまいました。

そして折れたところをつなぎ合わせてみるとピッタリとは合わない、原子がどこかへ行ってしまった……というのです。また普通、金属をペンチなどで曲げると発熱しますが、ユリ・ゲラーの場合には発熱は全然ないのです。

こういう現象を従来の物理学ではまったく説明することはできません。

これを説明するために、現在新しい説を出しているのは私の知る限り、ハワイ大学教授関英男博士の幽子説、科学評論家・斉藤守弘氏の生体内原子転換説、そして私の四次元説があります。

幽子説というのは、現在発見されているすべての素粒子よりはるかに微小な素粒子である幽子というものの存在を仮定し、幽子の力によってスプーンなどが破壊されるというのです。

次に生体内原子転換説はフランスのレンブラン教授が言い出した説で、生物の体内においては原子転換が行なわれ得るという説で、この説を拡張し、指先でさわった金属も金属原子が他のものに変化して切れてしまうという説です。

これに対し私の四次元説というのは、物質はもともと四次元世界のあるものの影である。これは、英国のジーンズ卿が、物質の波動説、粒子説、更に不確定性原理などの進展によって、物質は粒子なのか波動なのかわからず、確定しようとすると幽霊のように消えてしまう。この世界は網目版の写真のようなもので、網目の一目より細かいものは判らない、網目の一つがプランクの常数　$h=6.6\times10^{-34}$　エルグ・セカンドであることから、新興物理学における物質観を「物質とは何か？　それは粒子でも波動でもない。より高い世界のあるものが三次元空間に映じた影である」と言った言葉をうけて、物質は四次元世界のあるものの影である、という物質観であるのです。

この考え方の経緯については拙著「超物理学入門」（池田書店）にくわしく書いてあります。

従来、古典物理学の時代においては、人々は「物質は粒子……石ころのようなもので、位置と速度がはっきりと測定出来、粒子の未来の行動はすべて運動方程式をとくことによって確定できる」と思っていたのですが、新興物理学の進歩によって、物質はそのようなものでなく、雲のような（電子雲という言葉がある）つかみどころのないもので、しいて言えば、高次元世界のあるものの影である、ということがわかったのです。そして物理学の法則は確定的なものではなくて確率的なものである、ということがわかったのです。

古典物理学時代の物理学者は「ここからこの方向に投げられた石は、必ずこの軌道を動くのである」と断言できたのですが、現在の物理学者は「ここから発生した電子が、ここに出現する（出現するという言葉は電子は軌道をもたず四次元を通って移動するというニュアンスをもっている）とすると、その確率は何%、また別のここに来る確率は何%である」としか言い得ないのです。

そしてその確率の個々を決定するものはもはや三次元の物質世界にはなくて、より高次元の世界にあり、その高次元の世界こそ霊的な世界である、というのが私の仮説なのです。

私の説によれば、この物質世界はちょうど映画のスクリーンに映写された影のようなものであって実体ではなく、スクリーンとは別の所にそのもとのフィルムがあるというのです。

そしてフィルムに焼き付けるシナリオは、心、霊の世界において形作られるのです。

映画の世界ではどんな奇跡でも簡単に起こすことができます。それは、スクリーン上のものは影であり、フィルムは次の瞬間まったく別の

●ユリ・ゲラー

コマが写るのですから、そのコマに書き込んでおけば、どんな奇跡でも起こすことができるのです。

そして映写室に行って、まだ写っていない未来のフィルムを見せてもらうことが、予知ということの原理であると思うのです。

私の高次元説によりますと、フィルムを書きかえる力のある人ならば、どんな奇跡でも起こすことができます。そのような人は高次元の住人、霊であります。ユリ・ゲラーや関口君などの超能力者には、その人の背後に霊がついていて、この指導霊、守護霊などが、高次元から奇跡を起こしてくれるのです。

高次元説のいいところは、空間や時間を超越できることで、カナダから日本に向けて奇跡を起こすこともできるのですが、幽子説や、生体内原子転換説では、あまり肉体から離れたところで起こる奇跡の説明がつけにくいのではないかと思われます。

高次元の世界を通って移動することができるということで、心霊現象の物品引き寄せ（物体が突如として遠方に移動すること）などの奇跡をきわめて簡単に説明することができます。

四次元にいったん物質が行き、ふたたび三次元世界に出現することができるのだとすれば、金庫の中の物でも一瞬にして別の所へ行くことができます。ユリ・ゲラーは、アポロ宇宙飛行士が月に忘れてきたカラーフィルムを物品引き寄せによって取りよせると言っていますが、も

しできたとすれば物品引き寄せ現象のこの上ない証拠になるでしょうし、この現象の説明としては、四次元説がいちばん適切だと思います。

ところで、空飛ぶ円盤が、突如として、あるいは徐々に空間に消えてしまうような場合があります。これは四次元に行ってしまったと説明するのがいちばんいいと思います。

四次元エンジン説

心霊現象で物品浮揚（レビテーション）という現象があります。霊媒の前に置かれた机や机上の人形、メガホン等が、空中に浮かび上がって踊ったりします。これらの現象は従来エクトプラズムという心霊に感じやすい物質が霊媒の体から出て、これらの物体を支えるのだと説明されていますが、エクトプラズムは光線に弱いので、明るい所では心霊現象は起きないとされています。

しかしユリ・ゲラーや日本の関口淳君などは明るい所でスプーンを曲げたり、数千度の高熱をかけなければ熔けないはずの金属のスプーンをクニャクニャにしてしまうのです。

そして、日中、坐禅した僧がそのままの形で浮かび上がったりすることもあり、また子供が川の上を歩いてわたったり、犬に追いかけられた子供が空中に浮かび上がったりすることもあるのです。（拙著「四次元の世界」〈潮文社〉六六頁参照）

これらの奇跡はエクトプラズムだけでは説明しにくいのです。従来の物理学のエネルギー不変の法則では説明しにくい、どうも四次元世界からくる未知のエネルギーが三次元世界にはいり込んでいるのではないかと思われるのです。

したがって、四次元世界から未知のエネルギーを流入せしめて空飛ぶ円盤を空中に浮かばせているのではないかと考えるのも無理なことではない。名づけて「四次元エンジン」というのはどうでしょう。

物品浮揚や、子供、僧侶の体の浮き上がった事などは、四次元の住人（？）たる霊のしわざであると思います。空飛ぶ円盤の四次元エンジンも四次元の住人（？）の発明による、四次元燃料（？）を利用したエンジンで、三次元的に見える磁気柱、球体などの中に、三次元からみると超物質である或る種の四次元物質があり、それが引力に抗して飛び上がる力を与えるものではないでしょうか。

いま力を与えるとか四次元燃料とか言いましたが、これは重い物体が飛ぶためにはエネルギーが必要であるという旧三次元物理学的な考え方であって、本当は映画のスクリーン上の影の移動には、映写機を振りまわしさえすればまったくエネルギーが要らないように、四次元的移動には、旧三次元物理学のエネルギー不滅の法則は無視できると私は思っています。

自動車が数千キロの彼方にテレポーテーションしたという事実があります（拙著「超物理学入門」一三七頁参照）。このようなことを考えますと、四次元的飛行は、実はエンジンという名前をつける事がおかしいので、エネルギーの必要な機関によるのではなく、四次元投影法とでもいうべき原理によって、位置をかえるのではないか……。このテレポーテーション的移動法によれば、慣性の法則など、三次元的な物理法則が無視できるので、重力場機関によるのと同様に、急速な方向転換やジグザグ状飛行をしても、中の人間はなんら加速度をうけないのではないかと考えられるのです。

雲英君ご指摘のように、重力場機関としての考え方には幾多の無理があります。これは私も承知しておりますので、更に新しい理論を呈示して、皆様の御批判を得たいと存じます。

■筆者橋本工学博士は大正十二年生。東京都出身。昭和二十二年東大工学部電気工学科卒。超心理学、超物理学研究の第一人者として名高い。特に「念力測定器」を開発して、人間の想念エネルギーの測定実験を行ない、大きな反響をまき起こした。その他にも各種の発明を行ない、電子工学関係の多くの特許を持っている。またわが国のUFO研究の草分けの一人でもあり、早くから重力場推進理論をとなえていた。

●主要著書
超物理学入門　池田書店
四次元世界の神秘　〃
超心理学入門　産報

●現住所　神奈川県鎌倉市小町一―一五―一七

いわゆるUFOの写真にはレンズのいたずらによるゴーストが意外と多い。その物理的原因と防止法を専門家が解説する

写真のゴーストはなぜ現われるのか

加藤春生
東京写真大学助教授
日本写真家協会々員

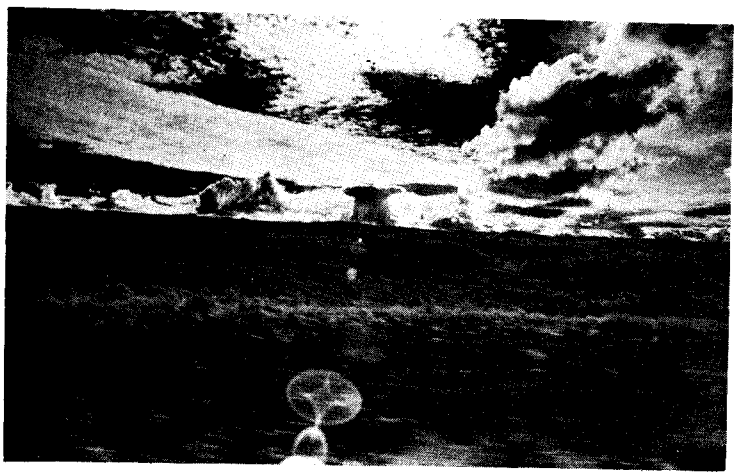
「写真のゴースト（幽霊）はなぜ現われるのか」などというテーマをあげると、今はやりの超心理現象で、心霊写真か何かの話でも始まるのかと考える人も多いと思うが、これは応用物理学の一分野である写真光学の、れっきとした術語であって、これからお話するように、写真の上に現われるある物理的な現象を示す言葉である。

これから作例としてお見せする三枚の写真は、いずれも私が一昨年夏アラスカへ取材に出かけたおり、撮影してきたものであるが、かなりドラマチックなシーンに作ってある。

撮影の条件はニコンF2フォトミックに、ニッコールオートF2.8・24ミリのレンズをつけたカメラで、フィルムとしてはやや特殊な〝さくらインフラレッド〟に、赤フィルターを用いて、絞りF5.6、シャッター60分の1秒で撮影を行なっている。ここで用いたインフラレッドフィルムというのは、その名前の通り赤外線に対して感度を持つ白黒写真用のフィルムで、ここにあげた**写真2**と**3**はいずれも日中太陽が出ている時間であるが、一見月夜のシーンを撮影したような雰囲気が出ており、これを写真の方では偽似夜景効果と呼んでいる。

写真1は疾走するキャンピングカーの席から写したもので、画面手前の部分はいわゆるブレが生じて像が流れているが、中心部より左下へ向かって、かなり明瞭な白い像が現われている。

これが、地上に降りたリング状UFOの目撃写真ということになれば、一大センセイションを巻き起こすことになるが、残念ながらこれはカメラの作り出した「ゴースト・イメージ」として、光学的に説明がついて、全くその夢は消えてしまうのである。



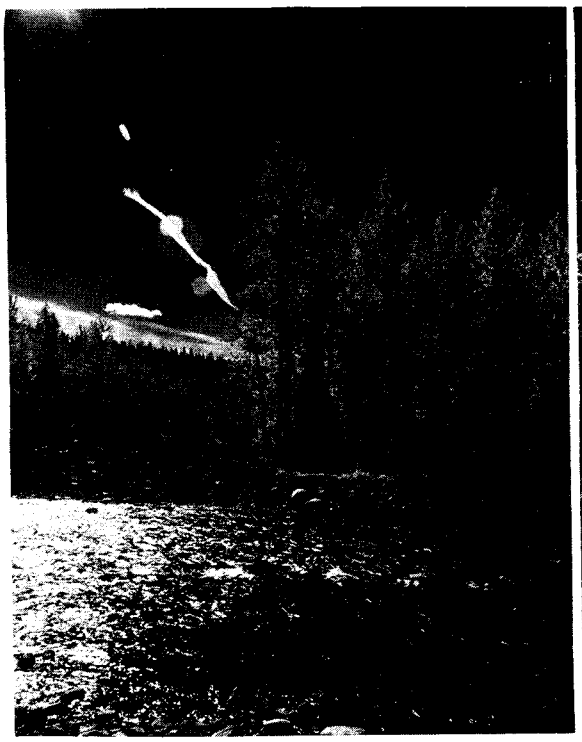
● 写真1　ほぼ完全に出たコマチック・ゴーストの例（ニコンF2フォトミック・ニッコールオート24mmF2.8・絞りF5.6・1/60秒）

ゴースト・イメージの発生原理

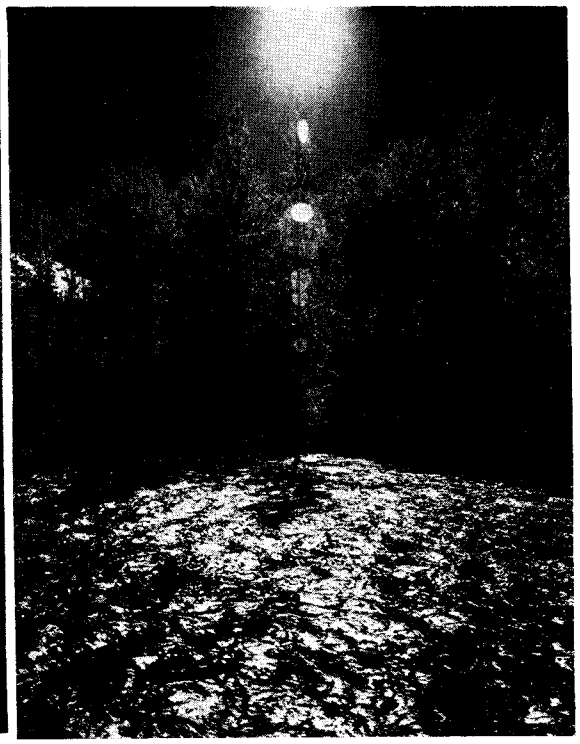
ここで、このゴースト・イメージが発生する原理を考えることになるが、ゴーストという名前のわりには案外その内容は単純なもので、どなたでも簡単におわかりいただけると思う。

図は説明に必要なカメラの要素を単純化して示したもので、本来ならばレンズももっと複雑に何枚もの単レンズが組み合わされているわけであるが、説明を簡単にするために一枚にしているが、作用そのものは変わらないと考えていただきたい。

今、図のように画面に強い



● 写真3　飛行機雲とゴーストが重なった珍しい例



● 写真2　背景が透視できるゴーストの例

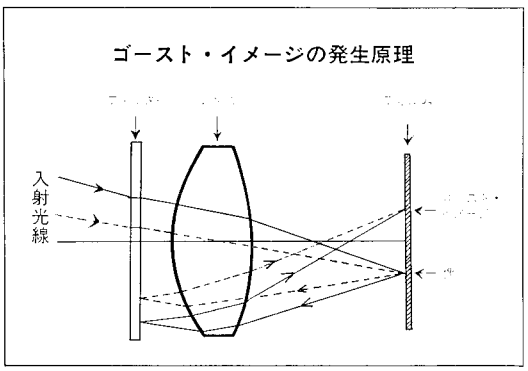
光（太陽、ネオン、街路灯など）がはいってくると、フィルム面で反射した光が再びレンズに向かい、レンズを通過した後でフィルターに当たると、さらにここで反射を受けてレンズを通過して、再びフィルム面に像を結び、これが記録されてしまうことが起こる。

　このような現象はすべての場面で起こり得るものであるが、フィルター面のごくわずかな反射を二回繰り返して、なおフィルムに感光するだけの明るさを維持するためには、その原因となる光線がかなり強いものでなくてはならず、また、この反射像が出る位置に本来写るべき被写体が暗くなくては、反射像の存在が写真の上で確認できないことになる。もうおわかりと思うが、この反射像がゴースト・イメージの正体というわけである。ゴーストの光学的な説明はこれに尽きることになるが、写真的な問題としてニ、三、つけ加えておきたい。

　まず第一の問題として、ファインダーで見ていたときは見えなかったが、写真画像にゴーストが現われるというケースがある。この原因はフィルムに送られる光の量が、積算光量として決定されることにある。すなわち、ファインダーを通してわれわれの肉眼では認知できないような、ごく暗いゴースト・イメージであっても、露光時間（シャッターが開いている時間）が長いと、フィルムでは感光作用が生じ、現像を行なった後で、はじめてゴーストが出ていたことがわかるケースが多々あるわけである。

　また第二の問題として、ゴースト・イメージがいくつも連続して生ずるケースであるが、これはフィルム面とフィルター面との間で、何回かの反射が繰り返される場合や、先にも触れたように実際のレンズでは、レンズが何枚もあるところから、これらのレンズ面で反射した光がフィルターで再反射される場合があって、一つ一つのレンズに限っても、ゴーストの現われ方はかなり不確定な条件が多いといえる。

　さらに、これまでの説明では、ゴー



ストの原因となる光源が画面内にある場合で話を進めてきたが、これは必ずしも必須条件ではなく、画面外に光源があった場合でも、画面ギリギリの所にあれば、レンズ面とフィルター面の反射像によって、ゴースト・イメージを形成するケースも出てくることになる。

これまでの説明で明らかなように、ゴースト・イメージが現われる条件としては、

(1)比較的強い光源が画面にはいりやすいこと

(2)背景が暗いこと

(3)長い露光時間がかかること

などがあり、これらを考えるとゴーストが現われるのはやはり夜景のシーンが多いことが理解される。

ゴースト・イメージの判定

画面に現われたこれらの像が、ゴースト・イメージであるかどうかを判定することは、かなり困難な作業であるが、その判断の方法を二、三あげてみると、その第一の方法はゴーストの原因となる光源が画面の内外を問わず存在していたかどうかをつきとめることにある。ここに示した三枚の写真では、いずれも連続して出ているゴースト像の、中心を結ぶ直線の方向に、ゴーストの原因となる光源（太陽）を見出すことができる。ただこの判定では、画面外に光源がある場合には、撮影現場を知らない人には判断がつきかねるケースも出てくる。

第二の判定法としては、**写真1**、**2**に見られるように、ゴースト像を通して背景が見られるか否かを検討する方法がある。この場合背景が見えていれば（ネガで判定する方がより明確に行なえる）、まずゴーストと考えてよい。（ただし、このような半透明なUFOがあるとすれば、この判定だけでは条件が不足することになるが）。特に**写真1**のケースでは、車が走っているために前景がブレているが、リング状の像はブレておらず、地表近くにある物体であれば車と等角速度で運動していない限り、この状態は不自然なわけで、その点でもゴースト・イメージと判断することが可能である。

第三の判定法としては像の形による方法がある。一般に**写真1**のような形で出る場合は、光源位置とゴースト位置に微妙な関係があって、なかなか現われにくい形であり、一般的な場面では**写真2**、**3**のような形を取る場合が多い。このときの形はレンズの絞りの形がそのまま現われることになり、ゴースト像の一つの判定基準になる。ただこの場合も絞りが開放の場合には、ゴーストが円盤状になり、また判断がつきにくくなる。

ゴースト・イメージの防止法

このようにいったん画面に現われた像が、ゴースト・イメージであるか否かを判定するとなると、やや状況証拠による綜合的な判断になって、決定的な条件で立証することが困難になるケースが多い。したがってこれから写真を撮影する場面では、極力ゴーストの発生を防ぐ手段を講ずることが先行することになる。

その最も基本的な方法としては、ゴースト・イメージの原因となる光源を画面の中や近くに置かないということであるが、市街地での夜間撮影ではこの条件は案外むずかしい条件でもある。

さらに効果的な処置として、撮影時にフィルターを使わないという方法もあるが、フィルター使用にはそれぞれ目的の作用があり、ゴースト防止の観点からだけ使用を中止してしまうわけにもいかない。ただゴーストの発生が夜景の場合に多く現われる条件があることを考えると、夜景ではほとんどフィルターを使う効果が考えられないので（カラー写真では必ずしもそうではないが）、少なくとも常用しているUVフィルターは、はずして撮影を行なう注意はしてほしい。

このような場面でどうしてもフィルターを必要とする場合には、旭光学で市販している球面状のゴーストレス・フィルターを利用することも一つの方法である。

また、レンズ面とフィルター面、あるいはレンズ面どうしの反射光を少なくするため、反射防止膜の能力を増加した、いわゆるコンビネーション・コーティング（各メーカーでそれぞれ呼び方が異なる）をしたレンズとフィルターを使用することもゴースト防止には有効である。

さらに、画面外からの有害光源をレンズの中へ入れないために、レンズの先端に挿着する円筒型の光線よけレンズフッドを使用することも、思わぬゴーストの発生を防ぐ意味で有効な方法の一つである。

写真画像の上に現われるゴースト・イメージには、ゴーストが出ることが予想できるが、撮影条件の上からどうしてもこれを避けられない場合と、全く不注意で出てきてしまう場合がある。前のケースでは画面に現われた像がゴーストであることは当然判定できるわけで、仕末の悪いのは後者のケースであり、いらぬ神経を使うことになるので、このようなことが生じないように充分注意することが必要である。

本稿により「写真のゴースト」の正体を少しでもつかんで、今後不用意に〝幽霊UFO〟を画面に登場させない

ように対処していただきたいと考えている。

ゴースト写真撮影の実例

（その1）小松正一（16）

私は高知市内に住んでいます。高知市の南に烏帽子山という山があり、その山頂にUHFのテレビ塔が立っていて、そのテレビ塔付近で夜「赤く点滅しながら不規則な動き方をする物体がテレビ塔の東の方向に進み、山かげにはいった」という情報をきき、私はまたそのUFOらしきものが現われたら光跡写真をとってやろうとカメラを構えました。1月22日の午後10時ごろから10時30分すぎまでねばりました。カメラはキャノンFTbです。塔の方向にバルブを開放にして待ったけれど物体は現われません。一応、露光時間を変えたりして4枚くらい撮影、写真屋で焼いてもらうとリング状UFOなるものが写っています。あるいはゴーストかと思い、もう一度、同じ現場で撮ってみますと、ゴーストでした。このような体験をしたというしだいです。

写真を分析してみますと、近くの高校からの照明設備（写真右下）がありリング状UFOなるものの左の突端と右の突端の線が、その照明と一直線で結ばれることを知りました。そしてその直線上を現場でファインダーでのぞきつつ見ますと、リング状UFOは出てきたり見えなくなったりすることもわかりました。

このことからみると、先日、ラジオの日本放送の「ヤングネットワーク」で発表された京都タワーのリング状UFOもカリフォルニア州ホーソン付近でベティ・アレスさんの撮られたリング状UFOも、どちらもゴーストといえそうです。

（〒780　高知市宝町五―二五）

（その2）鎌田俊二（17）

写真ははじめから市内の夜景を撮ろうと距離∞、F8で撮ったものです。現像してみますと、上方にUFOらしきものが写っているのです。しかし考えてみると撮影中ずっと街の方をみていて物体らしきものはみていません。もしそれがUFOなら五分間も開放にしていたのですから少しぐらい、動いてもいいはずです。まして重力場機関だとするなら、やや傾いたかっこうは円盤の移動時に見られるものだそうですから（コズモNo.4、56～57頁）静止しているのはおかしいではありませんか。それに写真にこれほど大きくでているのですから、UFOなら市内で大さわぎとなっていいはずです。

私の考えでは、近くに強烈な電灯があったので、それが影響したと思います。

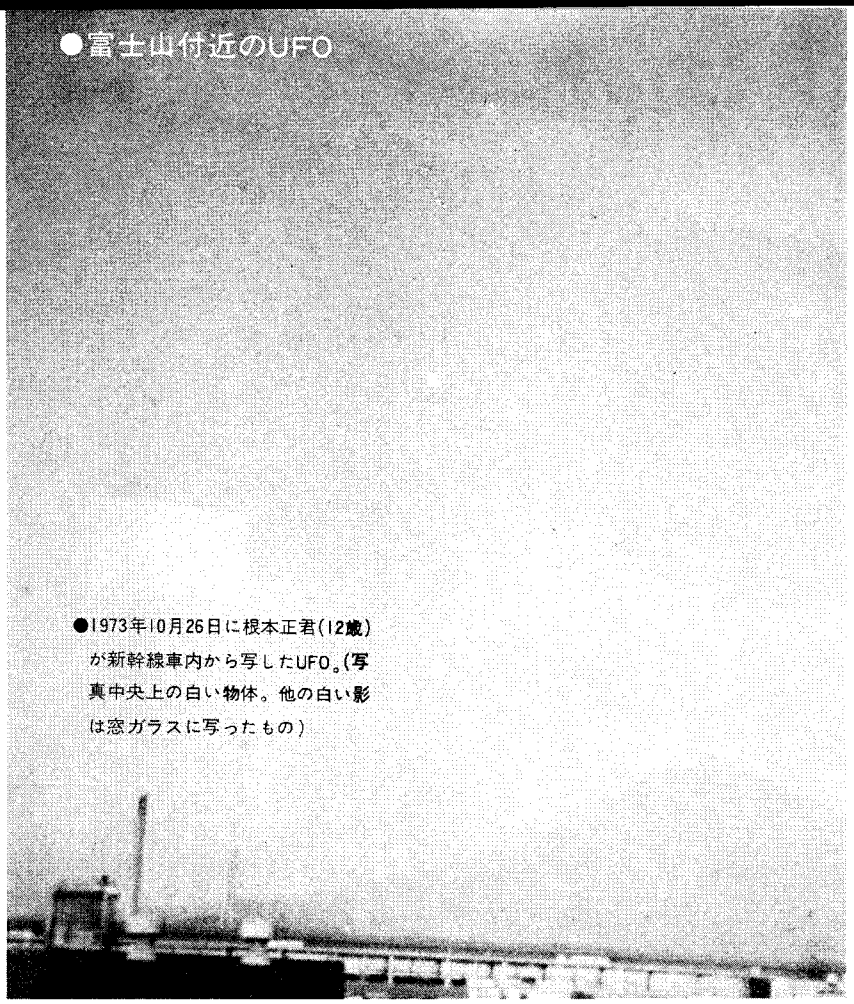
それからこれはネガでよく見えるのですが、そのゴーストのまわりに楕円模様が二つ組み合わさっています。フィルム現像ムラだったらUFOらしきものを含めたあたり一帯にムラができているはずなのに、それがありません。これからUFOでないことが知れます。円盤のまわりに光を出していることも聞いたことがないので、なおさらUFOでないわけです。したがってこれは、フィルター、レンズの屈折、干渉によるものだということになります。

なんでもかんでもUFO写真だというから、こういう現象をよく知っている学者が、UFOは存在しないという説をとなえるようになるのではないでしょうか。そういう学者をつくってしまった原因は、この種類の写真を円盤だと主張した私たちにあるのではないでしょうか。

円盤の存在は私も当然のことのように信じていますが、しかしなんでも円盤にしてしまうのは問題でしょう。

（〒020―01　岩手県盛岡市前九年二―一一―四）

●富士山付近のUFO



●1973年10月26日に根本正君(12歳)が新幹線車内から写したUFO。(写真中央上の白い物体。他の白い影は窓ガラスに写ったもの)

UFO

目撃体験

所感

etc.

—応募記事—

UFOのライティング・ライツ?

秋山　隆

一九七四年一月七日月曜日、ちょうど当日はあのコホーテク彗星が肉眼でも見えると新聞で知りそれを撮ろうと自宅付近（大牟田市天領町一―二三三）で、三脚にカメラを据えて待っていた。あたりは落陽の前後でまだオレンジの明るみが残っていた。

五時半頃から観察をはじめたのだがやや北西上空を見ると星が肉眼ではっきりと一つ見えたので、これがあのコホーテクではないかと思い、双眼鏡（ケンコーのエース、八倍で四〇ミリ、視界六・五〇）で確認していたが、私は天文に関しては知識がないので、よくわからなかった。しかし一応これだろうということで、あたりが暗くなるのを待ってカメラを向けた。

カメラはミノルタSRT一〇一、レンズは五〇〇ミリ、F8で、ASA二〇〇のフィルムを使用し、絞りは開放で、シャッター速度は五分～七分である。

物体については、全く写真を見て本人が驚いているくらいでUFOという確信はないが、色はオレンジがかっており、光度は肉眼でわかる程度に明るかった。

最初からコホーテク観察のつもりなので西方へ下降しているのは当然と思い、五分ごとにレンズの視野からはみだすのを修正して七枚ほど連続してシャッターを切った。

撮影の際は三脚を固定したのでカメラぶれによるものとは思われない。

●秋山氏のライティング・ライツ

私は気象台からUFOを見た

岩崎秀夫

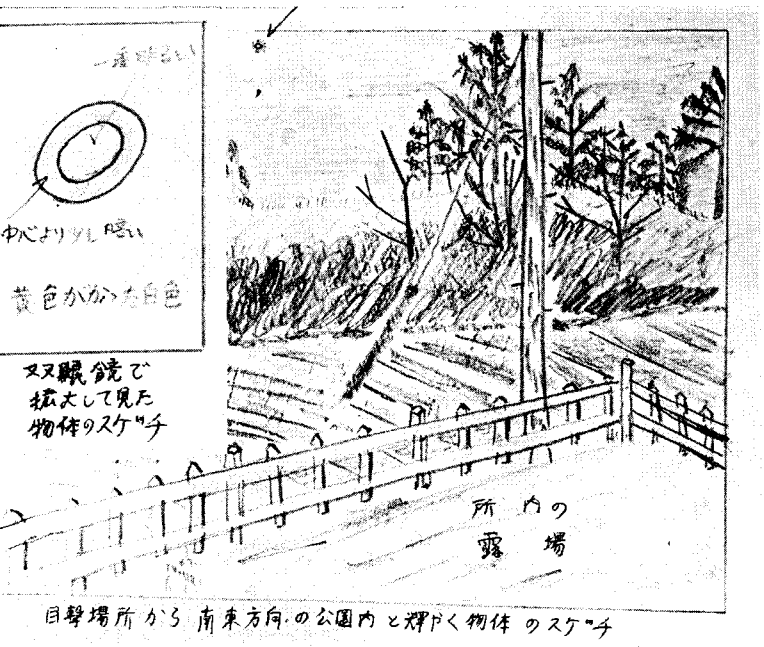
目撃日時は一九七四年二月四日の月曜日午前五時一〇分頃で、場所は栃木県大田原市城山二―一六―六の宇都宮地方気象台大田原通報所である。当日雲量は3で晴れであった。目撃時間は約一時間、目撃者は私を含めて二名であるが、同じ頃黒磯でUFOらしき物を目撃した者もいる。双眼鏡はズー

ム式七倍～一二倍、四〇ミリを使用した。光度は一等星より明るく、色は黄色がかった白色で、形は円、または楕円、大きさは双眼鏡で見た場合の視直径が五ミリから一〇ミリであった。

仰角二〇度から三〇度、南東上空の一点に静止したままで、最初、星の光と思ったが双眼鏡で確認してみると、星の光とは異質の光をその物体が放っているのがわかった。UFOの目撃例は動いている例が多いので、UFOであれば動き出すのではないかと一時間ほど待ったが、動き出さず見守るのを中止した。徹底さに欠けたこの事が今一番悔やまれる。

私のこの目撃はコズモNo3に掲載された「私は円盤を見た」という題の青宗孝子氏の目撃例に酷似しているのではないかと思う。

高度については相当高いと思われるが、付近には高度を推定できる物がなくはっきりしない。



目撃場所から南東方向の公園内と煙突の物体のスケッチ

●上のスケッチは岩崎氏による。

交流電源による点滅光線

藤田孝夫

貴誌上を賑わしている点滅光線（ライティング・ライツ）について一言述べたいと思います。

何号かわかりませんが、いとも怪しげな話と共に点滅光線の話題が掲載されており、その反論として、交流のまたたきが写ったトリック写真だろうとどなたかが述べていたと記憶します。私もおそらくそうであろうと思い、写真の専門家あたりからそのことについて何か言ってくるのではないかと期待していたのですが、六号では表紙にまで点滅光線が採用されており、いささかがっかりいたしました。

日には一定の明るさに見え、交流電源で光る電球からこのような点滅光線が簡単に得られることを、同封の写真で確認していただきたいと思います。

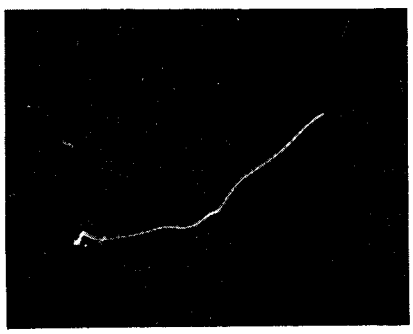
方法は申すまでもないことですが、交流電源で光る電球をねらって、カメラをすばやく動かすだけです。同封の写真は五〇HZ交流で光るパイロットランプ（赤色）を、約三メートルの位置からシャッター速度二分の一秒で写したものです。電源が五〇HZですので一秒間に百回点滅し、二分の一秒間写るのですから、五〇回の点滅が写るはずです。ごらんのように約五〇個の点滅が見えます。

てっとり早くこのような点滅光線の軌跡を見たければ、双眼鏡等をフラフラさせながら町の夜景を見ると得られるはずです。

貴誌に掲載された写真がどのような状況で取られたかわかりませんが、写真技術に卓越した方ならばいろいろ複雑な組合わせなどは簡単にできるでしょう。私が行なったようにトリックとも言えないトリック写真も可能だということを考慮してください。

最後に、「交流のまたたき」と見抜いた方に敬意を表します。

●交流電源によるもの



超光速は可能か

横川秀博

絶対静止空間とマイケルソン・モーレーの実験

われわれの住んでいる地球は自転しながら太陽の周りを回っている。太陽は銀河系宇宙の重心を中心にかなりの速度で回っている。銀河系宇宙全体は他の星雲と力を及ぼし合って複雑な運動をしている。こう考えていくと、宇宙空間の静止状態つまり絶対静止空間に対して、われわれの地球はどんな運動をしているのだろうか。それはどのようにして調べればよいのだろうか。絶対静止空間に対して地球が運動していることは確かである（もし静止していれば宇宙全体が地球を中心に動いていることになり、プトレマイオスの天動説に逆もどりすることになる）。少なくとも地球は太陽の周りを30km/sの速度で運動しているから、絶対静止空間を媒介として一定速度で伝わると考えられる光は地球の運動方向とそれに垂直な方向とでは、速度が異なり一定距離伝わる時間をそれぞれの場合にくらべたとき、明らかに差が出てくるはずである。

以上のようなわけで、光の干渉を利用してうまくその時間の差を見い出そうと、十九世紀後半から二十世紀初めにかけて多くの科学者が実験を繰り返した。その中でマイケルソンとモーレーの行なった実験は最も数多く、最も精密なものであった。結果として時間の差は認められず、したがって、地球の運動は光速度に加算されないで、あらゆる方向に光速度は一定であった。結局、地球に向かって毎秒二〇万キロメートルの速度で飛んでくるロケットから光を発した場合、地球にいる観測者にとって光速度は毎秒五〇万キロメートルではなく、常に一定の毎秒三〇万キロメートルと観測される。

これでは絶対静止空間に対する光の速度が不定となるばかりではなく、そのために絶対的な運動は観測不可能であり、よって絶対静止空間は無意味なものとなってしまうのである。

特殊相対性理論

こう言うわけで、あらゆる運動は相対的なものであり、光速度は観測者の運動によらず一定であることがしだいに明らかとなってきた。そして、このような事実を踏まえて、一九〇五年、アインシュタインは次の二つ

1 相対性の原理（自然法則はいかなる慣性系においても不変である）

2 光速度不変の原理（光速度はあらゆる慣性系において不変である）

を基本公理として考えを発展させた特殊相対性理論を発表した。この理論によって、観測者に対して静止しているか、運動しているかで物体の質量、長さ、時間が観測者にとって異なって観測され、その物体の速度が光速に近づくと、その違いは増々大きなものとなることが明らかとなった。

たとえば、静止質量m_0の物体が速度Vで運動すると、みかけの質量mは

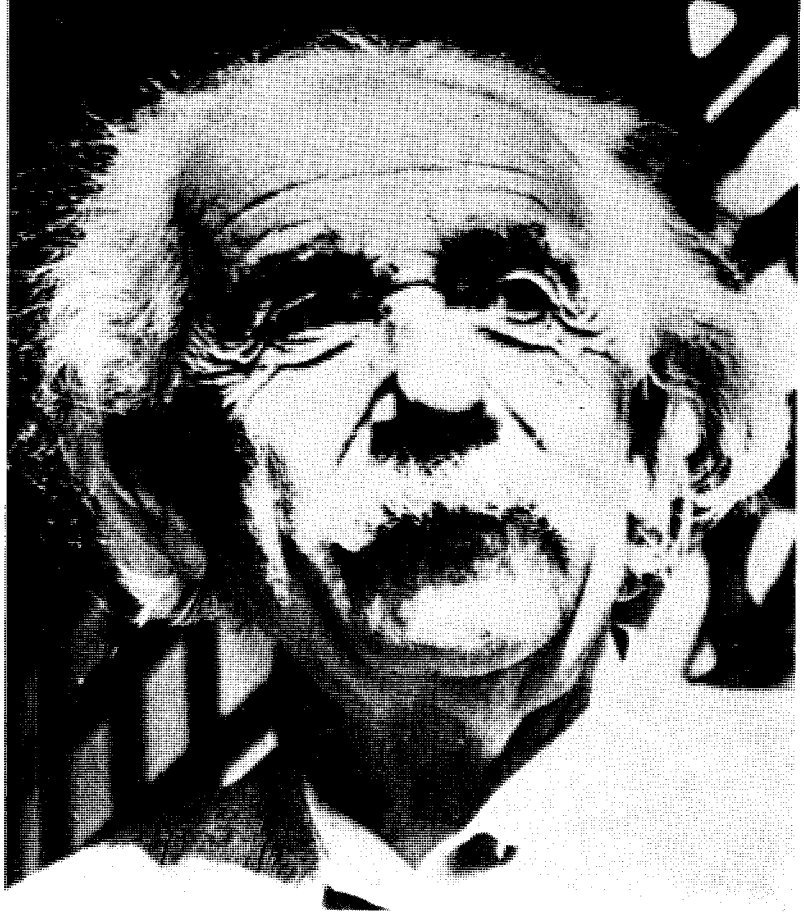
$$m=\frac{m_0}{\sqrt{1-\left(\frac{V}{C}\right)^2}}$$

で表わされ、Vが光速度Cに限りなく近づくと、みかけの質量mは限りなく無限大に近づくことになる。なぜ速度が増加すると相対的に質量が増加しているようにみえるのか直感的にはわかりにくいが、アインシュタインの説明によると質量とエネルギーは別の形をした同一のもので、光速度Cを媒介として両者は変換可能なものである。よって物体を加速するには他からエネルギーを与えねばならないが、その場合物体は与えられたエネルギーを質量の形で保存するわけである。だから速度が増せばそれだけエネルギーを保存して質量が増加したように見えるわけである。

ところで、質量mが無限大に近づくと、物体をさらに加速するには、他から無限大に近い力を物体に作用させねばならない。そのとき他から作用する力の仕事すなわちエネルギーも無限大に近づくことになる。無限大のエネルギーは存在しないから物体を光速またはそれ以上の速度にすることは不可能なことであるという結論に達する。このような理由から、アインシュタインは光速がこの世で一番速い速度であり光速度以上で運動する物体はあり得ないと結論を下した。

ところが、コズモ4号には、「重力は質量の如何にかかわらず一定加速度で物体を自由落下させるから質量が無限大となってもその物体に作用する力も無限大となって、結局一定加速度で物体を加速することは可能である」という意味のことが書いてある。

なるほど、質量に比例し、距離の平方に反比例する力を物体に及ぼす重力は、同じ距離では質量の如何にかかわらず、同一加速度で物体を加速する。この場合、たとえば地球が物体に力を及ぼすとすると、この同一加速度は地球から見た相対的な加速度となる。もし物体の質量が充分大きければ、あるいは速度が光速に近づいてみかけの質量が充分大きければ、地球の方が加速されるが、それにもかかわらず地球上



●アルバート・アインシュタイン（1879～1955年）

の観測者は、やはり同一加速度で物体が加速されているように見える。しかも困ったことには、この時の加速は自由落下であるから、物体はそれ自体、加速度計で絶対的な加速度を知ることはできない。さらに話を進めて、物体が光速になったと仮定すると、物体の質量は無限大となり、質量の有限な地球で物体を加速しようとしても、地球だけが加速されて物体に向かって自由落下する。この時、物体はまったく加速されていないのに、地球上にいる観測者は、依然として地球が同一加速度で物体を加速しているように見える。

以上のことから明らかになったことは、重力による加速は相対的であって絶対的な加速ではないということである。だから、物体を重力によって加速すれば光速あるいはそれ以上になれるというのは誤りである。

中学の理科で習った、速度V　加速度α　時間t　とした時のそれらの間の関係式 $V=\alpha t$ ……(1)をみると有限な速度V＝Cとなれる有限な時間tが存在するように思える。実際コズモ4号には $\alpha=g$ の時 $t=30612244.4$ 秒後には光速Cに達すると書いてある。

たとえば、ロケットが地球を出発して一定時間等加速度運動をした後、ロケットの内部にいる人が加速度計で加速度を測り、時計で時間を測って(1)の式に代入し、その時の速度（この場合地球に対する速度）を出そうとする。（※この方法は慣性誘導法としてジャンボやアポロに採用されている）

ところで、ここで問題となるのは、果たしてロケットの中の時間の進み方と地球上での時間の進み方は同じであろうかということである。もし無限大の速度で瞬間的に伝わる信号があれば、両者を絶対的に比較することができるが、そのようなものはない。現実には有限で不変な速度を持つ光を信号として使い、両者を相対的にしか比較することはできない。そして相対論から「運動している物体の時間の進み方は静止している場合とくらべて、遅れているように観測される」という結論になる。ここまでくると明らかなように(1)の式は、絶対空間、絶対時間を仮定した時の関係式なのである。なお、ジャンボやアポロは速度が光速にくらべて充分小さいため、相対論的効果は無視され、何ら不都合は起きないわけである。

また、相対論から導かれる数式の一つに、速度合成式というのがある。

$$V=\frac{V_1+V_2}{1+\frac{V_1V_2}{C_2}} \quad \cdots\cdots(2)$$

V_1V_2は一直線上を反対方向に運動する物体の速度。Vは一方から他方を見た時の速度。(2)の式をみると、V_1V_2がCにくらべて充分小さければ、

$V=V_1+V_2$ ……(2)′

として差しつかえないわけである。

そしてわれわれは普通(2)′の式を使う。しかし、V_1V_2が大きくなってたとえば、地球に対して0.9Cの速度で運動するロケットから0.9Cの速度（ロケットに対して）で小型ロケットを発射する場合、その小型ロケットは地球に対して1.8Cの速度ではなく、(2)の式に代入すると $V=0.994\cdots C$ すなわち、地球からは光速を越えない速度で観測される。またこの場合、ロケットを加速して速度を二倍にしようとしたが、結局一・一倍にしかならなかった」とも考えられる。(2)の式は、V_1V_2が光速を越えないいかなる値であっても、みかけの速度Vは光速を越えないことを示している。

さて、相対論に固執しながら物体の運動を考え、物体は超光速になれないことを示したが、別に相対論が絶対に正しく宇宙の真理であると考えるからではなく、それが実験とよく一致し、人間を主体として現象を説明するのに都合よく、文字通り〝相対的〟に正しいと思うからである。

われわれにとって未知な円盤についても相対論があてはまるかどうかわからないが、質量が正の物質でできていれば多分あてはまるであろう。そうすると円盤は超光速になれず、おいそれと遠い星から地球にくることは不可能に思えてくる。それでもやはり円盤はおいそれとやってくるのであるから、何か別な方法、たとえば、何も宇宙空間を三次元的に飛んでこなくても、第四の空間すなわち四次元を瞬間的に通ってやってくる方法が考えられる。円盤目撃例の中に、「円盤が突然消えた」という報告が多数あって、それらは四次元を考えると説明しやすい。よく人や車が突然消えたり、またある場合には、消えた人なり車なりが他の場所に現われたりする現象も何か四次元と関係がありそうに思われる。

このように想像をめぐらしても、現代の科学でそれを理論づけることは、まだお手上げの状態である。円盤もその一つであるが、とにかくこの世の中にはわからないことが多過ぎる……。

聖書の神は宇宙人だ

天野邦彦

モーゼ黙示録第33章ではエヴァが空に日をやり輝く光の車が近づいてくるのを見る。ついにその車はアダムのところへきて車輪の間から、煙が噴出した……とある。レメクの巻物の伝承によるとエノクは火を吐く天の車で連れ去られたままもどって来なかった人物である。この車とは一体なにか？ 輪とはなにか？ では仮にこれを（UFO）空飛ぶ円盤とでも考えると、そんな古代壁画はあるのか？ ところが驚くことにそんなものはザコザコあるのです（すでにコズモ資料係に送ってあります）。そしてナスカ地方の図形は天文学説と飛行進路説などですが、とにかく飛行機の像らしきペンダントが発掘されていることを忘れてはいけない（これもコズモ資料係に送ってあります）。

そして大好評裏に完結したデニケン氏の『神々の戦車』での聖書への疑問ではエゼキエルの空陸両用ヘリコプターは全能の神ならばこの乗物がなんであれこんなものを必要とはしないわけだし、出エジプト記（モーゼ第二書）では神がモーゼと話すのに無線電話を使うとはあまりになさけない。

ソドムとゴモラの話（創世記、第19章）では町の悪のため神によってすべてが破壊されますが、ロトの家族だけは悪にそまってはいけないといわれ、山の中へ逃がしてもらうわけです。そこで、私が疑問に思うのはロトに家族があるようにほかの人達にも家族はあり、その中には乳児やまだ小さな子供達もいただろう。信じられないのはこれらの子供達や乳児が神に罰せられるどんな罪を犯したのでしょうか？ この町の乳児達はロトの家族より悪者だったなんて信じられません。それにこの町のヒツジや馬や牛、犬やネコや小鳥まで神に罰せられて死んだわけです。でもなぜ？ どんな罪を犯したのでしょうか？

同じような話にノアの箱舟がある（これもギルガメッシュ叙事詩からの二番せんじですが）。ノアの家族だけは神により洪水を知らされて助けられている。なぜほかの人達の家族、特に乳児や子供達は助けてあげないのでしょうか？

かれらには自分で舟を作ることはで

●出エジプト記・第3場面
神の声にふりむくモーゼ

きないのです。聖書の中で神は約束しています。『すべての人間は悪い事をしなければ神の仁慈にかげりはない……』と保証しているのです。乳児や小さな子供達はなにも悪いことはしていない。ノアの家族を助けるなら、この乳児達や子供達も助けられるべきではないでしょうか。

これもまたこの町の乳児や子供達はノアの家族より悪者だった……なんて信じられません。

出エジプト記第33章20ではモーゼは神を見たことがなかったので一度その顔を見せていただきたいと頼んだとき神はこう答えたのである。『汝はわが顔を見ることあたわず、わが顔を見て生きる人あらざればなり……』と。

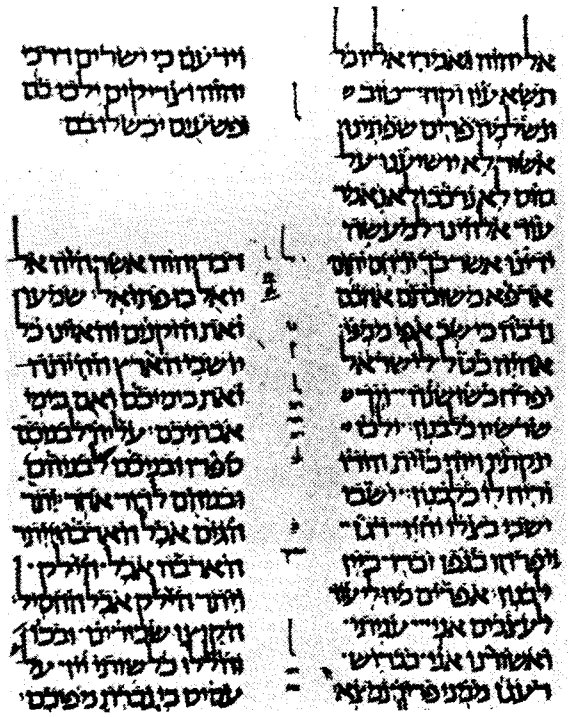
だがもし顔を見たときモーゼが死んだのであれば、不可能のない全能の神ならばすぐにエイ・ヤー生きかえれ！とかなんとかふたたび生きかえらせることがなぜできないのか。

とにかく聖書の神はソドムの町からわざわざ遠い山中まで逃げなければ神もロトの家族を救えないとか、ロトが今は山中に行きたくないとゴネルと、爆発はあすの朝だから時間がないとか泣きごとばかりで、全能の神とはとてもじゃないが思えない。

僕の疑問を五年前に日本にあるプロテスタントやカトリック、ルーテル教会、ものみの塔会、クェーカー教会、モルモン教会などで話してみたがこの疑問に答えた教会はなかった。

そこで僕は聖書の神は宇宙人達と決定したわけです。教会へも行きたくなくなったわけです。

いろんな壁画や古代の遺跡などから神は宇宙人だと確信できます。



●旧約聖書レニングラード写本

横浜国大にてUFO講演会開催

野中康弘

5月31日、横浜国立大学（横浜市南区清水ケ丘）において、同大学空飛ぶ円盤研究会主催によるUFO講演会が開催された。

テーマは「UFOとは何か」でありUFO問題を総合的かつ体系的にとらえた入門書的講演会であった。講演にはUFO研究家・コズモ出版社社長・久保田八郎氏を招いてスライドも映写し約一時間半聴衆を魅了した。会場には宣伝不足にもかかわらず約80人ほどの学生が集まり、UFOに対する関心の深さがうかがわれた。

この講演会は同大学清陵祭の参加企画、そして研究会の発足第一弾として“Have you ever seen a flying saucer?”（君は空飛ぶ円盤を見たか？）をテーマに掲げ、同好人のための研究会だけではなく、一般の人々を包みこむという啓蒙的意味合いから企画された。

今後もこのように大衆にアッピールする活動を続けていきたいと思っている。今や、UFO研究はアンダーグラウンドから浮上する時期にきているのではないでしょうか。

アーツ衛星がノアの箱舟を発見？

アメリカの上院議員のモス氏は、2月22日にソルトレークシチーで行なわれた測量学会で、資源探査衛星アーツがノアの箱舟の残がいらしいものを撮影した、と発表しました。

同議員は次のように話しています。

「アーツが1700キロの上空からソ連とイランの国境付近にあるアララット山を撮影した写真を分析してみると周りの風景と全く異質な物体が映っている。それは、ノアの箱舟と大きさや形が符合する」

このノアの箱舟は旧約聖書に出ているような形をしており、一九一六年にもロシアのパイロットが初めて目撃したこともあります。また一九五二年にはアメリカの鉱山技師が撮影しましたが、今から12年前にこの技師は殺されました。そのとき写真も紛失していたというミステリーがあります。

モス議員のこうした情報は極秘文書からのものといっています。

ネス湖の怪物捜しは一時撤退

スコットランドにあるネス湖で怪獣を捜索していた日本隊は昨年11月20日ひとまず捜索を打ち切りました。

捜索隊について行った通訳の加藤嬢は「2カ月間潜水した結果、影も形も発見できませんでした。でも2回にわたって正体不明の音を録音をしました。これが怪物〝ネッシー〟ではなかったか」といっています。

「来年また出かけたい」と日本捜索隊は意欲を示していました。

宇宙生活は生物に影響を与える

●ソ連の生物実験衛星で発見

昨年の秋のこと、ソ連では地球を回る軌道に打ち上げた生物実験衛星コスモス何号からの成果をことしの3月、発表しました。コスモス何号には、数十匹のネズミ、カメ、こん虫、キノコ、バクテリアをのせて打ち上げられ、約3週間後の昨年11月22日、回収されました。

打ち上げのネライは、地球の生物が宇宙空間でどういう影響を受けるかということを綿密に実験するためのものです。

その結果、宇宙生活のある〝後遺症〟があることがわかりました。動物の場合は組織の呼吸作用が衰え、体温が下がり、いくつかの組織では変成があり、脚の骨などもろくなっているということ。それに脾臓、腎臓、副腎、甲状腺などの器官や内分泌腺には、重さに変化がでてきたりしていました。

といっても、これは重症ではなく、病理的な変化はみられませんし、帰還後3、4週間もすると普通の動物と同じように元にかえったということです。

とくに宇宙の〝温室〟内で実験されたキノコは、地上のと違い、ヒョロヒョロのクキに、どっしりしたカサを持つなど、奇妙なかっこうになっていたとのことです。

西之島に第三の島誕生

昨年ぽっかりと太平洋上に姿を現わした西之島新島に第三の島が生まれました。その位置は、昨年11月以来、噴火している島の北側にあたるところで、新島と西之島との間も一段とせばまり、くっつきそうになりました。大きさは熔岩で形成され、直径100メートルくらい、高さは20～30メートルくらい、島の形は、不規則なヤツデの葉のようです。3月2日現在、さかんに熔岩を流しているところです。

タキオン〟を発見

光速を超える物質として理論的に予測されている「タキオン」の存在を示唆する実験報告がこのほど発表されました。

発表したのは、オーストラリアのアデレード大学のロジャー・クレイ、フィリップ・クラウチ両博士です。これは高エネルギーの宇宙線が大気に衝突するさいに起こる現象を観測中に発見したもので、これがタキオンではないかとみているというもの。だが、決定的な結論を出すには、時間と追試が心要だといっています。

両博士は昨年の2月から8月の間、〝宇宙線シャワー〟1300を観測したとき、シャワーが爆発的現象を検出するより数百万分の1秒ほど前に弱い余分な信号をキャッチしたことから、これがタキオンではないかと見ています。

宇宙線シャワーとは、宇宙線が大気の原子にぶつかると一連の二次粒子をつくり出

し、ほぼ光速に近い速度で地上に向かい、さらに多くの粒子をつくり出すことをいいます。

タキオンはエネルギーを失うにつれて一般常識とは逆にスピードを増す物質で、エネルギーを絶えず減らすためにいつも放射線を出し続けていなければなりません。そして永久にスピードを増しつづけるといわれます。

火星表面に奇妙な白い斑点

●多量の水蒸気が存在？

3月の数日間、火星ロケットから送り返されてきた火星に関するデータを研究していたソ連の科学者は、地表に見られる不思議な白い斑点は水蒸気の爆発かもしれないと考えています。

ソビエト科学アカデミーの研究員V・ペトロフスキーは3月16日のタス通信記者会見で、大気中に水分を満たす水源があるらしいと語りました。この水は火星地下に氷結している巨大な水源ではないかということです。地表が地震またはイン石などで割れると大気中にすさまじい蒸気の爆発が起こるのかもしれないといっています。

この地下の水源が火星表面の大きな穴を満たし、これが直径2000キロのなめらかな地帯に相当するのではないかとペトロフスキーは述べました。

水蒸気の多い火星？

ソ連の自動惑星間ステーション火星6号はこのほど観測結果を発表しました。

それによると火星の大気中に含まれている水蒸気は従来考えられていたより数倍多いことがわかり、また、磁力計は火星の表面近くで、惑星空間におけるよりも7～10倍の強い磁場を記録しました。

そのほか火星表面の起伏温度、熱伝導率、土壌の構造、大気の成分など新たなデータが得られたといっています。

これらのデータは、ステーションから火星地表までパラシュートで着陸装置をおろす途中で観測されたもので、軟着陸は失敗しています。

宇宙のかけ橋を確認

銀河系宇宙と隣接するマゼラン星雲との間に水素ガスの巨大なかけ橋があることが、このほどオーストラリアの天文学者によって発見されました。

発見したのは、キャンベラのマウント・ストロムロ天文台のドナルド・マシューソン博士を長とする研究チームです。

この発見は、昨年後半、直径18メートルの電波望遠鏡を使い、水素から放射される電波源を〝宇宙地図〟に描きこんでいくなかで確認されたものです。

かけ橋はマゼラニック・ストリーム（マゼラン噴流）と呼ばれているもので、長さは約16万4千光年に及び、水素ガスの総量は、太陽質量の16倍にも達し、水素噴流は秒速200キロのスピードで、マゼラン星雲から銀河系宇宙に向かっているとのこと。

マシューソン博士は「約5億年前にマゼラン星雲が銀河系の近くを通過した際、重力の作用で噴流が生じたらしい」といっています。

この発見が宇宙の起源研究に大きな手掛りを与えてくれるものと期待されています。

マリナー10号、水星を撮影

アメリカの無人惑星探査機マリナー10号が、3月29日（日本時間30日早朝）水星の表面写真を地球に送ってきました。

写真はテレビカメラで写したもので、水星はゴツゴツした月面のような様子を示しており、生物が存在することは考えられないとのこと。

撮影距離は6000キロ以内で、最接近距離は、7200キロに到ったが、そこは夜の部分だったため写真は撮れませんでした。

写真を見ると、月面と違うところは、月面の山脈や海にあたるようなものはなく、クレーターが重なり合っているのがわかります。

この後、NASAのジェット推進研究所が「水星を観測中、マリナー10号は電気回路に故障を起こし、テレビ撮影が不可能になった」と発表しています。原因について現在わかっている範囲では電気出力が急に下がり、室温が60度から90度に上がっているということです。

また、その後の写真分析の結果、水星を回る物体があり、これが水星の〝月〟ではないかと発表しました。もしこれが確実ならば、太陽系で発見された衛星の32番目になるわけです。

分析によると水星とは離れてその周囲を動いている強力な放射線があることがわかったことから〝月〟の存在を割り出したものです。

ところが、それを再度分析した結果、水星の月ではなくマリナー10号自体の動きが遠い星に反射してできたゴーストだったということで、この〝月〟の話はそれぎりとなりました。

心臓の特効薬へあと一歩

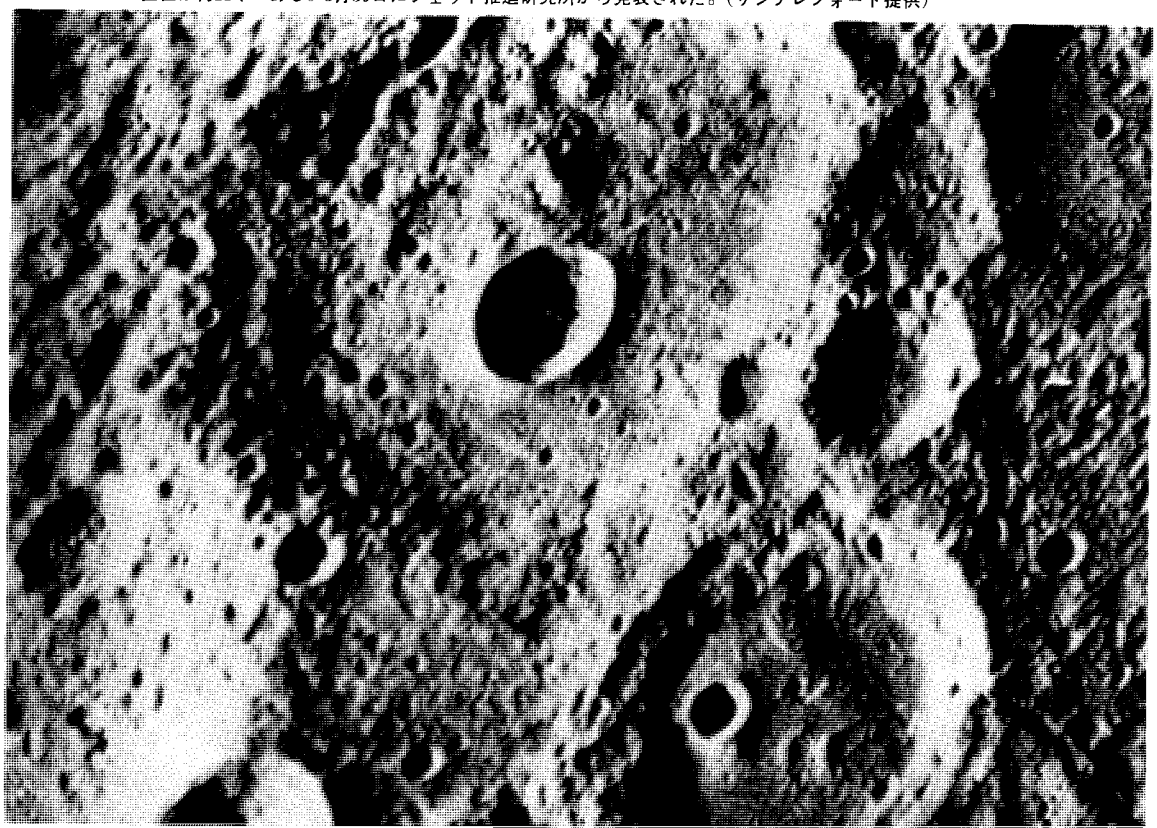
心臓病の人にとって夢のような話が出てきました。漢方薬として使われてきた薬草ト

●金星の素顔

●1974年2月6日、水星にむかって飛行中のマリナー10号が、途中金星付近を通過したとき72万キロの位置からテレビカメラで撮影したもの。（サンテレフォート提供）

●水星のクレーター群

●水星に接近したマリナー10号が約2万キロの位置から撮影したクレーター群。中央部の大クレーターの中心に新しいクレーターが見えるが、この直径は約12キロある。3月30日にジェット推進研究所から発表された。（サンテレフォート提供）



リカブトのなかから心臓に強い作用をする成分が取り出されたうえ、その化学構造式が決定されました。

この発表は、日本薬学会第九十四年会が静岡薬大の小管卓夫教授（46）と横田正実講師（34）が行なった「附子（ぶし）中の強心成分に関する研究」によるものです。

効能は、強心、鎮痛、通尿保温、強精作用があり、特に強心性は抜群で、生まれた直後や死ぬ直前に心臓を鼓動させる「最初で最後の薬」として使われてきたものです。

こうした発表で、今後心臓の特効薬ができることはほぼ確実といわれています。

異形ピラミッドに新説が

●西ドイツ科学者が解明

エジプトのナイル左岸の丘に半ば埋もれた「異形ピラミッド」について、これまで長い間、石泥棒に周囲をはぎとられてしまった哀れな遺産というのが学界の定説でしたが、このほど西ドイツのクルト・メンデルスゾーン氏によって、その真相がさぐり出されました。

これは事故によって起きたもので、今から4650年前、古代エジプトでピラミッド造営中、強い雨が降り、突然、頂上近くの壁がふくれて、すさまじいなだれ現象を起こし、急斜面で仕事をしていた数千人の労働者を包み込んでしまった、というもの。

こういう見解を出したメンデルスゾーン氏はアマチュア考古学者で、こうしたできごとを「ピラミッドのナゾ」という本に発表し、学界に波紋をなげかけています。

こうした惨事は、その後のピラミッド工法に影響を与え危険な急斜面だったのをゆるやかなほぼ勾配を改めさせたとみられ、ダフシュールにある「屈折ピラミッド」と「赤色ピラミッド」にみられる安全を第一にした工法になっているのが例としてあげられています。

この発見には100年前に同じドイツのアマチュア考古学者ハインリッヒ・シュリーマンのトロイ遺跡の発掘と同等の評価がされることになろうと、もっぱらうわさの種になっています。

月と地球の間が年に4センチ離れていく

「地球や宇宙の重力が極めてわずかずつ弱まりつつあることを示す証拠を見つけた」と、米海軍天文台の天文学者トーマス・C・バンフランダーン博士が4月8日、米地球物理学連合の会合で発表しました。

同博士は、月の公転速度を原子時計の精度（10億分の1秒）で測定した結果、重力の強さは、毎年100億分の1の割合で弱まりつつある、との結論を出しています。重力が減衰の数値の測定データを発表したのは、これがはじめてです。

同博士によると、英ケンブリッジ大学の天文学者フレッド・ホイルの提唱した「月の公転周期の変化から、潮汐（ちょうせき）摩擦の影響を除けば、重力減衰が測定できるはず」との仮説に基づいて測定を行なっていました。その結果は重力が弱まるため月は毎年約4センチずつ地球から遠ざかり、公転周期が毎年2000分の1秒ほど増加しているということです。

また、重力減衰は、地球上でいえば、体重70キロの人間なら1年間に100万分の7グラムの減量になる、といっています。

この重力減衰の考え方から地球や月をめぐる諸現象の解明も一層すすみ、地球は100年間に1センチ以下の割合で膨張するが、「これでなぜ大陸が移動するか説明できる」と同博士はいっています。

鳥海山、再び噴煙を出す

4月24日、鳥海山が50日ぶりに噴煙をあげました。この前の噴煙活動は3月5日。

噴煙をあげているのは頂上の新山西側斜面らしく、噴煙は3000メートルほどの高さで南側にたなびき、南側斜面の雪は降灰でまっ黒くなりました。煙の量もこれまでのうちで一番多かったといわれます。この活動が東北地方における地震発生の可能性と関連があるかは未知数です。

HB抗原の感染率高い人工透析業務従事者

東京都民の約20万人が、血清肝炎など肝臓障害に関係が強いといわれるHB抗原（オーストラリア抗原）に感染し、年間約3100人の新生児が母体から感染し、さらに血液の人工透析業務従事者の感染率は、普通の人よりずっと高くなっている――という実態調査をこのほど東京都ウイルス肝炎B抗原対策専門委員会がまとめ、都へ答申しました。

HB抗原は、血清肝炎の犯人として最近クローズアップされてきたウイルス様粒子。HB抗原を持つ血液を輸血されたり、病院などで大量に取り扱うと、血清肝炎にかかる危険度が高く、肝硬変、肝臓ガンなどとも密接な関係があるといわれています。

ガン細胞を光で見分ける

●早期発見と治療に一歩前進

ガン細胞から出るきわめて微弱な光の強さから、ガンの

種類や病状の進行を知ろうという研究が、東北大電気通信研究所の稲葉文男教授（量子電子工学）によって進められ、これまでにホタルの100億分の1という光の強さをはっきりと測定することに成功しました。

これは、2年前に教授が開発した高感度光検知システムの応用研究によってたしかめられたもので、今後、光の波長にのって、青い光は○○ガン、赤い光は××ガンというくあいに、診断も容易になりガンの研究に新しい道を開くことになります。

測定は、試料を高感度光検システムの方法を使った受信部の前におくと、ブラウン管に表示され、カウント数の自動記録もされるようになっています。ガン細胞からの光は、1千兆分の1ワットで、その光の粒子が一つ一つ数えられるほどの弱さで、マウスの腹水肝ガンからは1秒間に60個、ラットに移植されたガンからは35個の粒子が計測されました。

さらに、これらのガン細胞に抗ガン剤を与えると、光の粒子の数が減り、ガンの勢力が弱まる、ということからすれば、ガン症状を目で観察できるばかりか、制ガン効果も確認できるようになり、生命の神秘へ一歩も二歩も近づけるような、すばらしい成果といえます。

AF2は肝臓内で毒性を強める

遺伝への影響や発ガンなど毒性をめぐって論争がつづいている合成殺菌料「AF2」（フリルフラマイド）は「肝臓で解毒されず、しかも肝臓内で本来の性質を変えた〝未確認物質〟になり、その毒性はAF2よりさらに強い」という事実がつきとめられました。

この研究は国立予防衛生研究所食品衛生部の研究グループが行なったもので、「AF2が肝臓に与える作用」を培養した細胞に接触させる「培養細胞学的方法」によって培養したことから確認されました。

これまでの発表では、東京医科歯科大学遺伝病研究室の外村昌教授が、昨年9月「AF2による培養細胞の染色体を切断している」という段階だったのですが、今度の発表はそれを裏付けるものです。

この発見に期待されるのは未確認物質とは何なのか、ということですが、AF2の毒性問題に新しい光をなげかけるものと、注目されています。

伊豆半島沖地震は活断層の動きより起きた！

伊豆半島沖地震は活断層が動いたため起きた地震だということがわかりました。その活断層は伊豆半島南端の石廊崎付近を北西から南東方向に走っており、地上で約40センチの右横ずれを起こしたことが確認されました。

これは昨年、東大地震研究所の村井勇教授が、活断層の専門家・東京都立立川高校教諭の金子史郎理事と共同発表したもので、その〝予知〟が的中した初めての例であり、活断層の防災対策がクローズアップされる有力な結果とされています。

余震百回を数えた伊豆沖地震

伊豆沖地震の余震は、9日朝のマグニチュード6・8の強震いらい、百回を数えました。この算定は15日朝から9日への逆算によるものです。

三原山、噴火のおそれ

気象庁は4月13日、午後4時に「伊豆大島の三原山が噴火する恐れがある」との臨時火山情報を出すとともに注意を呼びかけています。

気象庁大島測候所の観測によると、三原山で6日夕方から火山性微動が断続的に起き始め、13日正午前には、火口から800メートル離れたところにある地震計が最大振幅14ミクロン（1ミクロンは1メートルの100万分の1）というかなり大きな振動を記録したといいます。噴煙はほとんどあがっていないが、火口底付近ではすでに噴出物が出ている模様だといわれています。

三原山はことし2月28日から3月1日にかけ2回、小噴火を記録しています。

南関東大地震の可能性大

通産省地質調査所の木村政昭第一調査研究室長と民間の地震研究グループは5月23日24日の両日三原山火口を調査した結果、火口底がこの2カ月間に40メートルも急上昇していることがわかりました。

三原山がうごめき出して2年余の間で最大の上昇であり火山活動が本格化してきたと分析されています。

これは先の調査によると伊豆半島南端の活断層にそった東方10～20キロの半島と大島のほぼ中間の海底の地殻に大きな破砕帯があり、これが伊豆半島沖地震の震源らしいと判断されました。このことから今後、三原山の火山活動が非常に活発化して大爆発を招き、遠くない時期（数年―十数年）に、ひずみエネルギーの放出で南関東大地震が起こる可能性が強いとみられています。

● 連載科学記事

宇宙・引力・空飛ぶ円盤

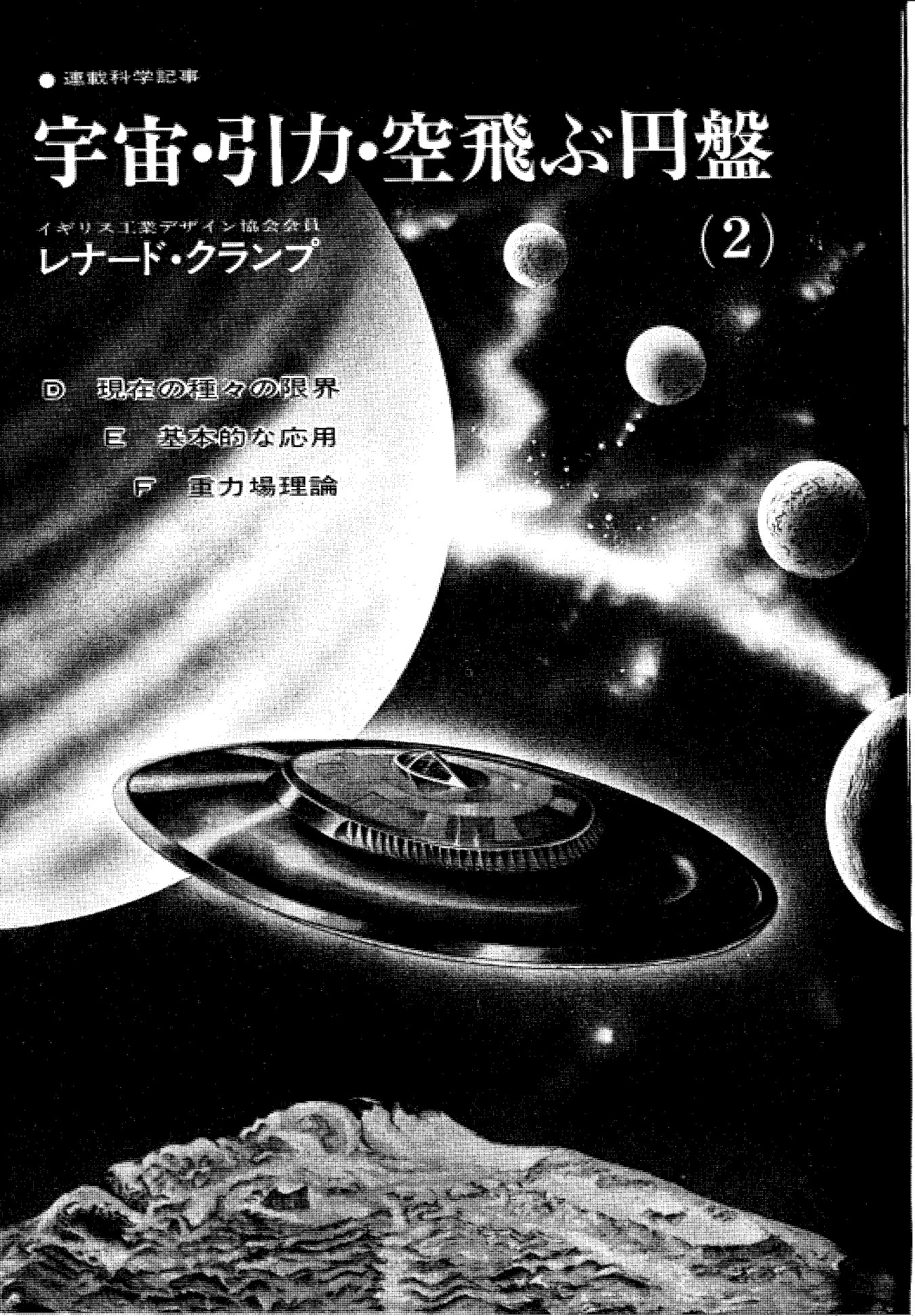
イギリス工業デザイン協会会員
レナード・クランプ

（2）

Ⓓ　現在の種々の限界

Ⓔ　基本的な応用

Ⓕ　重力場理論



D 現在の種々の限界

円盤は惑星間を飛ぶ物体であるという説を支持できる多くの証拠があるにもかかわらず、この推測を認めようとしない人がまだ多数いる。だがその人たちのなかに、円盤の動力を明らかにするのに価値のない知識を持つ人がたまにいるのは残念なことである。高い地位にある人が惑星間を飛ぶ円盤なるものを嘲笑して満足しているとすれば、大衆がその言説に従っても非難するわけにはゆかない。

これまでに不思議な物体が気球みたいに空中にゆらゆらとただよっているのが目撃されてきた。そこでこのために、目撃者たちは気球ではないと確信しているにもかかわらず、権威者は気象観測気球が空中に浮いていたのだと片付けている。その考え方は次のようなことであるらしい。

「気球でないとすれば、ヘリコプターのような回転翼を持たない〝機械〟が一体どうして空中にじっとしていることができるのか？」

たしかに空中高く停止している物体ならば、それは、航空力学的な物か、ロケットか、または〝空気より軽い〟飛行体でなければならぬ。これ以外の物は考えられない。したがってこのように考える人を非難することはできないのだ。

ミステリーは限りなく続く。われわれは空中に目撃する物体の正体に関しては全然わかっていないのかもしれない。だが円盤現象にあきらめをつける前に、せっかちに結論づけるよりも今までに報告された不思議な目撃例についてちょっと考えてみることにしよう。巨大な物体がすさまじいスピードで空中を矢のように飛ぶ光景が目撃されているが、音は全然聞こえないという例があった。こんな場合、人から蜃気楼を見たのだといわれても仕方がない。ときたま円盤は音をたてるけれども、もっとたびたび静かにすることを忘れてくれるならば納得してもらえるかもしれない。だが実際にはこの現象に対して考えられる解釈があるのだが、それは後述しよう。

この場合はその音がたぶん手がかりの一つになるだろうと言っておけば充分だろう。この点を心にとどめて解明にとりかかることにしよう。

これまで空飛ぶ円盤の最も不可解な点は、その異常な加速度にあった。経緯儀による正確な測定では、重力加速度の六五倍（六五G）に及ぶ加速度を示していた。いうまでもなく人体はこのような圧倒的な力に耐えることはできないだろう。それはともかくとして、このような飛行体の乗員だけが考えられる唯一の重要事ではない。たとえば船体そのものの構造の問題がある。機械装置に至ってはいうまでもない。超音速によるソニック・ブーム（注＝衝撃波による大音響）を起こした円盤についてはまだ報告が出ていないようだが、音の壁に達するほどに加速した例が一回以上観測されている。緑の火球の出現に続いて空中に不思議な爆発音が聞こえたという例もあったが、何かが破壊したような爆発とは別なものを暗示する証拠はない。

さて、この〝飛ぶ機械〟に一種の乗組員がいると仮定しよう。もし円盤が空中で極端な摩擦のために表面温度が上昇するとすれば、冷却の方法が重要な問題となる。そうかもしれないという証拠もあるようだが、円盤がしばしば見せる周囲の光輝はまったく違う性質のものなのだろうか。

ここで疑問が生じてくる。円盤が航空力学的な飛行体でないとすれば、一体何なのか？　ど

のようにして作動するのか？　どのようにして揚力を得るのか？　そしてどんな方法で推進するのか？　円盤関係の報告類を調査分析した人にとっては、この物体を飛ばせる方法として何か異なったものがあるということが明らかになっている。空中に停止する機能、信じられないほどの加速度、多数の出現例があるにもかかわらず薄気味わるいほどの無音、白熱化すると思われるほどのスピードで大気中を飛ぶことのできるこの物体は、いかなる種類の航空機なのか？

こうした疑問に答えるには多くの推測が介入してくるが、これは観測された事実に基づいた推測であり、こうすることによってわれわれは発見した物事からあまりはずれないようになるのである。

こうしたことを念頭において、現在の探究事を未来の宇宙飛行、直面するかもしれない困難事、克服しなければならぬ諸条件などにあてはめることにしよう。そうすれば、われわれが克服しようとしている困難な諸条件の多くは円盤には存在しないということが明らかになるだろう。

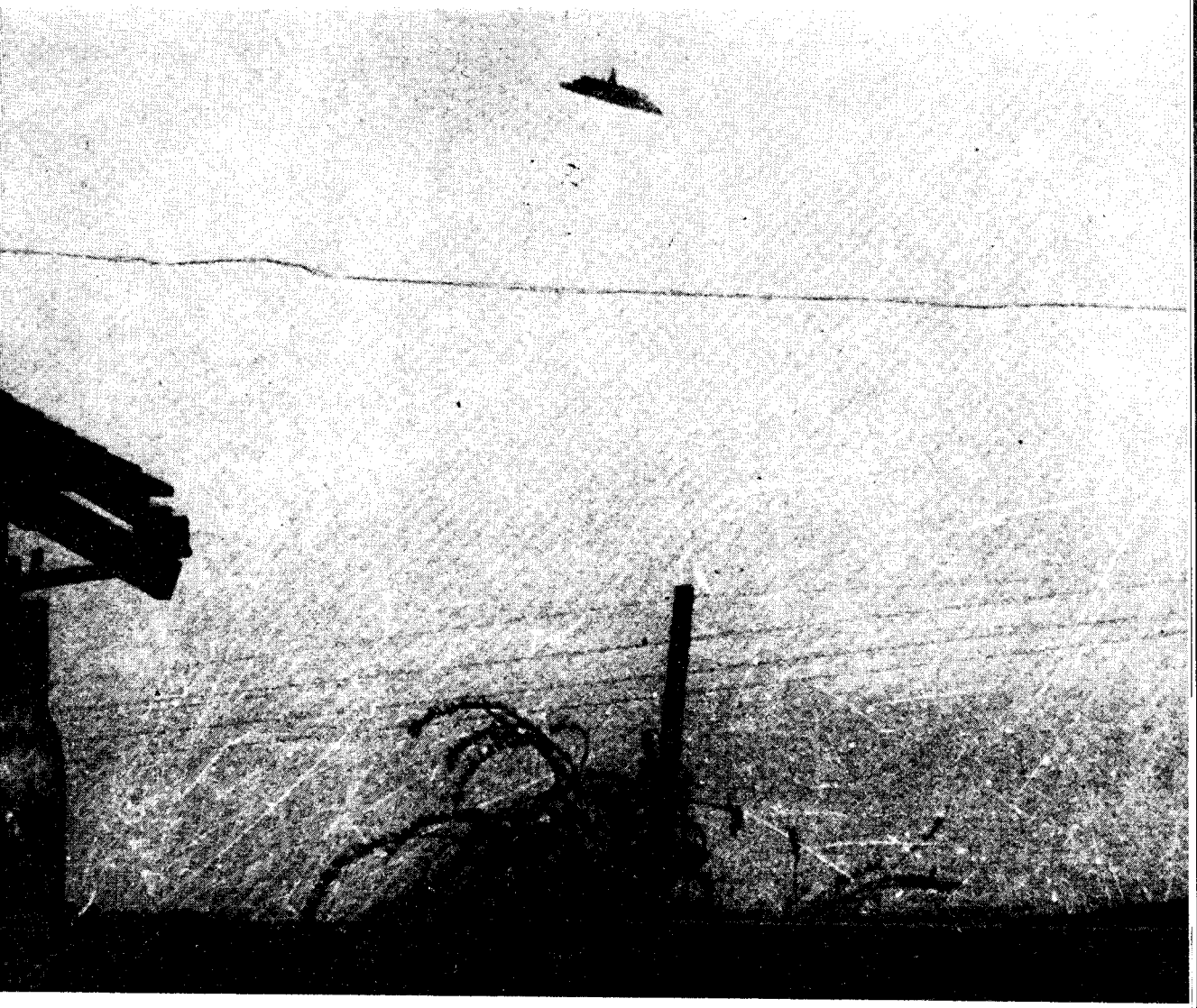
未来の宇宙飛行士が直面する最大の問題の一つは、人体に負わされる種々の制限である。そして現在は最高権威と目される人々によって、この目的を目指して多くの研究がなされている。この科学者たちは極端な不安にさらされている。たしかに彼らは絶えまなく傷害を受ける危険に直面しているのだ。その危険が特に大きいときは、他人でなく自分自身が危くなってくる。こうした偉大な勇気をもつ人々のなかに、米ミネソタ州ロチェスターのメイヨー病院のアール・ウッド、チャールズ・コード、エドワード・ランバート各博士らがいる。この人たちは、高速のターンのときに経験する恐ろしい加速中に、飛行士を保護する〝重力服〟を開発する目的で、ときどき自分たちを実験台にしているのだ。特にこの実験用としてメイヨー病院の生物理学部は巨大な遠心力機を建造した。これは基本的には六メートルのアームで、その末端部に人間がすわってぐるぐる回転し、高速の飛行による諸状態やストレスなどを経験するのである。この重力服が完成するまでにウッド、コード、ランバートの三博士は、心臓が破裂せんばかりの実験を一千回も行ない、ときどきてんかんのような発作を起こし、ついには意識を失うことがあった。

「われわれの最大の恐怖は、血液の不足のために脳に損傷を起こすのではないかということであり、更にこのまま気が狂ってしまうのではないかということだった」とランバート博士は述懐している。もっと激烈な状態のもとで重力服自体が飛行士を傷つけるかどうかを発見するために、これらの英雄たちは遠心力機に乗り、今度は三名の血管や心臓、脳にまでもチューブを挿入して、旋回して意識不明になっているときでさえ、血圧を測ったり血液のサンプルを採取したのである。

極端な減速状態を体験させるため、米国エドワーズ空軍基地の一パイロットを車輪のついた座席上にしばりつけ、軌道上を時速二四〇キロで進行させて、次に〇・二秒で停止させ、三五Gに等しい力がかかるようにした。驚いたことに本人はブラック・アウト（注＝急降下などで一時的に意識を失うこと）しなかった。ただ視力が減退したことを訴えただけである。

この人たちはたしかに隠れた英雄である。彼らは未来の宇宙飛行を可能にするための追求に生命を捧げているのだ。われわれが航空機の性能を改良すればするほど、達成しようとするスピードは速くなり、パイロットの仕事はますます大きなものとなるので、いずれはこうした英雄たちですら歯が立たなくなるような時代がくるだろう。これがわれわれの直面する限界であり、ロケットで飛ぶ宇宙飛行士にとって大きな難問となるだろう。

宇宙船が地球の引力を脱するには、秒速約一一・二キロの脱出速度を必要とするというのはよく知られていることである。しかも液体燃料ロケットを使用すれば、この速度はなるべく短時間内に得られねばならない。燃料をできるだけ有効に消費する必要があるからだ。しかしそうなると高加速度が要求されるし、人体が耐え得る最大加速度の限界という問題が残る。しかもこの太陽系内の最も近い惑星へ到達するにしても数カ月かかるだろう。更に飛行士ばかりで



●1950年の春、米オレゴン州マクミンビル付近の農夫ポール・トレントが撮影した円盤。

なく必要な装備品も積み込まねばならない。すると関連のある諸軌道と合わせるために完全にタイミングのよい離陸と到着の必要も起こってくる。別な惑星への到着は偉業となるだろうが、実際に着陸してそこを出発するのは不可能かもしれない。数年間の宇宙旅行と種々の困難とを経たあと、一定の軌道をまわる簡単な調査で満足して帰らねばならぬかもしれない。このことは努力をやめた方がよいという理由にはならない。むしろもっと良い方法が見つかるかもしれないのである。噴射推進方式を採用することによってわれわれが最初から望み得ることは、近隣の姉妹惑星群へ到達することにある。進歩した原子力ロケットによって宇宙旅行の期間を短縮するにしても多大の困難が伴うだろう。高加速度を必要とする場合、やはり構造・乗員・機械装置などが限界要素となるだろう。ここでちょっと考えてみると、われわれは遠く離れた別な惑星の住人たちがとっくの昔にもった気分と同じ気分になっているのかもしれない。たしかに、宇宙旅行を実用化させるためには、引力ばかりか加速度という障害をも克服しなければならないことがはっきりしてくるのだ。

当然、これは不可能ではないにしても達成は困難であろう。そしてアイデア全体があまりにも壮大である。しかし少し考えてみれば、道を見出すのは可能かもしれない。目標を達成するためには液体燃料を用いる噴射推進方式を捨て

て他の方法を見つけなくてはなるまい。必ずしも運動のエネルギーを用いることなく、引力を克服する他の方法をだ。この線に沿って考えながら、空飛ぶ円盤の特徴を心にとどめるならば、ばらばらになったはめ絵がきちんと組み合わされているのを見ることになるかもしれない。

E 基本的な応用

人間が自然界の秘密を発見する前に自然界は常にそれを見せているといわれている。そしてそれを見ることこそ堅実な観察であると思われる。自然界をながめると、どんなに複雑であろうがつまらない物であろうが、いわゆる人間の手になる発明物によく似た物を見かけることがある。近代の回転翼は大カエデの葉によって見事に表現されているが、この植物は種子をまき散らすのにこの回転翼式方法を用いている。銃の原理はハリエニシダ、ヤハズエンドウのような草木が応用している。圧縮空気によってさやから種子を撃ち出すのだ。またわれわれは機械工学で応用されているいろいろな原理を非常に簡単な形で用いているとも言える。小さな風船でジェット推進の原理を示すこともできるし、ピンを突きさしてねじった紙で現代のタービンのように回転させたりする。簡単な日常の体験や複雑な産業において、作用と反作用の基本的な原理は地上に存在するあらゆる物に見出される。常に潜在エネルギーと運動のエネルギーとのバランスが存在しており、そのために作用と反作用の原理が表面化してくるのである。カヌーをこぐ少年とクイーン・メリー号の美しくデザインされたスクリューとに原理の差はない。前者は原始的で後者は完成されているが、いずれの機能もニュートンの運動の第三法則に従っているのだ。（注＝第三法則は作用・反作用の原理。作用は常に反作用と逆向きで、それらの大きさは等しいということ）

さて、自然界はあらゆる解答を与えてくれるだろうか？　人間が観察しながらもその真価に気づかないような力を示してくれるだろうか？　そうしてくれるということにまず間違いはない。結局、自然界は数百万年のあいだ人間の機械的な応用の仕方を示してきたのだ。そして古代の人間はそれを観察したのだが、大抵は意味をなさなかったのである。われわれは今日あらゆる解答を持っていると考えるべき根拠があるだろうか。ないのだ。実際、人間が何かを発見すればするほど自分たちがいかに無知であるかを悟るのである。

飛行機、船、車輪のように、われわれの進行手段のすべてを示してくれるとすれば、人間がまだ応用していないけれども円盤に応用されているある力をわれわれが探求するならば、それを発見できると考えられないだろうか。だがその力はどんなものだろう？　いかなるシルシによって自然界の中にそれを見分ければよいのだろうか？

ここでふたたび円盤の気まぐれな運動を考えてみよう。そして時速三、〇〇〇キロで進行できるとして、何らかの方法によってそれが慣性または激烈な減速の影響をまったく受けないという証跡があるということを推理してみよう。それこそ根本的にわれわれが自然界の中に探し求めているものなのである。見たところ噴出物も出さないで大気圏外を電光のように飛ぶこの機械を動かしているのはこの力であり、空中に停止させるのもこの力であり、ばらばらに分解せんばかりに加速するのもこの力である。すなわ

ちあらゆる物が〝等フォース・フィールド（等しい力の場）〟へ向かうのである。物質を噴出しないとすれば他のいかなる方法によって空間で個体を動かすことができるだろう？　そこでこのような等フォース・フィールドを求めて自然を観察する。そして解答を発見するとき、それを投げ捨てたくなってくる。だがやがて再検討する。そして可能性を見つけるが、発見物については少々恥ずかしくなる。それはあまりに簡単なことだけれども、自然界で見出せる唯一のものであり、空飛ぶ円盤に見られるあらゆる機能にあてはまるのである。われわれが求めているその力（パワー）の基本的な応用の元となるのは〝重力〟なのである！

あらゆる物体は構造、大きさ、質量などに関係なく、等しい加速度で重力場の中を進行してゆく。この理論が見たところ簡単だからといって、われわれの熱心さを捨てるわけにはゆかない。なぜなら重力の〝吸引〟に打ち勝つのに空気より軽い気球ほど簡単なものはないからだ。気球はその簡単な構造にもかかわらず、きわめてうまく作動する。円盤は気球の異なるタイプのものと仮定すれば、空気よりもはるかに触知できない、すなわちいわゆるエーテルという媒体の中で〝揚力〟を得る一種の宇宙気球なのである。

F 重力場理論

「自由落下」とか「重力場」という言葉は、宇宙飛行に関心ある人にはまったくよく知られている。だがこの言葉を知らない人もあろうから、先へ進める前に説明しておく必要がある。われわれはエレベーターに乗って急に下降するときに腹の中がボワーッとしたような感じになることがある。このとき乗っている人間は〝自由落下〟の状態にあるが、エレベーターは下降速度が制御されているので、その感じは長続きしない。しかしエレベーター・ホール（たて坑）の深さが数百キロあり、下降速度が制御されていないとすれば、乗っている人間は定数九・八メートルの加速度で一秒ごとに速く落下してゆくことになる。われわれがいつも腹の中がボワーッとしたような感じになるかどうかは問題である。パラシュートをすぐに開かないで長時間の落下をやったことのある人はそんな感じがしないといっている。十中八九は全然不快感が起こらないだろう。さて、この長いエレベーター・ホールを落下するあいだ、人間はたえず〝自由落下〟の状態にある。すなわち〝重力場〟に従っているのである。そしてエレベーターも人間も無重力の状態となる。更に重要なのは、この両者のあいだに相対的な運動はないということである。

もう少し考えてみよう。いま小さな鉄の皿を持ち出して高所から吊り下げることにする。皿の上に一個の小さな鉛の球を置くが、この質量は皿の質量と等しい。これも同じ高さの位置から吊り下げる。これは**第3図**(a)のように皿とは別にまったく自由な状態にある。次に皿の一方の端に電磁石を置くと、これは皿を引き寄せるが、鉛の球は引き寄せない。そこでこの場合は(b)のように皿と球のあいだに相対的な運動があったことになる。

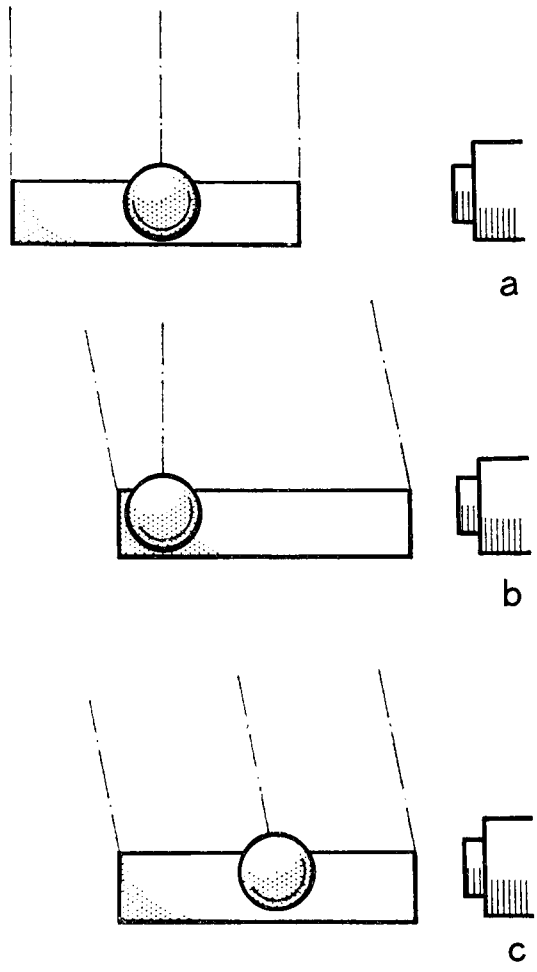
ところが、鉛の球のかわりにタマゴを置いて、相対的な加速度を大きくしてやると、タマゴは割れるだろう。皿とタマゴが等速運動をして、皿だけが急に停止したとすれば、これと同

じ働きをしたことになり、タマゴはこわれるのである。

今度は鉛のかわりに鉄の球を置いて実験をくり返すことにすると、皿と球は等しい加速度で電磁石に引き寄せられる。(c)に見られるように両者のあいだには相対的な運動はない。

これは落下するエレベーターの場合と似ている。両方ともフォース・フィールドが物体に作用している。おもな相違は、磁石はある種の金属の物体しか引き寄せないが、地球の重力場はエレベーターもその中にいる人間も何もかも引き寄せているということにある。そうだ、人体をも引き寄せているが、もっと重要なのはわれわれはそのことにまったく気づかないという事実である。

第 3 図



多数の人が容易に認めないのは次の点だ。われわれが地球の表面から数千キロ離れた位置に置かれるとすると（できれば宇宙服を着て）、加速されながら地球へ落下するだろう。地球の質量が倍になったとすると、加速度も増大するだろう。

これは、もし何かの方法で地球の質量がコントロールされて増大したり減少したりするとすれば、人間が落下する加速度も増大したり減少したりすることを意味する。これが重要な点である。われわれはこの事にまったく気づいていない。なぜなら、地球の重力場は人体のあらゆる部分や宇宙服に等しく作用しており、同じ瞬間に分子や原子などのすべてにも作用しているからである。

ここでしばらくのあいだ、空飛ぶ円盤はそれ自体の重力場を発生することができ、しかもそれを自由にコントロールできると仮定しよう。つまり意のままに前後に発生させるとする。すると円盤は重力場が存在する限り、その方向に加速することができるだろう。その加速度は重力場の強さ次第で変わるのである。この考え方はあまり正確ではないが、最も重要である。というのは、ここに専門家たちを悩ませた、というよりも懐疑的にさせた目撃例、すなわち円盤がある一瞬に見られて次の瞬間には視界から消えたという例に対するカギがあるかもしれないからだ。ファンタスティックで信じられないと人は言うだろう。もちろんそのとおりだ。かつて存在したか今後存在するかもしれない物はすべて、われわれがそれをよく知らない限り常に信じられないのである。しかしこの説はまったく不可能なことだろうか。不可能ではない。重力場が考えられて、それに対するパワーが与えられるとき、宇宙船は一瞬静止して、次の瞬間には光速に近いスピードで進行できるだろう。そして乗組員は自分たちが動いていることを知覚しないだろう。これが円盤によって示されるものすごい加速度に対する唯一の解釈である。つまりこの方法こそ内部の乗員、装置、船体の構造自体が極端な加速に耐え得る唯一の方法なのだ。これが円盤の不可思議な要素すべてを解明することになるのである。

重力場推進方式にひそんでいる種々の性能を

考えてみれば、これはきわめてすばらしい事になってくる。この推論をしているのは私だけではない。たとえばイギリス宇宙旅行協会々長のアーサー・クラークはそのすぐれた著書〝宇宙の探険〟でそのことを論じている。

SF作家たちのいう宇宙空間推進法に言及し、人体にかかるものすごい加速度の影響は、あらゆる原子に作用する力（複数）を応用することによって解消できると言っている。一〇〇〇Gの加速度は人体を無重力状態にするだろう。このような推力は不合理に思えるかもしれないが、クラーク氏によれば重力場というものはたしかにこのような状態を生み出すという。そして木星と矮星シリウスBの重力場の加速度をあげて要点を説明している。木星の場合、その加速度は地球の重力加速度の二・五倍に等しく、シリウスBの場合は表面重力が少なくとも地球の二万倍となり、その加速度は銃から発射された弾丸よりも速いことになる。いずれの場合も人体は全然ひずまない。

われわれが重力と宇宙の構造に関する知識を得るならば、このような推力を実現させることができるのではないかとクラーク氏は推測し、瞬間的な加速時間でもって光速に近いスピードが出せれば、コントロールされた重力場推進方式の効果が大であると述べている。

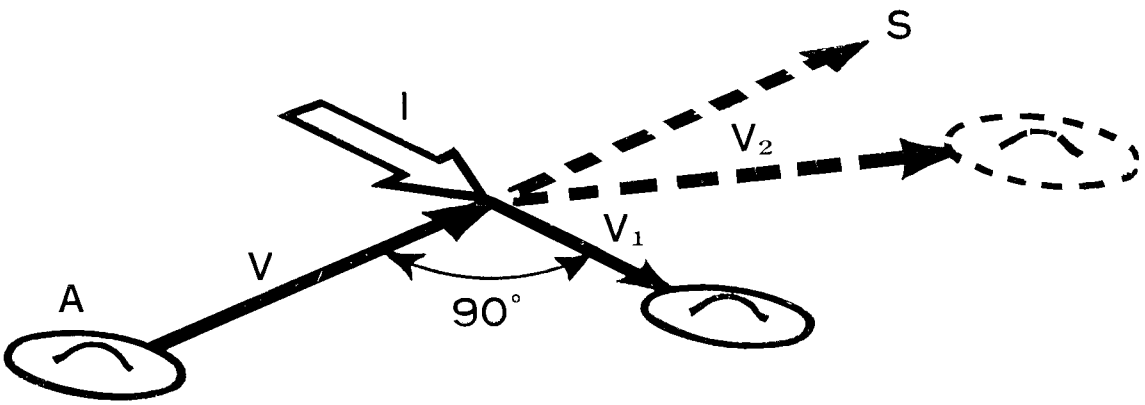
次のようにつけ加えておいてもよいだろう。宇宙船の推進に関するクラーク氏のこのような推論にもかかわらず、氏は円盤がよく示す重力場現象らしきものには関心がないらしい。

だがよく円盤が接近しながら編隊を組んで飛んだり、高速で急に直角のターンをやったりするときに見られる奇妙な現象を説明するのに他の方法はない。たしかにここには従来の科学技術の知識外で作動している〝何か〟がある。**第4図**の物体**A**が一定の方向**S**におかって速度**V**をもつものとし、インパルス**I**が、**S**の方向に対して直角に速度V_1に加えられるとする。すると物体はV_2の方向に動いてゆく。しかしこの図においては物体は直角にターンしているのが見られ、これは方向**S**では初速をすべて失っていることを示している。言いかえれば物体はその特定の方向に対して限りなく減速したのである。これは重力場以外の方法では説明できないことだ。もし円盤が航空力学的なものとすれば、この空中曲芸は構造の驚異を物語っていることになる。

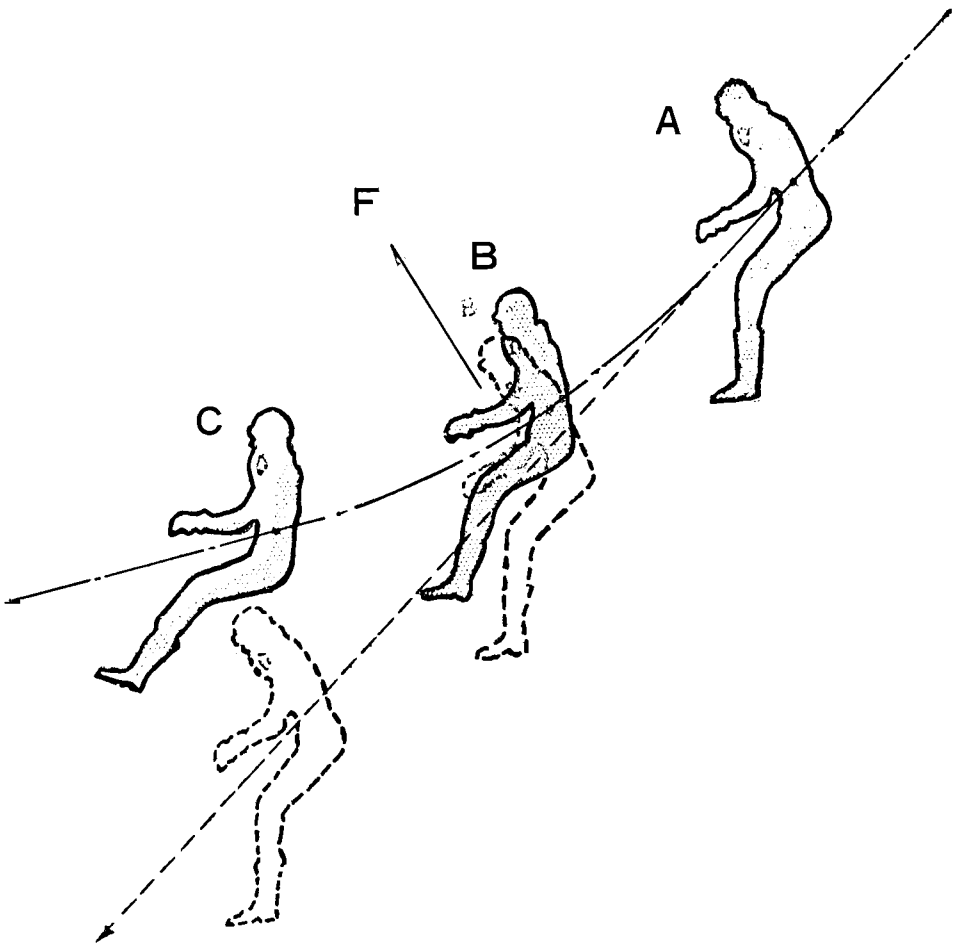
第5図に見られる飛行機が高速急降下からプールアウト（注＝急降下から水平姿勢になること）に移るあいだ、遠心力によってパイロットにかかる圧力を考えてみよう。三通りの状態になることがわかるだろう。すなわちプールアウト**A**の直前に存在する状態、カーブ**B**、垂直と水平になったときの状態**C**である。ここで曲率半径は大きく減少している。

ニュートンの運動の第一法則（注＝慣性の法則。静止もしくは一様な直線運動をする物体は、これに力が作用しない限り、その状態を持

第 4 図



第５図



続する）によれば、機体・パイロット・人体内の血液などはまず進行線**A**上にある。**B**においては航空力学的な力が機体に作用し（遠心力）、この力は**F**の方向に加速する。このとき機体は慣性が働いているパイロットの体に加速度を伝える。同時にパイロットの体は機体の運動に従うが、一方、体内の血液は元の運動の方向にとどまろうとして、加速**F**に抵抗する。このとき脳の血液が不足してブラック・アウトが起こったりする。

加速**F**は本来外面的なもので、内面的な機体の構造・パイロット・血液などは、この外面的な力によって加速度をつけられたのである。

ところで重力場という見地から再度検討してみると、この状況はまったく異なるのである。この場合、外面的な航空力学的力は全然存在しない。実際は機体もパイロットも〝内面的な〟加速度を受けるので、機体やパイロットやその血液などのあいだに相対的な運動はない。いわばこれらは一体化するのであって、物質のあらゆる分子・原子は内面的な、すなわち個々の加速度を受けるのである。

これはきわめて重要である。というのは、この方法によれば宇宙服は必要ないということがはっきりしてくるからだ。しかもこの方法で推進される宇宙船のパイロットは、もし操縦室が密閉されて空中を高速で飛行するならば、飛行をまったく感じないだろう。本人は家の中でイスにすわっているのと変わらないはずである。

だが次のような疑問も起こるだろう。「円盤が重力場で作動するのが正しいとしても、その乗員は地球のロケットの乗員が〝自由落下〟で体験するのと同じ無重力状態になるのではないか？」

これは船室や乗員に対してごくわずかに異なるフィールド（場）を生じさせるような装置がない限り、そういうことになるだろう。

ここで一〇〇Gに等しい加速度を生じるフィールドの中にある円盤型宇宙船について考えてみよう。もし船体と乗員がこの力を受けるならば、そこには相対的な運動はなく、全体が〝自由落下〟に等しい状態になるだろう。そして乗員は無重力状態になるだろうが、船室と乗員が九九Gの加速度を生じるフィールドの影響を受けるならば、船室と、船体の他の部分とのあいだには一Gの相違が起こり、乗員は正常な重量のある状態になるだろう。

重力場理論の論議となれば、高速飛行が微妙な装置類に与える影響を考慮すると、もう一段複雑となってくる。そしてこのような状態のもとで発生する事柄を調べるためには、装置類も強力なGのかかる遠心力機に〝乗せて〟みる必要がある。機械装置というものは高加速度がかかると奇妙な事をやり始める。通常約一三・六キロで作動するサーボ機構におけるリターン・スプリングは不活発になるか、またはある瞬間には全然作動しなくなることがある。これは急に別な力が加わるからだ。これを克服するには種々の支障があることが考えられるが、ここで遠心力が問題を解決するのにきわめて重要な役割を果たすのである。だがそれにしてもいずれは限度に達するだろう。われわれはそこまでは到達はできるだろうが、それから先へは行けないだろう。つまり、各パーツを二重にしてサーボで補助する必要があるが、そうすれば内燃機関ほどの重量になる。もっと軽量にする方法を考えなくてはならない。

ところが重力場推進方式を用いる宇宙船ならば、こんな問題はない。非航空力学的な飛行体では操縦部分が不必要となり、そのため重い複雑な機構は排除できる。現在この地球にやって来る別な惑星の宇宙船はおそらくいかなる種類のてこやギヤーなども用いてはいないだろう。複雑な飛行やコースの変化などはすべて簡単な押しボタン方式で可能なはずである。

重力場推進のあらゆる条件はすでに存在している。別段新しい事ではない。われわれは子供のときからそれに関係しながら成長しているのだ。だれもが日常生活でそれを応用している。それは最もよく知られたことなのだが、理解しがたい大自然の秘密――**引力**である！　われわれはそれがマジックでないことを知っている。それは現実のもので、種々の法則を伴っているのだ。われわれが最後的にこれらの法則を理解するとき、何らかの方法でその引力を応用することが可能になるだろう。

科学のあらゆる分野において、われわれはしばしば効果的な方法を発見している。むかし人々は飛行機というものは大西洋を横断することはできないと言った。これは完全に数学上の計算に基づいた考え方である。もちろんこの誤りは当時存在していた既成の各種の効率を応用した結果である。だがもっと近年になると、たとい別なエネルギー源が存在しているとしても、それを動力として利用するには巨大なエネルギーの開発を待つ必要があると言われている。ここでもこの考え方はまったく現代の知識に基づいている。だがこれは間違っているかもしれない。だから前進するにつれてオープン・マインド（寛容の心）を持つ必要がある。

宇宙船の推進法として重力場方式はほど遠いことかもしれないが、この原理が輸送・科学技術・産業などにおよぼす影響は革命的なものとなるだろう。ある種の病気をもつ人々のために完全な、または部分的な無重量状態を地上の病院内で起こすこともできるようになるだろう。今まで不可能とみなされていた科学技術上の離れ業が実際的なものとなり、不完全な交通機関のために起こる道路上の死亡事件は過去の悪夢となるだろう。宇宙飛行士は重力場で操作される望遠鏡を使用するようになるだろう。その内部で現代の望遠鏡と同じように光線が屈折して今は夢想もできないような視野と高倍率が得られるようになるかもしれない。この夢は今われわれの惑星にやって来る〝人々〟によって遠い昔に達成された事かもしれない。

次の報告は未来の科学の一つの可能性を示すのに役立つと思われる。エネルギーが純粋な光のかたちで散るならば空中の正面衝突も致命的とはなるまい。

時は一九五〇年七月二十九日、場所は米イリノイ州スプリングフィールドである。午後一一時頃、キャピタル航空会社のチーフ・パイロットが飛行機で飛んでいたとき、突如青い光線に似た一個の物体が矢のように彼の方へ向かって来た。尾部とおぼしき部分から赤い炎が出ている。地上から少なくとも四名の人がこれを見た。よけるひまはなく、この物体は飛行機のプロペラに突っ込んで来た。動揺も音もない。だがパイロットが見たこともないようなものすごい閃光を放ち、それから消えていった。あとで機体を調べると全然損傷はなかった。焼けたり燃えたりした跡もないのだ。

用心深い人ならこれを聞いて首を振るし、公然と疑う人なら嘲笑する。これは当然だ。こんな事件は最も空想力に富んだ人でも肯定しがたいことである。科学のあらゆる分野において、もっとはるかにまともな事を信じても人は笑われたのだ。だがこの意味はこうである。つまり重力場を応用した飛行体の原子までも完全にコントロールできれば、正面衝突の事故さえも避けることができるのだ。もちろんこれを認めるのはむつかしい。二個の物体が衝突して、しかも無キズでいるというのは——。そうだ、そんなことがあるはずはない。だが原子自体の九九パーセントは空間であり、いまこの記事が載っている紙も見かけは固体であるのにカラッポの空間だらけであることを考えれば、果たして不可能なことだろうか？

ここでモデルを用いて原子の〝カラッポ〟を説明しよう。いま原子モデルとして一本の糸の端に小さな鉛の玉をとりつけ、これを電子とする。これを〝軌道に乗せて〟ぐるぐると振り回せば、持っている手が原子核となる。さて別な鉛の玉を用意して最初の玉に対して直角になるように振り回すことができるが、このときはそれと重なるのである。そしてこの場合は糸の張力を重力に似た力とみなす必要がある。そこで次のようになる。もし空間にこのような二個のモデルがあるとして、それが相手の方向へ急速に進行するとする。もしこの小さな玉が二個またはそれ以上あって接触すれば衝突するだろう。しかしその軌跡で描かれる面をコントロールできるならば、各玉を接触させないですむ。いわば各モデルは互いに〝通り抜ける〟のである。たしかに、もし回転するこのような玉が二個あるとして、各玉が互いにタイミングよく軌道を回るならば衝突を避けることができるし、その場合は二個の〝球体〟が存在しているように見えるだろう。一個の〝球体〟の回転速度が他の球体の回転速度と正確に合致していれば、見かけ上二個の〝球体〟は衝突したというよりもむしろ互いに通過したように見えるはずである。

だがこのたとえは原子の相対的なカラッポの説明として少々粗雑である。実際には電子群が互いに接近すると電気的斥力が発生すると考えられるのである。しかし、当分の間オープンマインドをもってこの理論を受け入れることにし、はめ絵パズルがうまくゆくかどうかを見ることにしよう。先の解説で私は円盤は表面上無音であること、地球の大気圏中をマッハ五まで加速される船体の表面は、摩擦のために温度がかなり上昇すると述べた。だが高速で飛ぶ飛行体につきもののソニック・ブームがない。

ここで船体自体の重力場によって地球に向かって宇宙空間を進行する宇宙船を考えてみよう（地球の引力による影響はないものと仮定する）。この宇宙船が大気圏の希薄な上層部をかすめ始めるにつれて、船体に最も近い粒子群が重力場の影響を受け、船体そのものといっしょに進行するだろう。言いかえれば、船体は重力場の影響によって絶えずいっしょに進行している空気と決して接触することはない。そのため摩擦もなければスピードが落ちることもなく、ほとんど音も出ない。非常な高速になると、この空気帯が船体にかわって重力場の影響域外にある空気の粒子に摩擦による動きを与えるので、空気の乱れと音響を発生させるだろうが、この粒子群の速度が外側へゆくにつれて落ちることを考えれば、この音響はかなりやわらげられるので、たぶん地表からは聞こえないだろう。もっとも低空で飛ぶ円盤が一種の音を発生

することは十分考えられるが、これは少数の例にすぎない。

重力場理論のこの一面の意味が理解できない人はほとんどあるまい。これはわれわれが航空力学について知っている事柄をある程度放棄することになるだろう。速度の低下や衝撃波などはもう存在しないのだ。高速で飛ぶ飛行体の外部のオーバーヒートや、その他航空力学者の頭痛のタネとなっている事をすべて解消するのである。だが学者はこの発見を喜ぶだろうか？当然のことながら喜ばないだろう。自分の仕事を物理学者にゆずり渡さねばならないからだ。

天文学者は大気圏外で天体とイン石が衝突する機会を計算している。見たところこの機会はきわめて少ないが、重力場はこの可能性をゼロにする。これはたしかに天文学者の見地からすれば望ましい特徴である。

これまで筆者に対して質問が出されたことがある。「イン石やガスの粒子のような固体のすべてが円盤タイプの飛行体の進路から遠ざけられるとすれば、その結果起こるフォース・フィールドがレーダーのエコーを妨害しないか？」

これはちょっと考えてみればわかることである。もし妨害するとなれば、あらゆるレーダーは地球自体の重力場によってだめになるはずだ。

重力場の作用範囲は破壊的ではないにしても強力であり、これは次の二例によって証明されている。その一つは不幸にも悲劇であった。（注＝ここにはアイダホ州のＵＦＯ出現事件やマンテル大尉の悲劇その他の実例が述べてあるが省略する）

これらの各実例においてはある種の強力な放射線が存在するように思われるが、これは重力場そのものを発生させるパワー・ユニットから出るのだと速断してはならない。実際には、重力場の中のあるフィールド（場）の発生がこのような効果を生じさせるのかもしれない。

そうだとしても原子エネルギーの高度に発達した方式が円盤に用いられているとも考えられる。だが驚いたことに、それにはごくわずかなエネルギーしか必要としないのだが、それは後述しよう。

さてこれまでに種々の興味深い観察をしてきた。そして重力場方式による現象が存在する動かしがたい証拠があるのだけれども、その形跡は確実に存在するのである。

(1)固体は船体をとりまく〝力〟によって動かされるか、または反発される。

(2)極端な高エネルギーのショート（短絡）があるらしい。その結果、円盤が地面と接触するときにエネルギーは完全に発散してしまう。

(3)船体全体はしばしば高度に磨かれた鏡のようにきらめくか、一種の小型太陽としてみずから発光するのか、または外壁が青灰色の単なる金属的な物なのか、このいずれかのように見える。このどれにしてもまず間違いなく考えられるのは、材質の中か、その周囲の空間にか、あるいは両方にか、とにかく何らかの変化が起こるということである。

以上の三つの要素は各種の円盤目撃報告から引き出されたものである。

読者は質問するだろう。「このようなフィールド（場）を発生させる既知の方法があるのか。この目的で研究が行なわれているか？」と。

あるのだ。多くの研究が行なわれているし、まだ効果はあがらないけれども各種の方法が研究されている。だがもっと重力の性質を知らないと成功しないだろう。

だれも知っているように、噴射推進方式は基本的にはガスの噴射で起こる反動を応用したものである。その噴射量が大きくなればなるほど、反動も大きくなる。

そこで明らかになるのは、究極の型と効率は可能な最高速で噴出するガスにかかっている。核反応ロケットはこれに到達する手段であるかもしれないし、一定の積載物と共に限りなく速度を速めて宇宙空間を進行できるかもしれない。しかしこの可能性はロケット製作者の夢を大きく高めるけれども、自然が人間に課している種々の慣性の力によって人間は縛られている。たとえばわれわれは核反応によるエンジン

を完成したとしよう。これはごくわずかな量の燃料で宇宙船にいつまでも推力を与えるとする。ロケット開発者の夢は実現した。もうわれわれは無重力状態について心配する必要はない。常に一Gまでの心地よい加速度で地球を離れるからだ。言いかえれば毎秒約九・八メートルの定数で加速されるのである。これは目的場所までの半分の位置へ着くまで保てるだろう。それからエンジンを逆向きにして同じ一Gで減速し始める。この宇宙旅行中はずっと地上にいるのと同じ快適さを感じる。ただし方向を逆向きにするときの短時間だけは別である。この点までの状態は軌道を回る宇宙ステーションと同じである。おもな相違は、宇宙ステーション内では一Gという人工重力が遠心力によって生み出され、そのため地球と宇宙空間が船体のまわりを回っているように見えるだろう。

もしこの目的地が火星であるとして、地球に最接近したときの距離を五六〇〇万キロとすると、中間点で達する最高速度は時速約二六七万キロとなり、全部で四二時間ほどかかる。完全に開発された状態のロケット・モーターを用いるのでこれは今まででは最上の方法である。明らかにこれは太陽系内を旅行するには実に良いが、星間飛行となると長期間にわたってものすごい加速度をつけねばならない。しかも数年かかるのである。

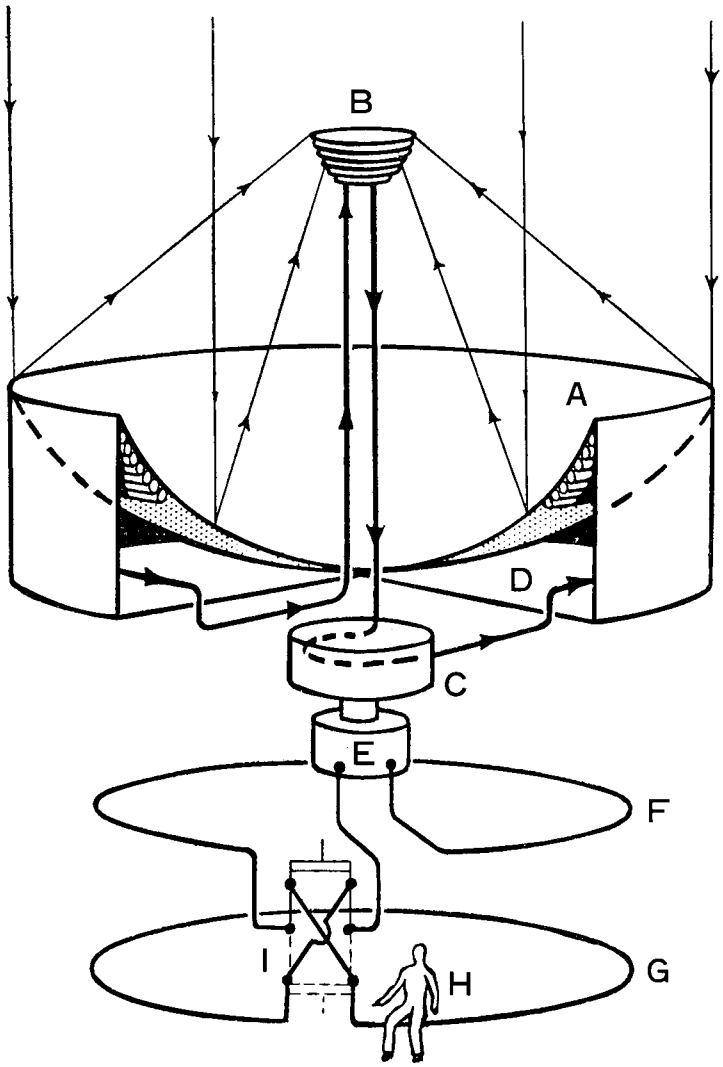
ところが重力場で作動する宇宙船が、瞬間的に時速約二六七万キロに加速して〝コンスタントな〟速度で飛ぶならば、同じ距離にある火星へ二一時間で行けるのだ。」このような速度は現段階では不可能のように思われるが、時速二六七万キロの速度さえも、重力場で進行する宇宙船にとってはきわめて控え目な推定であろう。

重力場推進理論が正しいとしても、次のような質問が出るかもしれない。

「そんな速度で宇宙空間を推進させるのに必要な巨大なパワーをどうやって発生させるのか？　どれだけの燃料が必要なのか？　こうした問題は克服できないのではないか？」

われわれが現段階の知識でもって論ずる限り

第 6 図



●急ターンするUFO？

●1973年11月24日午前4時49分、愛知県豊明市の高校生(1年)本村吉男君がコホーテクすい星を撮影中偶然に写ったUFOらしき物体。そのとき飛行機、鳥などの飛行体は全く見当たらなかったという。背後に残った黒い航跡は小さな点の連続である。（アサヒペンタックスSV・スーパータクマー55mmF1.8開放・トライX・三脚固定）

それは克服できないだろう。だが精神的な束縛を除くことができれば、まったく新しいタイプのエネルギーがわれわれの周囲に存在することを悟るようになるだろう。開発されて動力に利用されるのを待っている、今はわれわれの夢の彼方にひそんでいる、新しいエネルギーだ。

これは作り事ではなく、事実なのだ。ひとたびわれわれがそれを認めて解決しようと努力するならば、それはわれわれのものになる。そんなエネルギーが存在するのなら、その証拠はどこにあるのか、という反論も出るだろう。それを示す簡単な方法があるだろうか？

ある。やや大ざっぱなたとえだが、それを証明することはできる。われわれは文字通りにそれを認めようとはしない。われわれを迷わせるかもしれないからだ。だがそれは重力の背後にひそむパワーの貯蔵庫のドアーをはずすカギを示してくれて、星々への旅で役立つかもしれない。いつ実現するかは、可能性を認めて研究を始めようとするわれわれの意志にかかっている。そこで簡単な説明として、またモデルを用いることにしよう。このモデルは自由な空間に作られて、いかなる引力場からも影響を受けないと仮定する。

大抵の人は鏡に反射する太陽エネルギーのことをよく知っている。ここではパワーを持って軌道を回る宇宙ステーションに供給されるが、これは**第6図**のような循環系統を持つ装置によるものとする。この図では二個の大きな電磁石を除いては格別新奇な物はない。

太陽から来る濃密なエネルギーはパラボラ反射鏡**A**に接触し、焦点**B**に反射するが、この位置にはボイラーが置いてある。ここで蒸気が発生して、タービン**C**に送られて仕事をし、熱変換器**D**に返る。これは反射鏡の〝冷たい〟裏側にとりつけてある。するとふたたびボイラーへ返って、この循環を際限なく続ける。タービンに吸収されたパワーは発電機**E**を回すのに用いられ、それによって起こる電流は電磁石**F**と**G**に供給される。その結果発生する磁場の両極のためにコイルに吸引力が起こる。この電界の強度は反射鏡の大きさによって制御される。反射鏡の面積が大であればあるほど大きなエネルギーが捕捉され、磁場も強くなってくる。

ただ難点となるのは、この条件は常に存在するということである（機械装置の疲労は無視するものとして）。重力にたとえれば、コイル**F**は地球であり、コイル**G**は宇宙船、コイル上の小さな乗員**H**はこの条件に対して何もしない。しかしこの乗員に知性を与えて、きわめて少量のエネルギーを消費するスイッチ**I**の意味を気づかせれば、彼は電磁石**G**の両極を変換させることができ、宇宙空間へ飛んで行くだろう。

具合のわるいことに、そのフィールドの性質のため、彼は激烈な加速を経験し、それを語らないうちに死んでしまうだろう。だが、元の目的を忘れてはいけない。ほとんど無視してよいほどの消費によって無限のパワー源を得ようという目的である。これに関する最重要事は簡単な比較にある。もちろん〝円盤乗員〟は太陽反射鏡を使用していない。おそらくその段階を通り過ぎているだろう。彼らは太陽エネルギー放射線とよく似た物を捕えてそれを凝縮し、応用して、われわれにはわからないような方法で重力場を発生させているのかもしれない。

われわれのテーマは永久運動のヒント以上のものを含んでいる。だからその意味がいかに深遠なものであっても、結論について懸念する必要はない。永久運動について宇宙自体の機構以上にもっと強力な実例があるとすればそれは何だろう。その点を徹底的に究明しようと努力する場合、レール上を走っている機関車にたとえてよいだろう。レールの片側には水を流す無限の水路があって、集水器により水が機関車に供給される。一方のレールには別な水路があって、ここから機関車へ燃料オイルが供給される。これではっきりとわかるのは、機械の疲労を別とすれば、ここには永久運動があるということだ。

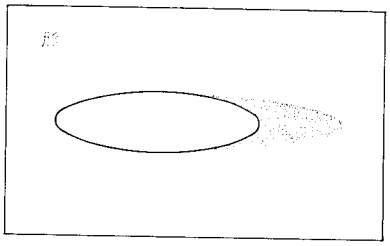
一口に言えば、この場合は大地のエネルギーを取り出し、それを応用しては元へ返しているのである。ただしこれはまことに効果のない方法であることをわれわれは知っている。宇宙空間といえども同様である。しかしエネルギーは存在するのだ。ただそれを動力に応用するのに最も効果的な方法を発見しさえすればよいのである。

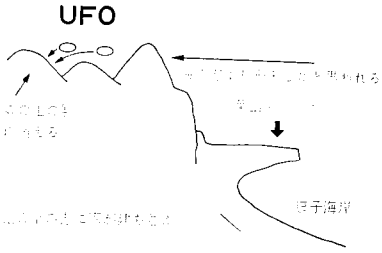
（以下次号）　**久保田八郎訳**

国内UFO目撃報告

▼凡例▲
①氏名・年齢・職業・学校名
②目撃日時
③目撃地点
④天候
⑤目撃継続時間
⑥同時目撃者
⑦観測機器・方法
⑧物体について
⑨飛行状態その他
（　）内は目撃者の住所

①小山正一（18）学生
②一九七二年5月6日(土)午前8時5分ごろ
③神奈川県逗子市葉山マリーナ、左の山の上空にあるのを近くの逗子開成3階F組教室から目撃
④薄ぐもり
⑤約30秒
⑥鈴木哲也（18）三好祐治（18）共に学生。
⑦肉眼？
⑧葉巻型をした物体で飛行船のようにごく低速で飛んでいた。色はタマゴのカラみたいな乳白色。
⑨飛んでいる後方には、尾のようなものを引いていた。が、当日は薄ぐもりという天候状態だったので、正確な形はつかめなかった。
（〒241 横浜市戸塚区矢部町五）



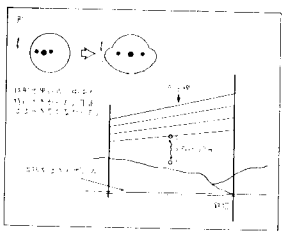


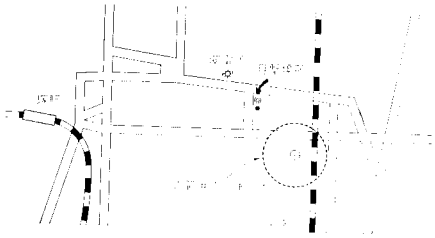
＊　＊　＊

①小山正一（18）学生
②一九七三年7月26日午後2時5分
③神奈川県横浜市戸塚区新橋町
④快晴、強風
⑤約25分間
⑥鈴木哲也（18）、三好祐治（18）ともに学生
⑦肉眼
⑧円形（球体？）1機
⑨UFOは高さ50～70mくらいの範囲を上下に微動、それも横ゆれ航空機のダッチロールのように極端にブルブルと振動しながらで、10回以上上がったり、下りたりしたり、また、途中で止まったりという状態で飛んでいた。

当日は、強風だったので、アドバルーンや観測気球があがるはずはなく、この物体はUFOと思われる。

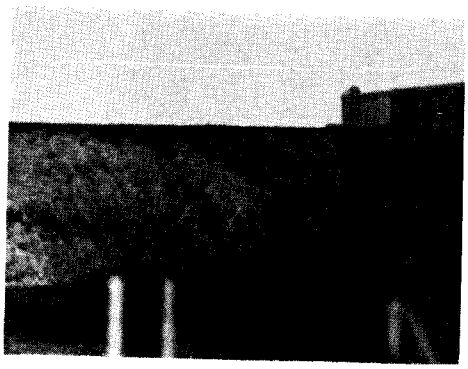
カメラが手元になかったのが残念で仕方ない。いつもは手元においているのに……。
（〒241 横浜市戸塚区矢部町五）





＊　＊　＊

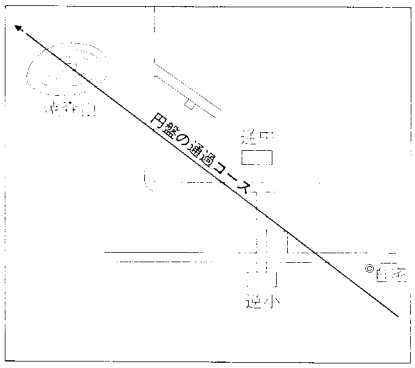
①鈴木利幸（14）
②一九七四年1月25日午後6時12分ごろ
③東京都調布市染地三―一―六九〇（右の自宅の付近）
④晴
⑤6～7分
⑥鈴木利雄（父）、かよこ（母）、孝治（弟）
⑦肉眼、カメラ
⑧ほぼ円に近く、輝いている。大きさは星（1等星）3個分くらいで、色は少々オレンジ色をもち、星とまちがいやすい程度のもの。
⑨初めは北の方向に進んでいたが、少時、空中に止まったあと、今度は西の方向へ向きを変え、急速度で飛んでいってしまった。空中に止まった



ときは物体は光度を低くして、点滅したりなどはしなかった。また、ばく音など音らしきものは聞きとれなかった。
シャッターは四回ほどきった。
（〒182　調布市染地三―一―六九〇）

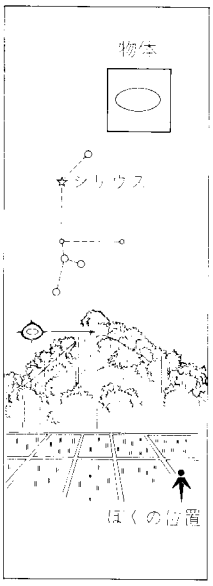
＊　＊　＊

①**高津戸充**（14）
②一九七四年1月
午後10時～11時ごろ
③栃木県芳賀郡茂木町中飯一六三二
（自宅の近く）
①晴
⑤わずかな時間
⑥磯正男（14）、高松岳一（14）それに自分のクラスの生徒の大半が同時刻ごろ、同じような物体をみた、という報告がある。
⑦肉眼



⑧だいたい4、5メートルくらいの大きさで、形は皿のようなもの。色はオレンジ。
⑨南西の方向で、仰角30°、高さ約300メートルの所に物体を発見した。飛行中は形態、色、光度それぞれに変化なく、オレンジ色をして、ジグザグに飛んでいた。大きさは月よりやや小さめ。
（〒321―36　栃木県芳賀郡茂木町中飯一六三二）

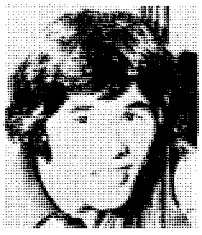
①**牧原　宏**（11）
②一九七四年1月19日（土）
午後9時ごろ
③横浜市戸塚区矢部町一六六八―八八
（自宅の近く）
①快晴
⑤4～5秒
⑥牧原清（父）、牧原菜保子（妹）、佐藤亜里（いとこ）
⑦肉眼
⑧とても明るく赤い色をしていた。
⑨南の方角から西の方角へまっすぐ横に飛んでいき、山に隠れてしまった。



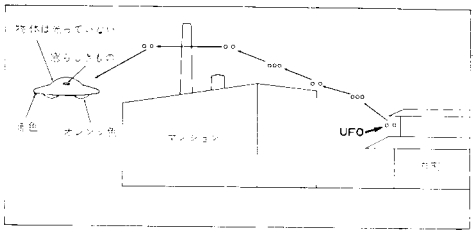
（上図）
（〒241　横浜市戸塚区矢部町一六六八―八八）

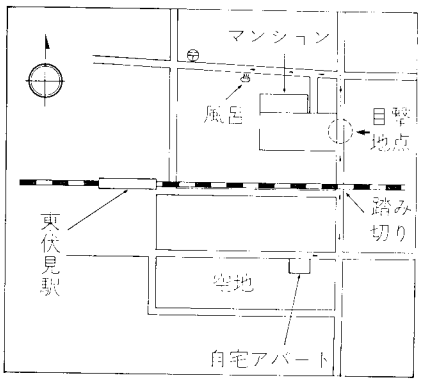
＊　＊　＊

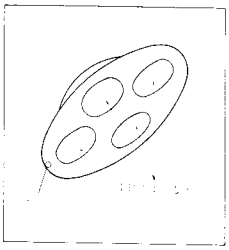
①**中井博二**（20）会社員
②一九七四年2月26日
午後10時ごろ
③東京都保谷市東伏見
（自宅の近く）



①曇
⑤15～20分ぐらい
⑥山崎　勇（29）
⑦肉眼
⑧大きさ約7～8メートルで73頁上の図のような形をし、下には電球のようにオレンジ色の光を放つものが3、4個みえ、また窓らしきものが1つ確認できた。窓らしきものというのは、横に長い長方形で、その部分は少し黒っぽくみえた。物体の色は銀色と黒とをまぜ合わしたようなもので、物体自体は光っていなかった。音はまったく聞こえなかった。
⑨物体は自分の立っているところから数一〇メートルから一〇〇メートルくらいの距離まで近づき、空中に浮かんでいる状態で止まった。
（地図のマンションの上あたり）。
下左図はそのときの物体の飛び方で、はじめ二階家のすぐ横に光が2つみえて、それからフワフワと光が3つになったり2つになったりしながら、風呂屋のエントツ







の手前の方を通り、マンションのちょうど真上にきたとき、一時ストップしたようで、そのあと横の方へ超スローで動きはじめた。この物体の端の方で、赤い光をしたものがぐるぐると一定の速度で物体の周囲を回っていた。

マンションの横がちょうど空地になっているので、あるいはそこに降りるのではと思っていたが、空中に静かに浮かんでいるだけだった。このとき私と山崎さんは、なぜか無気味な感じがして、私達をじっとみつめているのではないか、ひょっとしたら円盤の中に連れ込まれるのではないかと、びくびくしていた。

そのときも円盤は超スローで横へ動いていた。そのまんま動いていたかと思うと、電車の踏み切り近くまで進みそれから物体は浮かんだようになり、斜めに傾いた状態になり、今度はすごいスピードで南の空へ上昇ぎみに飛び去ってしまった。スピードがあがるとともに物体は、色を白色光というか、水銀灯の色とかに変わっていってしまった。

その事件後数日たって、物体の現われた同じ時間と同じ場所でスナップをとっておいた。

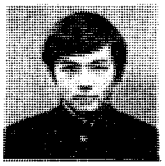
(〒188 東京都保谷市東伏見3丁目2の9 恵幸荘内)

＊ ＊ ＊

①小野 晋(15) 県立仙台第三高等学校一年

②一九七二年10月7日
午後7時3分

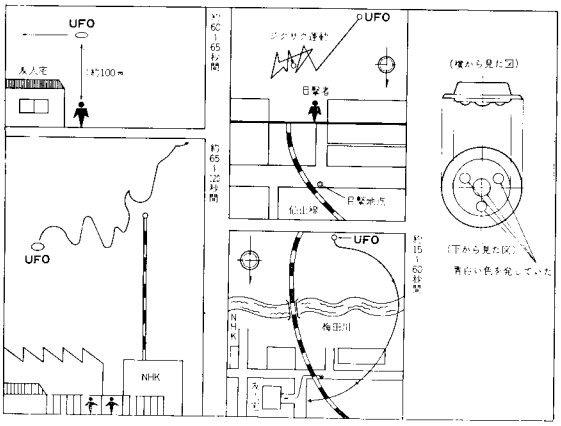
③仙台市原町小田原牛房江の仙山線の踏切。



④晴

⑤約2分間

⑥K・H(匿名希望)



⑦肉眼

⑧大きさは約12メートルで、黄色と青白い光を放っていた。

⑨夜空の美しい星を眺めていると、流れ星のようなものが流れてきた。流れ星と思っていたものは急に上昇、下降をジグザグ状に運動を繰り返していた。とっさにそれはUFOだとわかった。その時UFOは黄色い光を放っていた。私の目には、それが回転しているように見えた。私は確かにUFOがあるのだということの証人を作るため近くの友人の家に走ってゆくと、UFOは私を追うようにUターンをして飛んできた。再び家から外へ出ると頭上を通過しようとしていた。UFOの下側は丸いレンズみたいなものが4つついていてそこから青白い光を放っていた。音は聞こえなかった。その後UFOはジグザグ運動をしながら急上昇し消えていった。

(〒983 仙台市原町小田原牛房江29の1 郵政アパートB棟)

＊ ＊ ＊

①谷 弘之(20) 僧侶

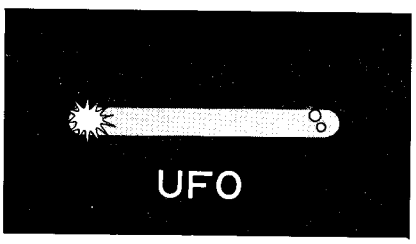
②一九七四年4月23日(火)
午後7時20分ごろ

③福岡県大牟田市歴水八六二

④晴

⑤約4～5分間

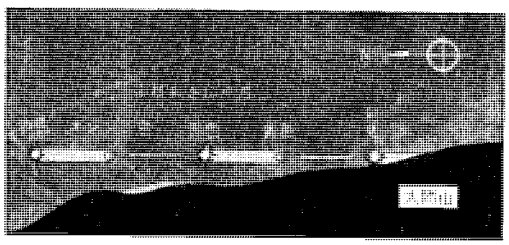
⑥阿部功一(23)



⑦肉眼

⑧前方に一個の点滅する赤色光(マイナス1.5等星ぐらい)、後方はオレンジ色の光(1等星ぐらい)で点滅していない。物体は一個のペンシル型(母船?)か二個の物体か、判別できなかった。フォース・フィールドは無い。

⑨南から北へ直線水平飛行、仰角約30°くらいで、推定高度は100メートル前後、音は無く速度はヘリコプターよりやや遅いくらいで一定していない。物体を発見して10分と



たたないうちに腕時計の針が1時間以上進んでしまったが阿部君の腕時計には異常はなかった。

（〒827　大牟田市八八五―六）

＊　＊　＊

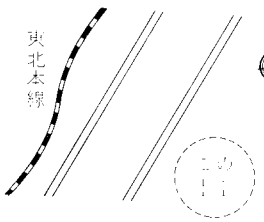
①曽山　淳（16）県立須賀川高等学校1年

②一九七四年1月14日(J)午後5時13分

③福島県須賀川市桜岡七四―一一（自宅）

④下の方は灰色の雲が出ていたが上空は晴れていた。

⑤約30分間



⑥平石文明（16＝友人）、曽山リン（62）祖母）、曽山美保（8＝妹）

⑦肉眼、望遠鏡（100ミリ）

⑧肉眼でみたところ大豆くらいの物体で、物体そのものは約10～15メートルくらいある、だ円形のもの。色はオレンジ色をしていた。音は一切きこえなかった。また、尾も引いてなかった。

⑨仰角50°～60°の西の上空に、風船が風に飛ばされる感じでフワリフワリと飛び、上昇、下降をくりかえし、雲の中に隠れたかと思うと、姿をあらわしたり旋回したりしていた。こうした運動の間中、物体はオレンジ色を点滅させていた。

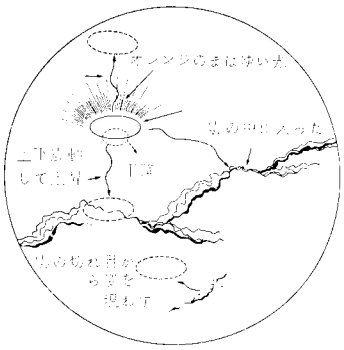
物体は、だ円形で上部とその周辺から光を出していて、バックが暗くなったため、物体の光がよくみられた。このときは望遠鏡100ミリを使用している。

（〒802　福島県須賀川市桜岡七四―一一）

＊　＊　＊

①山口迅（13）倉吉市立東中学校1年

②一九七二年3月



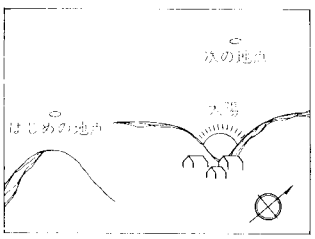
午後5時ごろ

③鳥取県倉吉市昭和町五一二～六、岩美荘（自宅前）

④晴

⑤約1分間

⑥山口　正（8＝弟）、2階の住人1人



⑦肉眼

⑧だ円形で、月くらいの大きさ。

⑨午後5時ごろだから、月が出るにはまだ早いし、おかしいと思っていたら形が月でないのがわかった。はじめは西の方角にあったが、だんだん移動し北西の方に変わった。やや日をあげたくらいの角度の上空をゆっくり横へ移動していった。

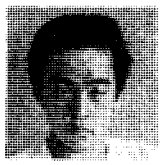
（〒682　鳥取県倉吉市昭和町3―6岩美荘一号室）

＊　＊　＊

①田野村真（15）八王子市立第二中学校3年

②一九七二年11月23日午後8時28分

③東京都八王子市中野町八二〇（右住所2階から）



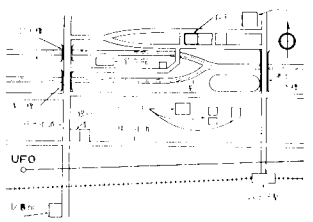
④晴だが多少薄雲あり、風なし

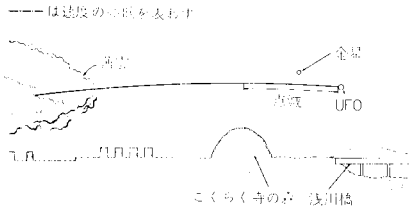
⑤約5分

⑥父母、そのほかに場所は異なるが級友の中川君、大久保君、丹野さん、天野君もそれぞれ見たと報告。

⑦肉眼

⑧金星と同じくらいの赤い光を放ち、姿が見えなくなる少し前から点滅をくりかえしていた。形はキラキラ輝いているため不明。





⑨速度はジェット機の2、3倍くらいのスピードで、音がまるっきり聞こえない。仰角45°くらい、上空3000メートルくらいのところを、東から西へ向かって飛んでいった。

（〒192　八王子市中野町八二〇）

＊　＊　＊

①大田原一成（13）柏四中

1年

②一九七四年2月16日
午前11時20分ごろ

③柏四中の屋上

④快晴

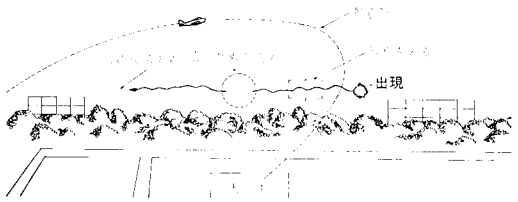
⑤少時

⑥（不明）

⑦肉眼、カメラ（アサヒペンタックスネオパンSS、絞り2＝開放）

⑧光が点滅している。

⑨飛行中、物体は上下に運動していてその大きい光を点滅させ、ゆっくり動いていた。そして消滅してしまった。



（〒277　柏市豊住五―一三―一五）

＊　＊　＊

徳永光男（16）　一九七四年3月29日午後8時頃と午後10時頃の2回、それぞれ2、3分間。西から東へ尾を引いてゆく人工衛星のような白銀色の物体で音はない。

（〒546　大阪市東住吉区瓜破西之町七〇―二　府住38棟1306号）

＊　＊　＊

阿部功一（23）　一九七四年4月17日午後8時10分頃約2、3分間。青白色、黄色に変わり、ジグザグ、直線に飛び無音。

（〒336　大牟田市通町二―一二五）

＊　＊　＊

世古　豊（15）　一九七四年4月17日午後5時30分から約1分30秒間、自宅の屋上で。肉眼で約4センチ、白銀色の物体をみた。無音。

（〒516　三重県伊勢市通町一三四五）

＊　＊　＊

柴野雅聡（15）　一九七四年1月14日午後7時40～50分頃、約10分間、自宅の2階から、だいだい色の物体でシリウスより2、3倍の大きさ。光が点滅していた。

（〒306　茨城県古河市31―37）

＊　＊　＊

牧原省司（14）　一九七四年2月10日午前6時20～30分ごろ約10分間、自分の住んでいる団地内ではじめは星かと思ったが奇妙な動きを始めたのでUFOだとわかった。

（〒239―03　広島市瀬野川町中野中須賀二五七五）

＊　＊　＊

井上正美（小6）　一九七四年3月22日午後6時35分頃、自宅の近くの駅の近くで約5分間青と赤のランプがつきその中間に白い光線を出す物体を発見した。ゆっくりしたスピードだった。

（〒311―33　茨城県石岡市東大橋三一一三の四）

＊　＊　＊

新行内　隆（17）＝銚子市立銚子高校3年＝　一九七三年10月20日午後7時12分頃自宅の近くから米粒より小さい円形の白銀色が仰角90°のところをジグザグに旋回、無音だった。

（〒288　千葉県銚子市栄町三―一五二五）

＊　＊　＊

久米一弘（16）＝高校3年＝　一九七二年？月？日午後3～4時の間。中学時代の学校の4階から雨後10秒間ばかり土星形の黒い物体がスピードは意外とゆっくり飛行していた。

（〒115　北区神谷二―一八―八）

＊　＊　＊

坂井俊哉（15）　一九七四年3月2日自宅の庭で純白で月よりずいぶん明るく円形で太陽の2分の1くらいの大きさのものが純白の尾を引いて2、3秒の間、肉眼で観察した。また、茅ケ崎市浜見団地のベランダから薄いオレンジ色の1等星くらいの明るさの物体をみた。これも肉眼で。

（〒158　東京都世田谷区奥沢四―二五―一四）

＊　＊　＊

井上　寛（14）　一九七四年2月4日午後8時頃の約10分間、自宅付近の団地でオレンジ色で満月の16分の1くらいの物体が、サーチライトのような光を中心部から四方に発していた。もう1つは、同年3月28日の午後9時19分頃、断続時間10秒で小さい星程度だったがジェット機の2倍で飛んでいた。

（〒239―03　広島県広島市瀬野川町中野七六―三三）

＊　＊　＊

井上　寛（14）　一九七四年3月29日午後9時頃の約10秒間、自宅の近くの虹ケ丘団地付近で仰角20°南のアルファードのやや下方から東方へ移動し、からす座あたりで消滅したオレンジ色と黄色の物体をみつけた。観測器具は双眼鏡。

（〒239―03　広島県広島市瀬野川町中野七六―三三）

＊　＊　＊

松岡正憲（21）　一九七四年4月12日午後6時50分から58分の間、自分達の住む高知新聞社の社宅屋上で肉眼と天体望遠鏡を使い観測、オレンジ色と黄色で、楕円形。大きさは直径3ミリ程度。高度3000メートル。

（〒150　渋谷区本町一―九―一七、高知新聞社洗旗荘二〇一）

＊　＊　＊

相沢光寛（13）　一九七四年1月10日午後5時10分頃、約1分間、肉眼で金星の2倍くらいのUFOを発見した。色はオレンジ、のち灰色に変わる。

（〒181　東京都三鷹市井口五六）

＊　＊　＊

白井宏明（13）　一九七四年4月15日午後6時30分頃、約2、3分の間、オレンジ色のUFOがとんできた。それがぐんぐん近づき、やがて細かいところまで見分けられるようになって急に90°回転してスピードを上げながら、飛び去っていった。

（〒518　三重県上野市魚町）

＊　＊　＊

深沢京子（16）　一九七四年4月13日午後7時45分頃、自宅近くで6、7秒ぐらい肉眼でUFOを発見、ゆるやかな弧を描きながら進んでいった。大きさは物体の形がはっきりわかる程度。

（〒419―02　静岡県富士市入山瀬一一八）

＊　＊　＊

吉野義一（16）　一九七四年4月27日午後9時36分から41分までの間、自宅前でUFOを発見、明るいときは黄色、暗いときはオレンジ色をしていて、大きさは1メートルくらい離れたときの画びょう程度。

（〒350―12　埼玉県入間郡日高町森戸新田三〇）

＊　＊　＊

蔵本孝吉（11）　一九七四年2月28日午後8時4分頃の約3分間、肉眼でオレンジ色をした双子形のUFOをみた。はじめは星かと思ったが、はじめまっすぐ動き、たまに方向を変えるので、それとわかった。

（〒987―01　宮城県遠田郡涌谷町下町三八―一）

＊　＊　＊

山本充弘（29）　一九七四年2月18日午後7時38分頃の約25秒間、東京都町田市成瀬二二〇六（株）オーディオテクニカ内のマイカー駐車場でふとみあげると、キラキラと輝く感じのない、なめらかな明るい白色光をした物体が明るくなったり消えたりしていた。

（〒194　東京都町田市本町田二〇〇四―一木曽団地イ一～五〇七）

＊　＊　＊

千葉明律（15）　一九七三年5月29日午後9時頃の約40秒間、肉眼でオレンジ色の皿を重ねたような形の物体を発見、そののち金色になって消えていった。東へ西へ水平飛行し、音もなかった。見たのは近くの稲毛小前。

（〒281　千葉県千葉市花園町四六）

＊　＊　＊

村上祐市（12）　一九七三年12月13日午前10時12分から16分まで、友達の椿　三広君と目撃した。円盤が2つくっついたメガネの形をして飛び、上部の右がオレンジ色、左が青白い光、下左がオレンジ、下右が白い光を出し、南西から回転しながら東南の阿寒の方へ飛んでいった。場所は、近くの日進小学校のグラウンド。

（〒085　釧路市住吉一―五―一六）

＊　＊　＊

守屋正温（14）　一九七四年3月12日午後5時30分ごろの約30秒間、札幌市の石山通り市電停留所で、4、5人とともに肉眼で長さ4センチくらいの母船らしいものを発見した。色はオレンジで、物体は飛行中、明るくなったり暗くなったりして、わりとゆっくり飛んでいた。

（〒064　札幌市中央区南17条西五）

＊　＊　＊

青嶋秀見（18）　一九七四年4月26日午後11時5分頃の約3秒間、あっという間の出来事だったが、幅が北斗七星のγとδぐらいの距離があり、長さはその半分くらいの楕円状の光体が北北東へ飛行した。色は白っぽく無音、スピードがあり、光体の通った跡がはっきりしていて、そこには荒い粒子が散乱しているようだった。

（〒421　静岡県静岡市北安東一―三四―一一）

＊　＊　＊

木下道郎（17）　一九七四年1月3日午後8時35分頃の約5秒間、天体望遠鏡で月面撮影中、西進してくる雲の様な物を発見、それが猛スピードで天頂付近まで来ると、その雲の様な物の内部に丸いものが10数個で編隊を組んでいることがわかった。編隊は個々に分離されなかった。

（〒427　静岡県島田市横井二―一五―三）

＊　＊　＊

米山誠一（15）‖目撃したのは友達の河合保孝君‖　一九七三年11月22日午後4時25分頃の約10秒間、自分達の通っている興文中学校グラウンドで、光度（みかけ上）金星と同じくらいのもので、点状をしていた。はじめは点1つの左右に三日月のようなものがついており、色は全体的に白っぽいレモン色をしていた。それは増光したり、白っぽい色の回りに赤い色がついていたりした。そして西の方に向かっていくうちに低くなって見失ってしまったということ。

（〒503　岐阜県大垣市木戸東町一四七）

――読者の声――

OPINIONS

●逸見忠義　〒710　岡山県倉敷市帯高517―1

「コズモ」5号を購入しびっくりしました。ますます充実しているって感じです。斉藤守弘さん、南山宏さん、高梨純一さん、それにE・V・デニケン!!　ほんとにツウのUFO研究誌です。とくに「神々の戦車（完）」は、なぜ宇宙開発が必要なのか、という疑問に明確な答えをなえてくれました。

ところで昨年の「京大11月祭」に行って、UFOの展示をみてみました。それがきっかけとなり、こんどの1月、講演会に行きましたが、この日円盤観測会が行なわれ、京大生を含む五十人近くの人たちとともに、空に呼びかけをしました。当日は、だめでしたが、ことしの1月20日の午後9時5分から10時までの間、金星より二、三倍の大きさのUFOが現われたそうです。私もぜひみたいと、今、昼は寝て夜起き出して、空を見あげているところです。UFOが現われてくれないかなあ!

丈達俊文
（〒六〇六　京都市左京区吉田中大路町二四　四九）

学校からの帰り、「コズモ」を買う。家に着いて、取るものもとりあえず机の前にすわり、カバンの中からおごそかに「コズモ」を取り出し、パッと、読者の声の欄を開く。いるいる。UFO気違いが。僕はこの気違い達（UFOファン諸氏、ゴメン）のタワゴトの列挙とも思えるようなこのページが「コズモ」の記事の内で一番いいと思っている。これくらい私は「読者の声」がたのしみなのです。もっと充実させてください。

石田　茂
（〒一五〇　渋谷区神山町七―一三）

（本号からこの欄の頁数をふやしました　編集部）

私と「コズモ」の出会いはバスの中でした。小学五年のころからUFOや古代大陸に興味のあった私は少ないながらもそうした関係の本を読み続けてきました。けど、まだ満足できるところまで理解できていませんけれど。

ちょうど通学帰りの満員のバスの中で座席にすわって熱心に本を読んでいる高校生がおりました。「なんの本かな」と首を伸ばして見てみると、それは、UFOと宇宙人のことがぎっしり書いてある本なんです。私はもうびっくりし、それが何という題名の本なのか知りたくてたまりませんでした。私は次の日、あちこちの書店を捜しまわり「あの本、あの本」と口ずさみました。

すると一冊あったのです。あの時のうれしさ、もうその場で立ち読みです。そしてページをめくると「ああ、あの人はここを読んでいたんだ」と、そこを読みはじめたのです。とうとうバス・台を遅らしてしまう始末!

次の「コズモ」の発行がたのしみでたのしみでたまらない!　そんな私です。UFOについてくわしく知っている方とお友達になりたいのです。近県の方、お手紙待ってます。

前田美保子
（〒〇三四　青森県十和田市北平一四七―四七四）

「コズモ」を一号より愛読する者です。昨年十二月二日早朝、わが部屋に身長50㎝くらいの青く輝く人間が突如出現、いやおうなしにフラッシュをあびせられ、その後、一月中旬より現在までさまざまな円盤現象に、連日のように会っているしだいで、（それも早朝三時より六時ごろまで）神経的にかなり疲れました。しかし、人間は奇妙なもので、いまではもう大分なれてきました。友人にしゃべっては狂気、幻想、飯を食っているのか、など反応はさんざん。こうした現象を理解しようにも、その手がかりがないのは言うまでもないことです。

しかし、「コズモ」の記事の中に多少似ているような部分もあり、ある程度、判断の資とすることができるのは、大変ありがたいことです。（円盤に連れこまれた男）のような記事は、この点重要な働きをします。外国の出版物など手ごろな本屋で……とはなかなかいかないものです。この点、前記の記事の量的増大をお願いしたいのです。

僕のような経験を現在、体験している人もあると思うので、「コズモ」を通じて探していただければなおありがたい、が（公開すると、とんでもない、インチキの洪水になるのかもしれないが）ちょっとむずかしい問題です。

私にとって今、かなり積極的な、ある程度強引なコンタクトを強いられているのです。狂気？　幻想は時間の問題で、もうすぐ白昼のコンタクトがはじまるかも知れない現況です。

岳　星行（ペンネーム）画家　四五歳
（〒一五三　東京都目黒区下目黒五―三三―四　松村方）

約一年前、ノストラダムスの一九九九年うんぬん……の予言を知り、地球の危機にめざめた「読者です。あれから一年、たとえ他のヤツから〝あほ〟とか〝気違い〟とかのののしられても、独り黙々と地球防衛軍の結成を夢見つつ、あくせく勉強し、この二月、京大工学部航空工学科に入学が決定しました。今考えてみると、空飛ぶ円盤の本質は、航空工学の分野をひどく逸脱しているようで、むしろUFOの正体を見きわめるには、理学部の方面からアタックしたほうが良いように思える。しかしまあ、UFOも空を飛んでいるのだから航空工学の分野から徹力ではあるが、UFOの本質に迫っていきたい、と思います。

福崎邦男
（〒七二〇　広島県福山市木之庄町二四三）

毎号楽しく読ませていただいております。すばらしい内容です。とくにその中で「読者の声」は読者の反応が種々様々で大変おもしろい。

ここで、「編集部より」を読んで気になったことを少々述べさせていただきます。「個人的な意見や推測は一切掲載するな」「もっと科学的にやれ」、または「月刊にせよ」といった意見があるとのこと。これはおかしな話だ。なぜ、個人的な意見、推測を載せてはいけないのか、また単に「科学的」という教条（ドグマ）に陥ることはUFO研究にとっても真の科学の発展にとっても、それこそマイナスになるのではないだろうか。UFOの研究は厳密に科学的な方法を主軸として進めることに何の異論もありません。が、だいたいUFOというのは、現代科学を凌駕した超常現象です。

それに対してはただ「科学的」といった言葉にとらわれることなく自由な発想を持ってさまざまの立場から独自の仮説を立てることが必要ではないでしょうか。付け加えるならば、「事実」と「推測」を明確に区別して掲載すればよいではありませんか。

小生思いますには、「コズモ」は総合専門誌の性格を持つべきであります。その観点からすれば、読者の立場はおのずから一方に片寄ることなく、さまざまの立場にあるUFO研究者の論文を載せてほしいと思います。

また、日本における研究会、同好会（解散したものも含めて）の概略、紹介なども載せていただきたいと思います。一度あの有名なシェイバー・ミステリーについての翻訳物も連載してほしいと思います。「コズモ」に期待しております。

三谷秀一
（〒一七一　東京都豊島区要町二―四一―三）

子供のころの思い出です。夜、空を見るとどんな星が輝いていたことか。今は、周囲にいろんな建築物ができて、見上げる空は狭くなりましたね。あのころ、空を見つめて、思い描いた夢は、また私の中で生きつづけています。

「コズモ」№5を読ませていただきました。空飛ぶ円盤、宇宙人、それらは純粋な驚きであり、また私の心の中では一つの夢なのです。いま、65ミリの望遠鏡で星を追っているのも、そんな宇宙への夢に魅せられてしまったからなのでしょうか。グローバルな貴誌が、だんだんと素敵になるのをたのしみにしております。

熊谷元道
（〒四八五　愛知県小牧市大字小牧三〇〇四）

二年前、UFOを目撃していらい、UFOにとりつかれ、UFO関係の書物、テレビ、新聞などかなり見たり読んだりしてきました。「コズモ」のような雑誌の存在を期待していたにもかかわらず「コズモ」を今日まで知らなかったなんて、恥ずかしく思います。

ジョージ・アダムスキー著「空飛ぶ円盤同乗記」という本を読まれたでしょうか。この本はすばらしい本です。まだ読んでられない方、是非読んでみてください。宇宙人と会って〝UFOに乗せてもらい〟、宇宙の長老と会見する――。人間は何事につけても、実際自分で体験しないと信じがたいものでしょ

うが、半信半疑の人も、信じられない人も、そのままお話だ、と思って読めばいいのです。そういった事件の真偽よりも、宇宙の長老の話に耳を傾けてほしいのです。

地球は宇宙の緑のオアシスどころか、太陽系内でも最も未開の野蛮な星。地球人は創造主の意志、宇宙の法則？（宇宙の法則については、私などよくわからないのです）に従わず、互いに殺し合い、にらみ合い、公害問題をかかえ、不幸な生活を送っている。だから、文化が進歩の一途をたどらず、太古から破滅を繰り返している。他の星では（例外もあるでしょうが）宇宙の法則に従ってみんなが生きているため、貧困はなく、裕福で愛に満ちた幸福な生活を送り、したがって苦痛、悲しみなども存在しない。文明、文化は発達の一途をたどり、地球などをはるかに超越した水準で大規模な宇宙旅行（と呼んでいいか？）星々を巡り研究をしているそうだ）を行なっている。多くの星の住人は友好的であるから、UFOも公に離着陸しているが、地球ではどうだろう。UFOの存在など全く信じない人が多数いる中で公に着陸でもしようものなら、世界中が混乱し、恐慌状態になるのが関の山で、好戦的な地球人のことだから、UFOの秘密を知ったら他の星を侵略しに行きかねない。したがって地球人がもっと進歩し、友好的にコンタクトできるようになるまでは、公には着陸しない。それまでは少数の人と局部的に接触し、一日も早く公に着陸できるよう努力している。UFOの目撃者も年々増すことだろう。また、多くの文明の破滅をどうして黙って見ていたかということについては、宇宙人としては、多くの子育者等を地球に送り、地球人が宇宙の法則に従うよう勧めてきたが、心ない人たちによって、いつも迫害を受けてきた。かといって自分たちが地球の兄弟に何らかの手を下す権利はなく、地球の進歩も破滅も、地球人の選択によらねばならない。地球人の成長をいつも陰ながら祈り、応援し、見守っているのである。

そういう意見のことが書かれているように思います。その他、生命について、宇宙について、私達の考えるべきことがたくさん書かれています。

本の推薦のようになってしまいましたが、この本を読んでいい、私のUFO観は確かに変わりました。宇宙人とは、得体の知れないインベーダーのような気がしてとても恐ろしく感じていたのです。悪い宇宙人もいるかもしれませんが、今ではすばらしい友が空から見守っていてくれると思うと、何と素しいことでしょう。宇宙人の期待に応えるためにも自分なりにできるかぎり努力しなくてはならないと思います。対人関係における利己主義、醜い争いなど避けたいものです。

もっと地球を宇宙人が堂々と来ることのできるような、すばらしい星にしましょう。

吉田泰子（〒六六一　兵庫県尼崎市時友シキンデン二〇〇―一一）

ぼくが初めて「コズモ」を読んだのは№5からなのです。前々からこの本のことは知っていましたが書店にいってもないといわれ、会社の住所も知らなかったのでした。そう、あの日は3月29日のことでした。ひょいと書店をのぞいたらなんと№5があったのです。感激しました。表紙をめくるとUFOの写真など盛りだくさんでした。その日は、一日中、読んでいました。ほんとうに、あきない本だと思いました。そこで僕は思ったんですけど、心霊、幽霊などのことも「コズモ」のような形で是非作ってほしいと思います。もちろん隔月刊で…。

伊藤友博（13）（〒一五二　目黒区目黒本町二―一二―三）

一号を除き欠かさず「コズモ」を読んでいます。私は二度ほど不思議な光体をみたことがあります。一度目は中二の夏、真夜中のことです。目がさめてガラス戸を隔てた外をみると、40ノ60センチほどの光（記憶では裸電球のような色）がガラスに写っているのです。ガラスと道路は平行しているし、動き方から自動車のライトではありません。それはフワフワと浮かんでいる、としか表現できないのです。それは、メートル程ど西から東へ、そして斜め上に移動し、パッと消えてしまいました。どのくらいの時間そうだったか全然わかりません。私は火の玉かと思いました。

二度目は高一の夏、星のきれいな夜で、散歩して星空に見とれていると、北の方から南の方へ、金星の2、3倍ある（肉眼で見る限りで）光体が流れていくのです。最初、すいぶん大きな流星だと思っていたのですが、消える（それとも見えなくなる）までの時間が20ノ40秒くらいで、スピードも流星にしては遅いように思いました。

それから、最近、超能力者とか、ユリ・ゲラー氏についてずいぶん騒がれましたが、超能力者はUFOを見ている、という事実はUFOと超能力について関係づけるもののようです。できればその関連性について取りあげてください。

鈴木鈴子（〒四六四　名古屋市千種区元古井町七―六　河合塾千種女子寮四〇七号室）

初めて投稿する一高校生です。創刊号より5号に到るまでたいへん興味深く読ませていただいております。

さて、貴誌に関しての意見を二、三ついわせていただきたいと思います。まず、その一つ。写真をもう少し増やしてほしいと思います。第二に読者の興味をもっと進展させていく意味で全国にあるUFOの研究会を紹介してほしいのです。現在ではどんな活動をしているのかわかりませんが、私も以前、インターナショナル東京支局というUFO研究会と文通などしたことがあります。ここでは会報なども出して貴重な資料を送ってもらったこともおぼえております。このような会を紹介すればUFO研究がもっと一般層にまで広がってゆくと思います。（少し大げさかな？）

ところで私は学校のクラブ（自然科学部）にはいっています。そこで10ノ11月に予定されているのですが、そこでUFOをテーマとした研究発表を計画しているのですが、今のところ私は少ししか資料をもっていませんので、皆さんお持ちの資料を私の方に送っていただけませんか。コピーでもけっこうです。もちろんタダとは申しません。ある程度のお礼はさせていただくつもりです。なお、文通も大歓迎です。

庄司雅彦（17）高3（〒六七七五　兵庫県加古川市加古川町北在家）

「コズモ」一、二、四、五号と続けて読みました。この中で一番興味深かったのは三号と五号に出ていました「円盤の中に連れこまれた男」でした。これは私に夢を与えてくれました。現在、私には友人と呼べる人は少数なので、ブラザーズとコンタクトできて、友人になれたら、どんなにステキだろう、と思いました。円盤に乗せてもらったり、金星や火星、土星アンドロメダなどを旅行したり、ブラザーズから知識を受けたり……ああ、これもみんな夢なのでしょうか!!

最近、知人に「円盤の中に連れこまれた男」のことを話しましたら、侮辱されてしまいました。ふだんは「UFOや宇宙人がいることは真実だと思うが、宇宙人は地上において来るほどバカではない。宇宙人が地上においてくるなんて考えられない。その人（三号と五号に載っているハーバート・シャーマーとウオレン・スミス氏）は、大ぼらを吹いて、人が信じるのを見てあざけり笑っているのよ」と言うのです。私はまるで、自分がバカにされているようで非常に頭にきました。ブラザーズよ!!　こういう人にこそコンタクトしてほしい。

それから五号で一九六〇年に発表されたカナダの地球製円盤の写真が出ていますが、去年の一火曜スペシャル」に三つのタイトルで放映された時、アメリカで個人で円盤を研究して作っている人を見ました。本人も「私の作った円盤は多数の人に目撃されました」と言っていました。是非この人の作った円盤の写真を「コズモ」に載せてください。お願いいたします。

片岡まり子（〒一八二　東京都調布市深大寺一二六五―四）

毎号楽しく読ませていただいています。私は先日おもしろい本を発見しました。「地球空洞説」という本で、この本は、地球が空洞であるということを決定したという立場から書いてあるもので、UFOもそこからやってくるらしいことが書いてありますが、そのことを貴誌では問題にしていないようですが、一考の余地があると思いますけど…。

また「コズモ」には、マイルとかフィートという単位が使ってありますが、日本は世界でもわかりやすい十進法を用いてあるため、距離はすべてメートル、キロに直していただいたらと思います。

畠田明知（〒五一四―〇　三重県津市栗真小川町八六九―七二）

「コズモ」〝日本古来の天空人出現説考〟はたいへん興味深く読ませていただいております。ところで、4月号の「うつろ舟の謎女」もその一つですがこのうつろ舟については、柳田国男著「妹の力」の中に「うつぼの舟の話」として記されている中で、少々興味あるところがありました。

肥後の八代地方で牡丹長者の物語として今も歌われているものは、潜航艇も及ばざる念入りの細工であった。牡丹長者には三人の子息あり、二人はそれぞれりっぱな里から嫁を取ったが、末弟の嫁御は、すなわち貴人の出であった。その主要なる文句は、弟嫁殿の最初を聞けば

元は源氏の公卿衆の娘
少しばかりの身の誤りで
うつろ舟から島流された。

紫檀黒檜唐木を寄せて
京の町中の大工を寄せ
さてもできたやうつろ舟が
びどろ（ビードロ）さまにはちゃん（チャン）など掛けて
夜と昼との界がわかる。
金と銀との子よつ（ママ）かいて
中に立派な姫君入れて
なんじ（ママ）灘より押流されて
ここの沖には五日はゆられ
そこの沖には七日は揺られ
流れついたが淡路の島よ
島の太夫の御目にかかる。

うつろ舟とは話にやきけど
ほんに見たことは今度が始めよ
捨て上げてくずして見れば
中に立派な姫君さまに
頭に天冠ゆらゆら下げて
その日その日の食事をきけば
蘇鉄団子やこくど（ママ）の菓子よ
菓子の中でも上菓子ばかり
一つあがれば七日の食事
二つあがれば十四日の食事
それが立派な食事でござる
国はいづこか名はなにがしか
国は申さば恥かしけれど
元は源氏の公卿の娘
少しはかりの身の誤りで
うつろ舟から島流された
あらは大夫もこれ聴くよりも
国に還るか縁付きするか
うつろ舟から流されたから
二度たわが家に還りはならぬ
お世話ながらも縁付き頼む
あらは大夫もお喜びで
牡丹長者の弟嫁に

とある。これも常陸の浜の人とともに、食事の点ばかりを気にしているが蘇鉄団子はいかにも殺風景で、天冠をゆらめかす女性とは思われぬ。……と記されている。

日本の昔話の中には、興味深いところが多いように思われます。2月号で取り上げていただいた「かぐや姫と羽衣の天女の宇宙人説」は、楽しく読ませていただきました。以前から昔話の中で、天界と地上とのつながりを持つものに興味がありましたので……。

池田恵美子（19）学生
（〒三〇七　〇〇　茨城県結城市大字大木三四六一）

初めてお便りいたします。〝コズモ〟を読みはじめて七カ月ぐらいになります。

ところで私は、今までに三つくらいの仮説をたてました。その一つは〝桃太郎宇宙人説〟。これはNo.4に出ていた〝日本古来の天空人出現説考〟を読んで、私も一つ作ってみようかなあ、と思ってから作ったものでした。この説は中学三年の卒業記念のクラス独自で作った文集に載せました（現在高校一年）。この説はあまりニンク（？）がなかったようでした。（それは卒業式に配ったので、みんなの意見が聞けないため）

2つめには〝超能力者宇宙人説〟、これはまだよりくんではいませんが、スプーンをまげる〝ユリ・ゲラー〟のことについて載っていた雑誌を読むと、宇宙人に会ったとか、円盤に乗ったとか書いていたので、もしかすると本当の宇宙人ではないかと思い、作りました。

3つめには、〝ノストラダムス〟は宇宙人で、未来へやってきて、そのことを書いたのが今の〝大予言〟ということになる。（これは、自分の仮説）

私の望みは、宇宙人とコンタクトして、円盤に乗ったりしたい。それと、もし宇宙人が超文明をもって（ずっと昔から）いたら、地球の誕生だとか、四大河文明、アトランティス大陸についてや、イースター島の石像など、いろいろなことを聞くと、解明できなかったことが簡単にとけてしまう。そうなるためにも、早く宇宙人が私の前に現われて欲しい。

最後に〝コズモ出版社〟のみなさま、ご苦労さまです。これからも、よりよい本にしていってください。

滝　俊顕
（〒〇八五　北海道釧路市浪花町一一丁目一番地）

僕は、UFOが地球に来る際、必ずやらなければならない超光速飛行についていろいろな意見をもっている。そして誰かに話したくてたまらない。今回は、そのうち代表的な意見を発表しよう。

一つは、物質・エネルギー転換機による超光速飛行。すなわち、物質をエネルギーに変えれば、質量はゼロとなるのだから、相対論にもひっかからず、超光速ができるということ。この場合、エネルギーは、ほんの少しの運動エネルギーを与えるだけで、無限に近いスピードを持つ。もちろん光速などバカバカしくて、お話にもならぬほどのスピードで、これを使えば、何光年であれ、何兆光年であれ、ほとんど一瞬のうちに移動することができるのだ。ただ、これには円盤をエネルギーに転換した際の制御方法などについて問題があるのだが、これもエネルギーの研究によっては解決の見込みもあるのではないだろうか？

続いて次は、多次元連続体を使用する方法。

これはまったく突拍子もない話だが、多次元が同時間に存在する、現実のマトリックスであるように速度も同時点・同位置に存在する現実のマトリックスとして考えられるのでは……ということである。つまり、わかりやすく言って、別世界と同じように、タージオン世界とタキオン世界が、三次元的には同居、四次元的に別個として存在しているのではないか？　ということなのである。そして、これが事実とすると、タージオンの物体も、タキオン世界に、次元転移する事によって、超光速飛行も可能となるのだ……E・ハミルトンのスターウルフに出ている高次空間飛行（オーバー・ドライブ）も僕の考えたこの飛行と同じようなものだろう。宇宙のスカイラークの、第五次、第六次ノーマスもタージオンをタキオンに転換するノーマスなのではないだろうか？　まあ、僕としては、重力航法も、一応考え方として取っているが、欠点が多すぎるのではないだろうか？

まず、第一に無限の重力で超光速を得るにも、無限の質量、無限のエネルギーでは0の質量対0のエネルギーの場合と同じように、運動ができないだろうということ。

第二に、そういう無限の質量対太陽系の質量の場合、円盤が太陽系に吸い寄せられるのではなく逆に、太陽系が円盤に吸い寄せられることになり、太陽系が大異変に見まわれることになるだろう、ということ。

最後に、重力も光のスピードしかもっていないということ。

以上のように、欠点が多すぎるため、僕は重力航法は、短距離間の飛行にしか使われないと思っている。

山梨県の増山君等、重力による超光速飛行を考えている皆さん、この点も含めてもう一度重力航法について考え直してみてください。

最後になったが、僕の秘密を……。皆様が信じようと信じまいと勝手なのですが、僕は宇宙人なのである。……もっとも、円盤で飛んで来るような低級な宇宙人と違いまして、本当の宇宙人、つまり、宇宙中の高等生物の血を継ぎ、心の中にハートナーとして精神的高等生命体を入れている超高等生命体なのである。だから、今僕はじっくりと地球人の考えた異変について観察しているところ。ユリ・ゲラーのような低級超能力生物に驚いている人間やUFOに対する動きなどを。しかし地球人というのは変わっているネ。特に日本人が変わっている。まあ〝コズモ〟の読者の皆さん達の考え方をある時は笑い、ある時は驚き、ある時はバカにするため、読者の声を楽しみにしよう。

一孤独な宇宙人一

瓜生真久（12）
（〒九一五　福井県武生市村国町一六一九）

始めまして。私も皆さんと同じくUFO狂です（幸運に感謝するしだいです）ところで、私がペンをとった理由は、この前、四月号の読者の声を読んでいますと、徳島県の川村　君・　氏？という方の意見が載っていましたが、これに対して私の意見を述べさせていただこうと思ったからです。

貴氏の意見の最後の方で、問いかけているように強調して書いてある部分がありましたが、それに対して、UFOのもつ意味とはいったい何だ！　私も知っている人がいたら、とことんまで聞いてみたいものです。

UFOを見たからどうだというのだ！　……まさにそのとおりです。UFOを見たからといって頭が良くなるわけでも、英雄になるわけでも、お金がもうかるわけでもありません。そして写真に写っているUFOがどうだというのだ。いったい何であればいいと思っているのだ。あなたたちは……。

貴氏の問いかけられた あなたたち の一人として申しあげます。そうです、その何であるかが、真に知りたいのです。そうです、何であるかがはっきりわからないのです。だから私はいっしょうけんめいUFOの本を読んでいます。何であるかが知りたいんです。というより、私の場合はUFOについての自分の考えをもっています。だからこそ、それを確かめたいというのが正確です。とにかく私は知りたいんです。UFOがなんなのか。他のUFO狂もそうじゃないでしょうか。みんな一人一人UFOについての考えをもって、それを確かめたいと思っているんではないでしょうか。また、そこまでいかなくても、本当にUFOが実在するかどうかを確かめているのではないでしょうか。

確かに人は知らないものに興味をもち、あこがれに近い欲望を持つと思います。そして、この欲望こそが科学の進歩の原動力に一役かっているのだと思います。そして、私たちの場合、その対象がたまたまUFOだったのだと思います。なにかいろいろと生意気なことをいったようですが、これが私の意見です。

石塚美那（17）
（〒九五九　一六　新潟県笹堀一四三五）

私はUFOに大変興味をもっています。

何度も本屋へUFOに関する本を探しに行きましたが、全然ないのにガッカリ。そんなある日、この〝コズモ〟を発見したのです。たいへん興味深く、おもしろく読ませていただきました。それで意見ですが、UFOについても、と詳しい調査をした結果を書いていただきたいと思います。

それと、UFOについて興味をもっていて私と文通している中二の女の子もいます。だれかいっしょに、グループをつくりませんか。全国各県の人たちがそこでのUFOの研究をレポートにしていただいて、その結果を私のところに送っていただく、そしてそのまとめたものを研究者に送るという形です。それから全員が十六歳以上になったら、一年に一回、どこかに集合する、というものです。希望者は、私のところへ連絡してください。お知らせ、意見もいっしょにしてください。

木内和枝
（〒二八七 千葉県佐原市香取一九四二 電話〇四七八五（七）六二一）

『コズモ』を興味深く拝見させてもらっております。私はまだ一度もUFOを見たことがありませんが、その存在を信じている一人です。

私が『コズモ』を読んでいるのを横でみていた母が言いました。「そういえば、あの時見た物が、円盤だったのかしら？」

私は驚いて、というより喜んで、その時のようすをしつこく聞いたところによると、以下のようなことでした。

私の母が十歳のころ、家の近くの田んぼでレンゲ草をつんで遊んでいたのですが、おしっこがしたくなって林の中に入って、ふと木々の間の空を見あげると、方向ははっきりしませんが、音もなく、いままでに見たこともない物体が飛んできて、地面と四五度の高さのところで、しばらくの間（五分以内）静止してからどこかへ飛んでいったそうです。形は灰ザラを下からながめたようなもので、色はだいだい色、無音、距離の判断はむずかしいのですが、母の感じによると30メートルぐらいだったそうですが、かなり近かったと思います。母はその間、なんだろうと思って、ポカンとながめていて、それが飛び去ったあと、頭がジーンとしてめまいを感じ、方向がわからなくなってしまったそうです。母はそのとき、きつねにだまされたのかしら？と思ったといっています。そんなことがあったのに、家の人には何も告げなかったそうです。成人してからも、気違いあつかいされるのがいやだったから、多言はしなかったといっていました。

以上が真実ならあの物体はUFOそのものだと、断言します。そして、それは母とコンタクトしようとしたのか、観察だけしたのか、それとも全然、別の目的でそこに現われたのか、そのへんはよくわかりません。それから書き落としましたが、円盤の大きさは見た感じでは直径30センチメートル前後だったとか。十歳の少女に空に浮かんでいる物の距離と大きさの測定はむずかしいと思えるので、あやふやです。しかし見たことは事実です。夢ではないとはっきりいっています。母がウソをいっているとも考えられません。以上の事件は今から四十年前の話です。

何かの参考になればと思って筆をとらせていただきます。

染矢高男（18）
（〒三二九―二六 栃木県大田原市下石上一七五九―一九）

私は、五年ほど前からUFOに興味をもっています。特にアダムスキーに関しては、もっと知りたいと思うのに、アダムスキー『生命の科学』が本屋になかなか売っていないのですが。

私は円盤を見たことはない。多くの人は、そういうことに対して嘲笑しますが、だからといって、信じないことは真実を見極めることができないと思います。科学というものは無限です。いまだ、わからないことがたくさんあるはずです。でも多くの科学者がUFOを否定するように、物理の先生は、私が見せた「空飛ぶ円盤の真相」の中の宇宙船の磁気推進力について、そのようなことはあり得ないとまっこうから否定されました。確かに現代の科学からはあのような推進力は否定せざるを得ないかもしれません。

また、物理の苦手な私も磁気とか重力場、フォース・フィールドの理論も全く理解できません。しかし、だからといって、そのようなことを否定することはできないと思います。可能性は充分あります。その可能性を求めて研究することが、人類の発展に大きく貢献することは、言うまでもないことと思うのですが。

安堂慶子（16）
（〒六一一 京都府宇治市大久保町大竹三一）

UFOの電波受信報告

受信日時　一九七四年3月14日　午後11時05分～30分
受信地点　自宅
天候　晴
受信継続時間　約25分間
同時受信者　なし（もよう）
受信機器　50MHZ帯アマチュア無線用トランシーバー
受信状況　受信機のスイッチを入れ、ダイヤルを回していると、突然大感度で信号の強さからいって、家から半径10KM以内の地点で発射されたものと思われる
受信内容　「……JF1KD（私のアマチュア無線呼び出し符号）、……JF1LKD、こちらはJF1UFO、JF1UFO、田無市、入感してましたらコンタクトよろしく」

これで、JF1UFO局の電波受信報告をおわります。

柳田俊彦
（〒一八八 田無市西原町三―七―F二―六）

『コズモ』No.5読中、複雑怪奇な点滅光跡の謎について、高梨純一氏によると、22ページで、アイファング・ファイツについて「点滅光体自体が規則正しく点滅する明るい光に輝いている物体か、それとも一方の側だけに明るい光をつけて回転しているのか」と考察しておられるが、No.2のオリオン州の円盤写真を見ていただきたい。それには円盤が信じられないほどの正確さと速さで瞬間移動しながら上昇していくことが、一枚の写真によって語られている。

私はその瞬間移動によって点滅光跡が生ずると考えている。つまり、円盤はつねに発光して小きざみに瞬間移動している間は、光はとぎれて写真に写るのである。これが私の以前からのアイファング・ファイツに対する考えである。

ともかく、円盤の一方の側だけを発光させて回転しているという考えには、どうも賛成できない。とにかく、それは不合理だから……。

坂井優之
（〒一七三 東京都板橋区大谷口上町六〇―九）

“神々の戦車”第一回から読み出しましたので、ぜひ第一回を見たいのです。本誌のバックナンバーはないとのことです。どなたか、コピーでいいからゆずってください。お礼には自作の「星占いハガキ十二星座十二カ月の循環占い」を差し上げます。

以上、よろしくお願いします。

早崎郁舟（フロ古星術師連盟JP・A・U）
（〒二二二 横浜市港北区篠原北一―一―一菊名ハイツ二〇二）

この写真は数年前三千円くらいのカメラでとったものです。前に住んでいた二階でとりました。前の家の二階には外が見えるほどの穴（直径2センチほど）があいていたので、そこにカメラのレンズをつけて外をとったら写っていたのです。自分の目では見ませんでした。この物体が何であるか調べてください。

菅原百千仁
（〒〇二九―五五 岩手県和賀郡湯田町川尻二区四四―三）

★譲ってください。

No.1を持っておりません。だれか分けてくれる人がいましたら、連絡してください。

塚本和史
（〒四三七 静岡県袋井市高尾六七五―二 電話〇五三八四（二）四四二八）

ぼくは、ものすごくUFOに興味のある中学生です。『コズモ』創刊号がどうしてもほしくてたまりません。だれか千円以下でおゆずりください。

松本浩二
（〒五九〇 堺市南花田町三―三―八）

『コズモ』創刊号をぜひ入手したいと思いますので送料共千円で譲ってください。

町田祐太郎
（〒一六六 杉並区高円寺南五―二八―一七）

創刊号を譲ってくださらなくてもけっこうですから、どなたか見せてください。代わりに2号から下は買っておりますから、それか買ってない号がありましたら、お見せします。

片岡まり子　高3
（〒一八二 調布市深大寺一一六五―四）

創刊号をだれか譲ってくれませんか。おねがいします。

島田明知（16）
（〒五一四―〇一 三重県津市栗真小川町八六九―七三）

『コズモ』創刊号を送料共千二百円までで譲ってください。

深沢芳光　高一
（〒四二〇 静岡県静岡市瀬名四〇三の一一）

『コズモ』創刊号を五百円で売ってください。ウルトラ円盤きちがいバカより

関　貴志
（〒一九四 町田市金森一―七―八）

『コズモ』創刊号を譲ってください。消えたアトランティス（集英社新書）という本と交換してください。

鈴木春寿
（〒四四六 愛知県安城市大東町五―一六）

★複写サービス

『コズモ』創刊号希望の方へ
ゼロックスにてサービスいたします。実費として六百円をお送りください。さっそくコピーをお送りいたします。詳細は〇三―九〇一―〇五四一、内線二二一へお電話ください。

深見親雄
（〒一一四 東京都北区中十条三―一〇―一 星川方）

★本誌バックナンバー(既刊号)在庫分
第5号(1974年3月発売) 各定価 ¥330
第6号(1974年5月発売) 送料 { 1冊¥85 / 2冊¥145
●創刊号より第4号までは売切れ。在庫なし。

●ご注文は振替・現金書留・小為替・低額切手等により必ず前金でお願いします。代金後払いはおことわり。
送り先 〒110 東京都台東区秋葉原3－3，アキバビル
コズモ出版社 振替・東京119478

—本誌掲載主要記事—

創刊号 世紀の謎—UFO／UFO対談「私はUFOを見た」＝元気象庁長官畠山久尚理学博士「円盤は夢をもたせてくれる」写真家・大辻清司「不思議な現象に関心を持とう」＝作家・小松左京「円盤は実在する。私は何度も見た」＝イラストレーター・横尾忠則／浅間山上空に円盤が出現／多条光線を放つ円盤ゴードン・クレイトン／フランスの怪奇—火の玉UFO事件 F・ラガルド／ある夜の美しい出来事／**神々の戦車(1)** エーリッヒ・フォン・デニケン

★・★・★・★・★・★・★・★

第2号 私は円盤に乗った！ダニエル・フライ／ネス湖の怪物とUFO F・W・ホリデイ／類人猿・怪物・UFO クラーク＆コールマン／輝く球体が室内に侵入！アデル＆レドン／オレゴン州の円盤写真 アドリアン・ヴァンス／UFOの科学的観測法 清水畑博／1966年のウッドストックUFO祭典(1) バートルド・シュワルツ／**神々の戦車(2)** エーリッヒ・フォン・デニケン

★・★・★・★・★・★・★・★

第3号 パプア島の円盤騒動(1) ノーマン・クラットウェル神父／円盤の中に連れこまれた男(1) 南山 宏／1966年のウッドストックUFO祭典(2) バートルド・シュワルツ／**東京大地震は発生するか** 気象研究所地震研究部長・諏訪 彰／エゼキエルは何を見たか／**神々の戦車(3)** エーリッヒ・フォン・デニケン

第4号 日本古来の天空人出現説考(1) 斉藤守弘／ドラギニャンに出た円盤 シャセーヌ＆モル／**パプア島の円盤騒動(2)** ノーマン・クラットウェル神父／アルゼンチンの驚くべき瞬間遠隔移動 オスカー・ガリンデス／**1966年のウッドストックUFO祭典(3)** バートルド・シュワルツ／**空飛ぶ円盤は存在する** 橋本 健工学博士／**神々の戦車(4)** エーリッヒ・フォン・デニケン

★・★・★・★・★・★・★・★

第5号 日本古来の天空人出現説考(2) 斉藤守弘／複雑怪奇な点滅光跡の謎 高梨純一／円盤の中に連れこまれた男(2) 南山 宏／ミシガン州光体目撃事件 アレン・ユートク／私のUFO目撃体験記 清水畑 明・太田博久／**太陽エネルギーと水で無限の燃料を！** 東大生産技術研究所・渡辺 正／**神々の戦車(完)** エーリッヒ・フォン・デニケン

★・★・★・★・★・★・★・★

第6号 日本古来の天空人出現説考(完) 斉藤守弘／イベリア半島のUFO着陸事件 オルモス／円盤の中に連れこまれた男(完) 南山 宏／エドガー・ケイシーの予言による世界の大変動 常岡理太郎／**地球自転速度が急変！** 東大東京天文台・飯島重孝理学博士／**宇宙・引力・空飛ぶ円盤(1)** レナード・クランプ

●UFO目撃報告と写真を募集

UFO（未確認飛行物体）の目撃報告と写真を募集します。左に掲げた各項目を参考にして、なるべく正確な詳細な報告をお送り下さい。掲載された分には薄謝を呈します。写真の場合はできればネガもいっしょにお送り下さい。ただし本誌に掲載後に偽作であることが判明してトラブルが生じた場合、本誌は一切の責任を負いませんので、その点をあらかじめご了承下さい。その他、各種新聞雑誌などに掲載されたUFO関係の記事・写真類の切抜きも歓迎します。

●UFO目撃報告用参考事項

(1)目撃者＝住所氏名（できれば本人の写真を添える）、年齢、職業（学生の方は学校名・学年）、電話番号。（匿名を希望の場合は本名明記の上、その旨を付記すること）同時目撃者の有無、その他。
(2)目撃場所＝地名、付近略図、時刻、天候、目撃継続時間、その他。
(3)物体＝飛行物体の形（スケッチを添えること）、大きさ、色、その他。
(4)飛行状態＝仰角、方向、飛行中の形態の変化、飛行中の色の変化、飛行中の光度の変化、推定速度及び高度、その他。
(5)観測機器＝使用の場合はその機器名、性能その他を付記する。
(6)撮影用具＝カメラを使用の場合はカメラ名、使用フィルム、レンズ名、絞り、シャッタースピードその他のデータを付記する。

送り先 東京都台東区秋葉原三の三、アキバビル
コズモ出版社UFO資料調査部

●目撃報告とは別に、「読者の声」欄を設けています。本誌に対する感想、UFO問題に関する所感等をふるってご投稿下さい。宛先は「コズモ出版社、読者の声係」

Across the Editor's Desk

⊙創刊以来満一ヵ年、全国の誌友の絶大なご支援のもとにコズモは大きく成長し、今や国内外でトップクラスのUFO専門誌として広く愛読されるようになりました。すでに創刊号から第4号までは品切れとなり、創刊号の古本に二千円の値をつける人も出ています。今後ますます内容が充実するよう努力しますので、ご協力をお願いします。ご意見は何なりとお寄せ下さい。

⊙昨年来国内でUFO出現事件が急増していますが、どういうわけか、特に北海道と静岡県の富士山近辺で異常なほどひんぱんに目撃されるようです。

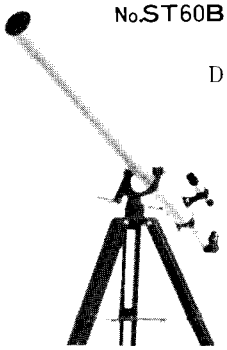
⊙ひと昔前は円盤実在論をとなえようものなら嘲笑されるのがオチでしたが、近頃のUFO研究熱の上昇ぶりをみれば隔世の感があります。若い人達の宇宙的視野が開けてきたのでしょうか。ちなみにUFOは「ユーフォー」と発音されるのが普通です。（K）

UFOと宇宙 一九七四年八月号 **第7号**
コズモ
編集発行人 久保田八郎
発行所 株式会社 **コズモ出版社**
〒110 東京都台東区秋葉原三の三 アキバビル
電話(二五五)八七八四、七〇一九
振替・東京1194778
印刷所 大日本印刷株式会社
昭和四十九年八月一日発行
(隔月刊・奇数月二十日発売)
定価三三〇円・送料八五円
年ぎめ購読料・送料共二三〇〇円
(地方の書店で入手できない場合は本社へ直接ご注文下さい)

●本誌掲載記事・写真の無断転載を禁じます。
●海外の記事はすべて翻訳転載権取得済。

スリービーチ望遠鏡

No.ST60B 屈折経緯台

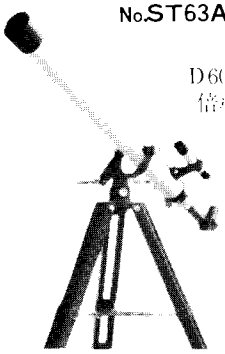


D60㎜ F800㎜
倍率 160×
100×
44×
上下微動装置

¥16,000
送料 ¥800

性能 1.93秒・10.7等星・73倍

No.ST63A 屈折経緯台

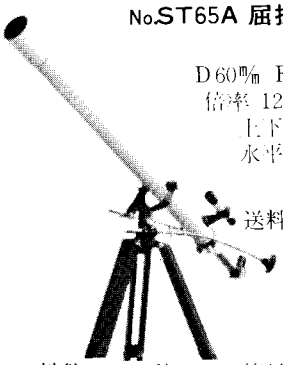


D60㎜ F1,000㎜
倍率 125× 55×
上下微動装置

¥16,500
送料 ¥1,000

性能 1.93秒・10.7等星・73倍

No.ST65A 屈折経緯台



D60㎜ F1,000㎜
倍率 125× 50×
上下微動装置
水平微動装置

¥23,000
送料 ¥1,000

性能 1.93秒・10.7等星・73倍

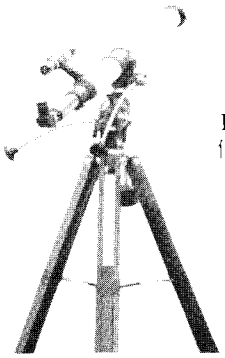
No.ST67B 屈折経緯台

D60㎜ F1,000㎜
倍率 200× 125×
50×
上下微動装置
水平微動装置

¥27,000
送料 ¥1,000

性能 1.93秒・10.7等星・73倍

No.SST600 屈折赤道儀

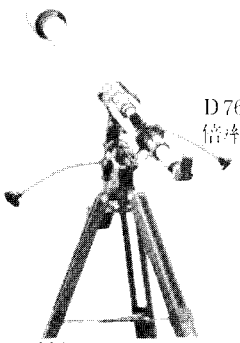


D60㎜ F950㎜
倍率158× 76×
43×
経緯微動装置
経緯目盛環

¥38,000
送料 ¥2,000

性能 1.93秒・10.7等星・73倍

No.SST80 屈折赤道儀



D76㎜ F1,250㎜
倍率 310× 200×
100× 60×
経緯微動装置
経緯目盛環

¥57,000
送料 ¥2,000

性能 1.5秒・11.2等星・118倍

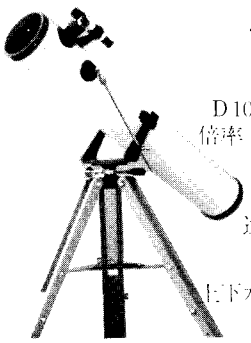
No.SR108B 反射経緯台

D100㎜ F800㎜
倍率 160× 100×
44×
上下微動装置

¥19,800
送料 ¥1,000

性能 1.2秒・11.8等星・195倍

No.STR100A 反射経緯台



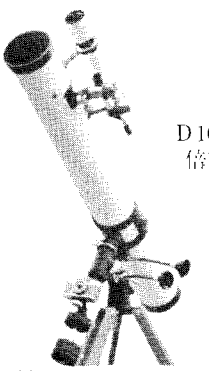
D100㎜ F900㎜
倍率 180× 110×
45×

¥26,000
送料 ¥1,000

上下水平微動装置

性能 1.2秒・11.8等星・195倍

No.SS1000G 反射赤道儀

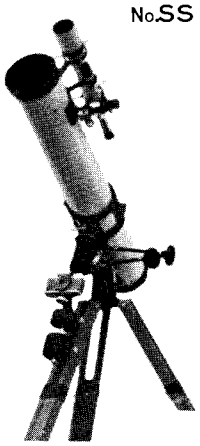


D100㎜ F1,000㎜
倍率 200× 125×
55×
経緯微動装置
経緯目盛環

¥62,000
送料 ¥1,500

性能 1.2秒・11.8等星・204倍

No.SS1200G 反射赤道儀

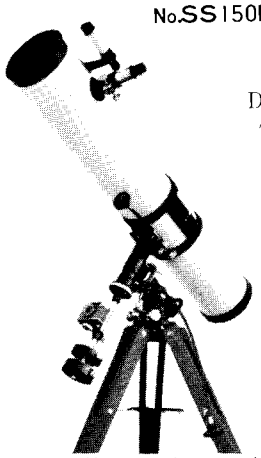


D100㎜ F1,200㎜
倍率 240× 96×
67×
経緯微動装置
経緯目盛環

¥62,000
送料 ¥1,500

性能 1.2秒・11.8等星・204倍

No.SS150EA 反射赤道儀



D150㎜ F1,200㎜
倍率 200× 100×
67× 48×
経軸微動装置
緯軸微動装置
上下桿微動装置
水平ネジ微動装置
経緯目盛環

¥120,000
送料 ¥4,000

性能 0.8秒・12.7等星・460倍

● 反射式は光軸修整用アイピース付

くわしくは切手¥120同封の上、総合

カタログ No.10

申込み下さい。

〒121東京都足立区
東島根町2392

K.K. スリービーチ

サービスセンター
KM 係

SYW

サテライト天体望遠鏡

ヤマモト

新発売

60mm屈折径緯台
MODEL A-7

定　　価　32,000円
荷造送料　1,500円

●光学的性能

有効径	60mm
焦点距離	700mm
集光力	73倍
分離能	2.0秒
極限等級	10.7等

●付属品

接眼鏡　（倍率）
SR-5mm　140倍（280倍）
R-20mm　35倍（70倍）
〔（　）内はバーローレンズ使用〕
2倍バーローレンズ
5倍ファインダー
天頂プリズム
地上用正立プリズム
サングラス

●格納箱
発泡スチロール入り木箱

ヤマモトの天体望遠鏡は海外で絶賛を博しております。

メーカーからユーザーへ！
通信販売のお知らせ！

●上記の他各種あります。詳しくは115円切手同封の上カタログをC係へ御請求下さい。

株式会社 山本製作所

東京都板橋区大原町5－3
電話 966-2408　郵便番号 174